

塔が見える街

塔が見える街

長谷川
雄治

第一話

雲一つない青空に、白球が綺麗な弧を描いている。

「そっち、行ったぞ」

センターを守っていた駿が、こちらに駆け寄りながら声をかけて来た。僕もボールを見上げながら、オロオロと後ろに下がる。頭上に掲げたグローブの中へボールは収まらず、僕の足元に落ちたボールを拾った駿は、助走を付けるとホームのキャッチャー古谷まで、ノーバンでバックホームした。

相手チームの追加点にはならず、試合途中のままチャイムが鳴って、授業は終わった。挨拶も程々に、道具を片付けながら更衣室へ引き上げる途中、駿に呼び止められた。彼は、右肩を押さえながら、古谷も手招きする。

「コイツと保健室寄ってくから、ヤッセンによく言つといて」

彼は当然のごとく、「じゃ、よろしく」と古谷を連れて保健室の方へ去っていった。

駿と古谷を欠いたまま、何事もなく数学の授業が始まった。これが終われば、今日の授業は終わり。日付的には当てられることもない。教室を見渡せる窓際の席から、ボーッと全体を眺めていると、駿と古谷が保健室から戻ってきた。ヤッセンは、「早く座れ」と一言言うだけで、板書に戻る。

「で、どこだっけ？」

右腕を欠いた駿は、器用に左手一本で教科書とノートを取り出した。僕は無言で教科書を指し示し、小声で「左手だけでどうするんだよ」と聞いた。駿は、

「後でノート借りるな」とヤッセンに聞こえないように答えた。

ノートにしつかり板書を写したところでさっぱり飲み込めないのに、駿のお陰で真面目にメモを取らなければならなくなった。ヤッセンに消される前に、これまでの板書をなんとか写し切った。

チャイムが鳴り、ヤッセンと入れ替わりに担任の加藤が入ってくる。特に連絡事項もないホームルームの間に、駿は僕のノートを返してきた。僕の目はどうし

でも、駿が失った右腕に行ってしまう。古谷の方は、身体に似合わない華奢な左腕が付いている。

「お前はもう帰るんだろ？」

「そっちは？」

「部活に決まってるんだろ。あつという間に夏だぜ？」

駿は付け根から先がない右肩をぶんぶん回し、古谷に「さ、行くぞ」と声を掛けて教室を出て行った。

「レギュラーかかっているもんなあ…」

後ろから声を掛けてきたテツちゃん、ロッカーの方へ足を運ぶ。渡り廊下の出口で、「じゃ、ココで」と彼は言う、右手の家庭科教室へ入っていった。帰宅部の僕は、一人で下足に履き替え、通用門の方から駐輪場へ向かう。左手のグラウンドで、駿も古谷も野球部の練習に参加していた。駿は、片腕のままだった。白球を追いかけて遠ざかる駿を見ていたら、後ろの方から柔らかな風が吹いてきた。今度はそちらへ目を向ける。しなやかで美しい四肢が、ゆつたりと宙を舞う。白いシャツと日に焼けた肌、青い空のコントラストは、いつまでも見ていたかった。

見事な背面跳びを決めた江辺野さんは、素早くマットから身体を起こし、僕の視線など気にすることなく、シャツの袖で汗を拭う。勝ち気な視線とぶつかっても、彼女は何も言わず、高跳びの練習へ戻っていく。

彼女以外は、ほぼ全員が陸上競技用にチューニングされた強化型の脚を付けている。加工も課金もなし、純然たる炭素製の自前の足で、誰よりも遅い助走で、誰よりも低いバーを跳んでいる。フォームにまだバラつきがあるのに、ナチュラルな跳躍が気になつて仕方がない。

引っ掛けて落としてしまったバーを戻し、順番待ちの列へ戻る途中で、こちらに近づいて来た。フェンス側の荷物から、水筒を取り出した。グラウンドの方がちよつと高い位置にあるせいで、ここからはお尻を見上げる形になる。

江辺野さんは、タオルを取り出して汗を拭った。肩にかけ、もう一度水を飲む。

「覗きの趣味でもあった？」

彼女の問いかけに、僕は「別に」と首を振った。彼女は「ふん」と言いながら、タオルと水筒を鞆に押し込んだ。首元の隙間から、中がチラッと見えた気がする。江辺野さんはニヤリと微笑んで、小さな声で「えっち」と呟いた。僕は慌てて背中を向け、いつもより早歩きで、自転車置き場を目指した。

「まー君、いつもゴメンね」

洗濯物も片付けて、真珠の世話を母さんにボタンタッチしたら、今度はばあちゃんの付き添い。離れの玄関から入り直して、表へ回した車まで誘導する。ばあちゃんが後部座席に乗って、シートベルトを締めたことまで確認したら、運転席へ移動する。

死亡事故もほとんどなくなった自動運転、万が一のハンドル操作ぐらいしか役割はないけど、安全運転でいつもの総合病院へ向かう。ハチ公タワーが見えて来る頃、フロントガラスにポツポツと雨粒が落ちてきた。今朝の予報通り、車には傘も乗せてある。

病院に着いたら、いつも通りにリハビリ科の五十嵐先生へばあちゃんを引き渡し、万が一の呼び出しに備えて待合室の薄い椅子に腰を下ろした。いつものように、爺さん婆さんで埋まっている。

いつも通り、何事もなければここから九〇分。尻は痛くなるけど、今日も持ち込んだLSノートを開き、ペンを手に取った。空想の世界で、現実逃避だ。

今日見た光景を脳裏に思い描きながら、時折、待合室を行き交う人の様子を観察する。たまには備え付けのテレビも見ながら、ノートに書きたい世界を足していく。一瞬見えた小ぶりの膨らみや谷間は、——忘れよう。

「あれ、まー君？」

急な声かけに、身体が大きく跳ね上がった。鼓動も大きく早くなる。声が出た方へ振り返ると、入駒がいた。十年ぶりぐらいにじっくり見る顔は、紫外線焼け以外のアザもあるように見える。

「隣、いい？」

入駒は、僕の返事も待たずに開いていた隣の席へ腰を下ろした。彼女は、露出がやや多い格好で、教室で見る制服姿より大人びて見えた。

「どうしたの？」

「ばあちゃんの付き添いで。入駒は？」

彼女は「入駒だなんて、そんな」と言いながら、腕をさする。

「補修に」

補修？ 打ち身の受診じゃないのか。

「こうやって話すのも、久しぶりだね」

僕は曖昧に、聞こえるか聞こえないぐらいかぐらいの声で「そうだね」と返し

た。

「同じクラスになったら、もっと喋れると思ったのに」

こうやって、入駒と並んで話すのは未だに緊張してしまう。小学校へ上がる前、幼稚園の卒園式後に告白されて以来、この春から再会しただけなのに。子どもだったからなのか、少しだけ大人になったからなのか。

周りの目が気になる思春期だからか。彼女の場合はそもそも――

「じゃあ、もつと登校して来いよ」

「そうだよ。まー君の言う通り」

不登校とは言わないが、進級も危ぶまれるレベルで休んでいる。なぜ休んでいるのか、その理由も何となく察しはつく。入駒はやや伏し目がちになり、会計へ呼び出された。荷物を持って、呼び出し口へ向かう。会計を済ませるまで何となく見ていると、傘は持っていないように思える。

入駒はこちらへ振り返ると、手を振ってそのまま出口へ向かおうとする。僕は自分の荷物を椅子に置き、顔馴染みの婆さんに番を頼むと、傘を握って彼女を追いかけた。

「祭ちゃんっ」

一足先にポーチへ出た入駒は、呼びかけに足を止めて嬉しそうに振り返った。

僕は、自分の傘を彼女に突き出す。

「いいの？」

僕は何も言わず、傘をさらに突き出した。

「本当に？」

一瞬、ばあちゃんが濡れるなと思ったけど、家に帰り着いた時のことは、後で考えればいい。何度も繰り返したあのアニメ映画みたいに、入駒に傘を押し付ける。

「じゃあ、遠慮なく」

「今度、学校で返してよ」

入駒は笑顔で頷くと、傘を差して駅のほうへ歩いて行った。それが、彼女と交わす最期の言葉になるとは、この時、思いも寄らなかった。

第二話

修学旅行までに戻って来ればいいと思っていた僕の傘は、赤茶色のサビと白い粉に塗れていた。青白い体液を保っている部分もある。それを見て、「電池の液漏れと同じ色だ」と、どうでもいいことを考えていた。

傘は、ビニール袋に包まれていた。ビニール袋ごと差し出して、織林と名乗った女性刑事は、「君のもので間違いないね?」と言った。元々の造作に自信があるのか、朝からの呼び出しで化粧する暇がなかったのか、ボブカットの髪は整っているのに、ほぼすっぴんに見える。

僕は頷いて、ビニール袋に手を伸ばすと、後ろの席で学生証を確かめていた米利と名乗った体格の良い男性刑事が、「まだ鑑定中なんだ。悪いね」とビニール袋を回収した。同席の記録係が証拠品を持って退室する。

「コレもありがとう。確認は取れた」

米利刑事は学生証を差し出すと、織林刑事の隣に座った。威圧感を減らすためか、彼女より随分後ろに椅子を引く。

「遺体に残っていた補助記憶との照合結果も、間違いない」

「甲斐益巳さん、あなたは昨日、入駒祭さんにこちらの傘を貸した。間違いないですね?」

織林刑事の質問に、僕は回答を飲み込んだ。補助記憶を見たのなら、わざわざ確かめなくても良い。米利刑事の鋭い目は、僕の一拳手一投足、どんなに些細な表情の変化も見逃すまいとしているらしく、微動だにしない。

「昨夜、六月九日の午前二時から四時の間、どこで何をしていましたか?」

織林刑事の詰問は、僕の返事を気にすることなく、機械的に進んでいく。

「これって、任意の事情聴取ですよ?」

僕は、後ろで腕組みをしている米利刑事に言った。米利刑事は腕組みを解き、口角を上げて、「そうだ」と言った。米利刑事はゆっくり立ち上がると、織林刑事の肩を叩いた。ポットの方を顎で示し、さっきまで自分が座っていた椅子を引き寄せる。

「この部屋でのやり取りは、映像も音声も全て記録されている。要求すれば、開

示も可能だ。当然、君の黙秘権もある」

米利刑事は背もたれを前にして、椅子に座った。

「僕に容疑がかかっているんですか？」

「それには答えられない。念のため、形式的なもんさ。昨夜、というか今朝まで、君はどこで、何をしていた？」

米利刑事は、「答えられる範囲で構わない」と付け加える。黙秘権を行使しても構わないが、変な嫌疑をかけられるのも、印象が悪くなるのも避けたい。僕は、「自室で寝ていた」と答えた。

「それを証明する人は？」

自宅にも離れにも家族はいたが、深夜にズツと寝ていたと証明するのは難しい。僕が答えあぐねていると、「まあ、そうだろうな」と米利刑事は頷いた。

「十六歳の男子高校生が夜中に部屋で何してたか、証明なんか無理だよなあ」

織林刑事が入れたコーヒーを啜りながら、「俺もそうだった」と彼は言った。

僕の前には、湯呑みに入った緑茶が置かれる。米利刑事は「飲んで」と手で促すが、湯気が立っているお茶に、スツと手を伸ばせる心境ではない。

お盆を元の場所へ戻した織林刑事が、米利刑事の隣に座る。

「被害者に、何か変わったところはなかったかな」

米利刑事の真面目な口調に、僕も釣られて真剣に昨日の様子を思い出す。変わったところも何も、最近の、普段の彼女をそこまで見ていない。たまに学校へ来た時の姿とか、断片的にしか覚えていない、幼い頃の彼女の様子ぐらいしか、覚えていない。

夢洲の駅前で、遅い時間に露出の多い派手な格好で、ヤンチャそうな若い人たちと集まっているのは見たこともあるが、ここで話すべきことではないように思う。

「昨夜、たまたま総合病院で見かけただけなので」

「総合病院で？ 君はなぜそんなところに」

「祖母のリハビリで、定期的に付き添いを」

いつの間にか部屋に戻ってきた記録係が、米利刑事に何かの資料を手渡した。彼はそれと僕の証言を突き合わせているらしい。時々、「なるほど」とか「合ってるね」と相槌を打った。

「彼女が病院に来た理由は？」

「補修だと言っていました」

「補修ねえ…」

外回りが多いのか、六月の頭だというのに、米利刑事はよく焼けた肌をしていた。織林刑事の肌は、綺麗な灰白色。長時間屋外にいない限り、紫外線焼けが起ころうな時期ではない。

「他に、気になったところはある？」

「例えば、外傷とか」

織林刑事が、米利刑事の言葉に付け足した。そういえば、顔にアザがあったような。あまり触れない方が良さそうな話題だけに、答えに迷う。僕をじつと観察していた米利刑事は、資料に目を落とした。

「被害者の素行不良や、家庭内暴力は報告されている。彼女の父親からの証言も取れているが、事件当日の暴行や、遺体から電子を含めたドラッグ等の検出は報告されていない」

その言葉に、なぜか少しホツとした。良かったと言える状況ではないのに、自分の中の罪悪感、モヤモヤが少し減った気がする。

「アザとか、派手な格好はちょっと気になりましたけど」

「それが直接的な死因に繋がった可能性は低い、というのが現状だ」

「新しい手がかり、出ませんね」

僕の目の前で溜息をついた織林刑事を、米利刑事は「バカ野郎」と怒鳴りつけた。

「同級生が亡くなってるんだぞ。なんだ、その態度は」

織林刑事は非常に申し訳なさそうに、僕に謝った。米利刑事は、「頭が高い」と彼女の頭を机に押し付ける。僕はオロオロしながら、「もう、大丈夫なんですよ」と言った。

「ウチのバカが、大変失礼した」

おでこが赤くなった織林刑事に「大丈夫ですか？」とハンカチを差し出すと、彼女は「ああ、結構です。ありがとうございます」と、しょんぼりした様子で答えました。

「事件解決まで、ちよくちよく話を聞かしてもらえない。協力、よろしくお願いします」

米利刑事は立ち上がり、隣に立つ織林刑事と、深々と頭を下げた。

「こちらこそ、よろしくお願いします」

同級生、幼馴染の死の真相を知りたいのは、僕も同じだ。座ったまま、頭を下

げた。米利刑事に頭を掴まれていた織林刑事が、少しだけ顔を上げた。

「ちなみに、フィロウィルスってご存じですか？」

「フィロウィルス？ いえ、全く」

米利刑事は「何聞いてんだ、このバカは」と、織林刑事の頭をもう一度下げさせた。一瞬、鋭い眼光で僕の方を見たような気がする。

「もう、良いですか？ 今から、彼女のお通夜なので」

「ああ、すみません。ご協力ありがとうございます」

僕が席を立つと、来た時と同様に、記録係が出口まで案内してくれようとするが、米利刑事が織林刑事に「お前が行け」と促した。僕は彼女の先導に従って、夢洲署の玄関まで向かう。

入駒祭は、死んだ。蘇生も遺品整理もされず、廃棄処分される。機能不全の後期高齢者でも、遺品整理と部品回収がなされ、クリーニングと輪廻、転生を経るはずなのに、廃棄処分？ 換装も交換も蘇生もできないなんて、一体何が起きているのか、僕の頭では処理できなかつた。

「あ、そうそう。もう一つ」

建物を出たところで、織林刑事が足を止め、手帳とペンを取り出した。薄手の手帳に、何やら図形を描いている。

「こんなマーク、見たことない？」

彼女は、紙を千切って図形を僕に見せた。本物を見かけなくなって久しい蝟燭のような図形に、雷が重なったようなマーク。どこかのロゴマークにしては、あまりセンスがないような気がする。

「いえ、全く」

どこかで見かけていても、あまり印象に残る図案でもない。織林刑事は少し残念そうな表情を浮かべ、「そう？ じゃあ、お気をつけて」とマークを書き付けた紙片を僕に押し付け、警察署の入り口で僕が敷地を出て行くまで見送ってくれた。

第三話

真珠を連れて、最寄りのスーパーへ買い出しに来た。今夜は僕が夕飯を作らねばならない。献立を考えながら会計も終え、出入り口間近の休憩スペースで真珠がプリンを食べ終えるのを待っていると、全身黒でまとめたサングラスの男に声をかけられた。

「こんばんは。と言うにはちよつと早いかな」

サングラスで長身の、いかにも怪しい男はサングラスをズラして微笑んだ。先日から学校に来ているスクールカウンセラーの、真境名先生だ。僕は、「どうも」と挨拶して、真珠のことも紹介する。

「ああ、君は確か、ヤングケアラーでしたね」

「いや、そんな。妹と祖母の世話を手伝つてるだけですよ」

世間には、僕より大変なヤングケアラーは沢山いる。命の恩人でもあるばあちゃんのリハビリに付き合うのも当然だし、兄貴が妹の世話をするのも当たり前だ。「妹さんは、聴覚と声帯に不具合がある、とか。生まれつきの不備とか、不適合とか、大変でしょう」

真境名先生は、僕ではなく、真珠に語りかけているようだった。サングラスの奥の彼の眼は、二つとも古いタイプの義眼らしく、炭素製の身体には不適合だったらしい。長袖やズボンの下も、手術痕や適合問題による副反応が出ていると、学校で紹介された時に聞いた気がする。

「そうだ。そんな君に」

真境名先生は、自分の買い物袋から、小さなタブレットが詰まった筒状の入れ物を取り出した。形状的にはラムネつぼいが、商品名やラベルには見覚えがない。「これを差し上げよう」

彼は、そのラムネを僕に差し出した。未開封で、今買ったばかりの品物に見える。僕が躊躇っていると、真境名先生は「たかだか、ワンコインの駄菓子ですよ。安月給とはいえ、これぐらいは知れてます」と言った。

「ヤングケアラーのご褒美ですよ」

僕がいつまでも受け取らずにいると、彼は僕の買い物袋にそれをねじ込んだ。

「じゃあ、また学校で」

突き返す前に、彼はスーパ―を出て行った。一人でどうしたものか悩んでいると、真珠はプリンを食べ終わったと合図した。空のプラカップとスプーンを、休憩スペースに備え付けのゴミ箱に放り込み、母さんのママチャリに荷物と真珠を乗せて帰宅した。

夜の家事も一通り終え、真珠も自分の部屋で静かに寝ている。父も母もまだ帰ってくる気配はない。離れのばあちゃんも、もう床に就いたらしい。

僕も風呂を済ませ、今日の分の現実逃避に没頭する。二時間ほど、文章と想像の世界に浸っている間に、父や母は帰宅したらしい。リビングの方が賑やかなったかと思えば、今度は風呂で水を使う音が聞こえてくる。

もうそろそろ日付が変わる。流石に寝よう。小腹は空いたけど、歯を磨くために洗面所へ降りるのも面倒臭い。小さなラムネでブドウ糖を補給するぐらいなら、大丈夫かも。さつき、先生にもらったラムネを引き出しから取り出した。

ベッドに寝転んで照明にかざしてみる。見れば見るほど、見覚えのない商品名とラベルだ。プラスチックのボトルに透けて見える中身のタブレットにも、一つ一つ小さなマークが刻み込まれている。

印象に残りにくい、簡易な図形を組み合わせたこのマーク、最近、どこかで見たとよな…。本棚から、クリアファイルを引っ張り出した。この前、織林刑事に押し付けられた紙を、畳んだままここに突っ込んだ。学校でもらうどうでも良い印刷物を避けながら、目的の小さな紙を引っ張り出す。

ボトルのラベルにも記載された、蠟燭と雷のマーク。線に縁取りがついて多少見栄えは異なるが、あの時書かれた図案とそっくりだ。小さくて丸いタブレットに刻まれているのも、どうやら同じマークらしい。

このマークがあるから何なのか、あの時ちゃんと織林刑事に聞いておけば良かった。このラムネをくれた真境名先生にも、商品のこと、マークのことを改めて訊かなくては。

今から連絡を取ろうにも、連絡先が分からない。一旦ラムネは開けず、カバンに詰め込んだ。ラムネのことは明日、学校で問い詰めよう。マークの件は、それが片付いてから解決するか。

とりあえず、今夜は寝よう。明日に響く。途中までやった現実逃避をしっかりと保存して、部屋の明かりを消す。布団に潜り込んだところで、微妙に興奮したま

ま眠れるかは分からない。兎にも角にも瞼を閉じよう。今日はもう寝るんだ、寝るんだ、寝る…。

ケータイのアラームで目が覚めた。寝れるかどうか心配したのが無駄だったレベルで、スツと寝入ってしまった。夜中に目が覚めることもなく、朝までグッスリだった。寝間着から着替え、忘れ物がないかチェックしたカバンを持ってリビングに降りる。

昨夜は顔を見ることもなかった父さんも母さんも、今朝は揃っていた。

「おはよ〜」

母さんは僕に弁当を渡しながら、食卓についた。僕は弁当をカバンに詰め、自分の食パンをトースターに放り込む。紅茶用のお湯が沸くのを待ちながら、テレビを見ていた。お堅いニュースというより、ややバラエティ寄りの情報番組。普段であれば、もうそろそろ始まる天気予報を見てから、父さんは朝刊を握りしめたまま出社する。

今日は珍しく、遺体発見のニュースが続いていた。先週と似たような内容の、同級生の遺体発見の報。

「――身元が判明しました。夢洲高校に通う男子高校生、二年生のフルヤトモノブさん」

テレビ画面に、集合写真から切り抜いたらしい古谷の顔写真とフルネームが映し出された。

初出 令和四年一〇月二二日 noteにて公開

第四話

「便宜上真境名さんと呼ばせてもらうが、アンタ、何者だ？」

両方とも袖を捲った米利刑事は、拘束衣を着て両手に手錠をかけられた真境名先生と向き合っている。僕がああ椅子に座ってから、ほぼ一週間。こうやって、客観的に見るとは思わなかった。

「登録された住所からは、身元不明の仏さんが発見された。異臭騒ぎが起らないように、見事な事後処理がなされて、だ」

「見事」のところで、彼は「どうも」と笑みを浮かべた。
「現物をご覧になられたんですか？」

米利刑事は、後ろに控えている織林刑事に視線を送る。彼女は怯えた様子で首を縦に振った。米利刑事は手元の資料に視線を落とす。

「報告書によると、何事もなかったかのように綺麗な現場だった、そうだ」
中身を読み上げながら、添付の写真でも見ているらしい。

「あのポロアパートの部屋でコレ、か。その手の趣味でもあんのかい？」

「いいえ。ただ、騒ぎにはしたくなかったの」

真境名先生は、拘束具も手錠も全く気にならないらしく、学校ですれ違う時と同じ調子で、淡々と答えた。米利刑事は「騒ぎにはしたくなかった、ね」と呟きながら、真境名先生をジッと睨みつける。鋭い視線にも、微塵もたじろぐ様子はない。

「そろそろ名前ぐらい、教えてもらってもいいんじゃないかな。コレから、長い付き合いになるんだし」

「私は、真境名大吾。最近、やっと非常勤の職を得たスクールカウンセラーですよ。それでいいじゃないですか」

真境名先生は、不敵に笑った。米利刑事は微かなイラ立ちを顔に出しながら、平静を装って例のラムネを彼の前に突き出した。

「コレはなんだ？」

「見ての通り、ただのラムネ。ただの駄菓子ですよ」

真境名先生はラムネのボトルを舐め回すように見る。

「おや、未開封ですね。せっかくのプレゼントを」

彼の視線が、マジックミラーを通して僕に向けられた。向こうからは見えていないはずなのに、そんなことは無関係とばかりにその目は僕を威圧する。

「ラムネのことなら販売元か、製造元に聞いてくださいよ。私に質問されても、お門違いだ」

真境名先生は、拘束も本意だと言わんばかりに、米利刑事にアピールする。

「カッコよかったか、ダイブだったか。当日のレシートはまだありますから、調べてもらって構いません。もつとも、渡した彼に訊いてもらう方が早いかもしれないが」

真境名先生は再び、僕を見た。

「しばらく帰っていない部屋で死体が発見されただけ、ですよ？ 赴任先の生徒が亡くなったのも、私と何の関係があるのか。証拠不十分でコレは、不当でしょう」

米利刑事は不満そうな表情を浮かべるが、一呼吸置いて係員を呼んだ。呼ばれてきた人の手で、拘束衣と手錠が外される。真境名先生は両手首を軽く動かしながら、米利刑事が次に何を言うか、待っているように見えた。

米利刑事は手帳とペンを、真境名先生の前に叩きつけた。金属製の机が、大きな音を立てる。真境名先生は、眉を少し上げ、おどけているように見えた。

「重要参考人の一人であることは変わらない。連絡先の記入、ご協力願えるかな」

米利刑事は極めて落ち着いた口調で言った。真境名先生はペンを取り、軽やかに電話番号、メールアドレスを書き込んだ。米利刑事に手帳とペンを返すと、受け取った米利刑事はその場で番号をコールした。こっちのブースに置かれていた真境名先生のカバンの中から、呼び出し音が聞こえてくる。

「コレでいいですか？ あなた方のおかげで、すぐにでも新たな職を探さなきゃならないので」

真境名先生の問いかけに、米利刑事は回答を保留して、織林刑事の方へ視線を送った。彼女も少々悩んだ様子で、ややあつてようやくといった様子で頷いた。

米利刑事は、顎で「お前が連れて行け」と無言で示した。織林刑事はビビりながら、真境名先生を連れて部屋から出てくる。

彼らはこちらのブースへやつて来て、真境名先生の荷物を拾い上げた。

「では、また今度」

真境名先生は、僕らの反応などお構いなしに、にこやかに挨拶して出口へ向か

った。隣の部屋から、米利刑事が「クソツタレ」と怒声を上げながら、パイプ椅子を蹴り倒す音が聞こえてくる。手の中のラムネボトルは、ふるふるすると小刻みに震えていた。

「本当にアイツじゃないっていうなら、古谷は誰が」

僕の隣で、相変わらず右肩から先がない駿が、行き場のない怒りを押し殺していた。この様子だと、左手も出力調整のミスで自壊するかもしれない。彼のようなアスリート用の部品は、部品不足で製造が間に合っておらず、このままでは夏大でレギュラー獲得は絶望的になる。

「蘇生も無理って、どういうことだよ」

僕は駿に「落ち着け」と促すも、片腕の彼に胸倉を掴まれた。周りの大人が、子どものやり取りに狼狽える。駿の強い怒りが左手に籠っていた。

向こうのブースから、米利刑事に呼び出された。駿に、先に帰るように伝える。「古谷のこと、頼むぞ」

「分かっているって」

駿は僕から手を離すと、スクールバッグを拾い上げて颯爽と部屋を出ていった。案内の大人に付き添われながら、そそくさと出口へ向かう。その背中を見届けながら、入れ違いに玄関から戻ってきた織林刑事と共に、米利刑事のいるブースへ入った。

米利刑事のイライラも相当高まっているらしく、彼は胸元から未開封の棒付き飴を取り出すと、イチゴの匂いを振り撒きながら口に放り込んだ。

「君もいるか？」

僕は手で要らないと意思表示すると、彼は「そうか」と、僕の向かいに蹴り飛ばした椅子を持ってきて座った。彼は再びラムネボトルを弄っている。

「コレをアイツからもらったのが、昨日の夕方、だったな？」

僕は頷いた。

「妹と駅前のダイブで買い物終わりに休憩していたら、たまたま遭遇して」

「駅前のダイブ、で間違いないな？」

僕が頷くと、彼は手帳にメモを取った。

「製造元は、イチコー製菓？」

「商品もラベルも、製造元も、見覚えがないですね」

織林刑事が、横から呟いた。彼女からもらった例のマークが、中のラムネにもしつかり刻まれている。彼女が言う通り、ダイブのお菓子コーナー、ポケット菓

子でこんな商品を見かけた覚えがない。とはいえ、あの先生が、わざわざココまで作ると思えない。

「とりあえず、ダイブの製菓担当とイチコー製菓だな」

米利刑事はそういいながら、僕にラムネボトルを差し出した。僕が困惑していると、彼は「君が持つておいてくれ」と言った。

「嫌ですよ」

「まあ、そういうなつて。ウチも内規があるからさ」

彼は僕の胸ポケットに、それを強引にねじ込んだ。

「ただ、確認が取れるまでは開封しないでくれよ」

「そんな怖いこと、しませんよ」

昨夜寝る前には、封を開けて口に入れようとしていた。コレが直接、古谷の命を奪ったかどうかは定かではないが、一歩間違えていれば僕が「死んで」いたかもしれない。そう思うと、余計に持ち歩きたくはないが、自宅で保管するしかないらしい。

澁々了解すると、米利刑事は椅子に腰掛けたまま、上体を伸ばした。

「調査結果はまだしばらく出てこないし、メシでもどうだ？」

米利刑事は口の中の飴をガリガリと音を立てて噛み砕き、湯呑みのお茶を飲み干した。僕はその誘いを断って、一度帰宅することにした。

「そいつは残念。じゃ、何かあつたらまた連絡する」

彼は、「織林」と横にいた彼女に声をかけ、僕を自宅まで送れと言った。僕はまだ終わらないことに使命感と徒労間に挟まれながら、女性警官との細やかなドライブを楽しんだ。

初出 令和四年一〇月二三日 noteにて公開

第五話

再整備が進んでいても、舞洲の片隅、それも陸上競技場の裏まで来ると、人通りはほとんどない。近隣に商店も監視カメラもなく、死角としてはほぼ百点の場所。花束よりも、血まみれの死体の方が似合うよなどと、不謹慎なことを考える。

目の前に並ぶ決して多いとは言えない花束、お供えの数に、入駒という人間の価値も見えてしまいそうだ。つくづく、自分という人間が嫌になる。こんなことを考えたり、手放したりするために花を添えに来たわけじゃないのに、ここで故人に思いを馳せることで、自分勝手な免罪符を得ようとしている。

「オレって、本当に最低な奴だよなあ」

彼女が好きな花も、クラスメイトに聞かないと分からないし、メモをしたはずの花にも関心を寄せ切れない。形だけ、体裁だけ整えて何を守ろうとしているのか、自分でも、自分がよく分からない。

「入駒はこんなところに、何をしに来たんだ？」

ここで彼女が殺されたのか、殺されてからここへ遺棄されたのか、どちらかもまだ分からない。ここで彼女の亡骸と、僕が渡した傘が見つかったというだけだ。ここへ来る前に、警察から受け取ったコピー傘は、形も材質も完璧だけど、色合いだけ異なっていた。もつと深い色、濃い色でないと元と同じとは言い難い。

陸上競技場の周囲を回るルートで帰路に着く。

「アレ、甲斐くん？」

後ろから、ジャージ姿の江辺野サンに声をかけられた。彼女以外に、陸上部員はいないらしい。こういうところで二人きりというのも、逆に気まずい。彼女はスポーツバッグを肩にかけ、僕と並ぶ形で歩いている。

「帰宅部が、こんなところでどうしたの？」

「別に。そっちこそ、一人？」

彼女は頷きながら、「まあね」と微笑んだ。

「大会が流れちゃったのが悔しくて」

彼女の言い分に納得しながら、自分のせいでもないのに、何故か申し訳ない気持ちにもなる。他の部活でも、練習試合や大会が延期したり、中止になったりし

ているらしい。勝てる見込みもないのに、悔しいからと一人で勝手にやるのは、彼女らしい気がする。

「アホなことしてるなあ、とか思ったでしょ」

「いや、別に」

「じゃあ、何？」

江辺野さんの表情がだんだん曇っていく。僕は慌てて視線を逸らす。江辺野さんの顔は、かえって怪訝な面持ちになる。運良く、バス停の前に来た。切り替えるべく、時刻表を確認する。運悪く、三〇分弱待たねばならない。

江辺野さんもどうやら、次のバスを待つようだ。この状況でじつと待つのは、なかなかキツイ。江辺野さんを見無視してケータイいじりにでも勤しもうか。その手で行こうと決めかけたところで、バス停に備え付けのモニターに、地元のカブテレビがやっている天気予報が流れ始めた。最近、たまに見かけるお天気お姉さんだけど、名前は江辺野？

僕より一足先にケータイをいじり始めていた江辺野さんに視線を送るも、彼女は全くこちらを気にしない。モニターに移るお天気お姉さんは、ちよつと人工的でシンメトリーな顔をしているが、江辺野さんに似ている気もする。

江辺野さんが顔を上げる頃には、天気予報は終わっていた。バスの現在地表示に切り替わっている。

「今の、お姉さんだった？」

江辺野さんは、首を傾げる。ちよつと間を置いて、「ああ、そういえば」とケータイを操作した。画面には、お天気お姉さんの情報が表示される。

「コレね。うん、ウチの姉」

江辺野紫音、大学生リポーターらしい。

「でも、今はほとんど血の繋がりはないんだけどね」

彼女は、バッグを背負い直しながら、ようやくやってきたバスに乗り込んだ。僕は彼女の後ろからバスに乗る。満員というには程遠いが、座席はほぼ埋まっていた。ひとり掛けの椅子も、最後部の座席にも先客がいる。乗降口斜め後ろ、二人掛けの席しか空いていない。江辺野さんは迷うことなくそちらへ行くと、僕に「ここでもいい？」と言った。

「いいよ。僕はその辺で立ってる」

「私が立たせてみたいじゃん。いいから、座ってよ」

彼女は僕の回答を待たず、僕の手を取って隣に座らせた。スポーツバッグを足

元に置き、窓の外を眺めている。僕は出来るだけ縮こまりながら、その横顔を見ている。

「そんな調子で、よくあの班分けしたね。北海道でも、そうするつもりだった？」

江辺野さんは、僕の方を見ながら意地悪そうな笑みを浮かべる。

「女子なんて眼中なし、みたいな人かと思っただけど、そうでもないんだ」

「人と話すのが得意じゃないだけだよ。女子とか、クラスメートとか、関係ない」

江辺野さんは、「えー、ウツソだ」と僕を肘で小突いた。

「顔も性格も悪くないのに、ただのムツツリない人じゃ、彼女はできないぞ」ムツツリは余計だと否定したかったけど、彼女にそれを言える立場ではない。

「そういうば、お姉さんの話だけど、血の繋がりがってどういうこと？」

強引にでも話題を変えないと、こちらの身が保たない。バスに乗る前の話題を引っ張り出した。江辺野さんは、「ああ、その話？」と意表を突かれたように表情を変えた。

「芸能活動したいってソツチに乗り換えたから、生き物としては全くの別物ってこと」

彼女は僕のことを指差しながら言った。僕は、「ああ、なるほど」と相槌を打つ。

「もっと色々弄りたかったらしいけど、予算不足であの通り」

江辺野さんがさつき見せてくれたお姉さんの画像を、短期記憶から引っ張り出す。ぱつと見の容姿は、かなり血の繋がりを感じさせる。最も、身長やらスリーサイズやらは、この画像ではよく分からない。

「美容整形ぐらいなら、全部やりかえなくても」

「ウチの親と、同じこと言ってる」

江辺野さんは、「ウケる」と笑った。

「生まれ変わって、お人形さんになりたかったんだって」

人生をかけて綺麗で可愛い偶像になりたかったのに、その結果は、地元ケーブルテレビの学生リポーター。スポットの天気予報でお天気お姉さん、たまにインターネット広告のモデルで似たような人を見かける程度で、他に目立った活躍はない。

「しょぼすぎて笑っちゃうよね」

彼女は鼻で笑うと、そのまま顔を背けた。視線は窓の外へ向いている。そつちが隣に座れと言ったのに、話しかけてくれるなど言わんばかりの雰囲気醸して

いる。なんだよそれ、と心の中で呟くと、バスは交差点を曲がった。足元のバッグが、少し向きを変える。

有名なブランドとは違うらしく、あまり見覚えのないマークがついていた。最近気にかけているマークとも、ちよつと違うようだ。妙に敏感になって、気にしすぎなのかも。気分転換に、僕も車窓を眺めた。

窓の向こうに、この辺りで万博が開かれた時に建立された神社の鳥居と、神社の名前が掘られた大きな石柱が見えた。一願成就や商売繁盛のご利益があると、ばあちゃんに昔聞いたことがある。神様というよりはどこか妖怪っぽい、例のマスコットキャラも描かれていた。

その隣は、神社の名前がついた保育園。ここも、名前の横に不思議なマークが描かれている。ラムネのマークとも、スポーツバッグのものとも違う、別のもの。ただ、なんとなく共通項があるような気もする。家紋や苗字のバリエーション違い、みたいなものかもしれない。

次のバス停まで、まだ少し距離がある。誰も押していない降車ボタンに手を伸ばし、グツと押し込んだ。停車する自動アナウンスが、車内に流れた。

江辺野さんは、気怠そうにこちらを見る。

「僕は、ここで」

彼女は、僕に対する興味を失ったのか、適当にひらひらと手を振った。僕の、「じゃあ、また」という別れの挨拶も聞こえていたかどうか分からない。

ちよつぴり後ろ髪を引かれる思いで、命輝神社前でバスを降りた。

初出 令和四年一〇月二四日 noteにて公開

第六話

高層ビルやタワーマンションが立ち並ぶ麓、谷間のような場所で、レトロな雰囲気「純喫茶」と呼ばれるタイプのカフェが生き延びていた。座席やテーブルも一つ一つ選び抜かれ、年季の入った調度品に囲まれながら、僕の目の前に座った米利刑事は、ネクタイを緩めながらタバコを取り出した。

「デートの邪魔して、悪かったな」

彼は灰皿を引き寄せ、僕と隣の江辺野さんに一言断ってから、タバコに火をつけた。ゆっくり一服して、ゆるゆると天井へ登っていく煙と、自分が吐き出す煙の行方を追いかけている。軽く灰を落とし、もう一口吸った。ようやく、顔がこちらに向けられる。

「単刀直入に言う。上から圧がかかった。これ以上は動けない」

彼はタバコを消し、頭を下げた。

「散々巻き込んでおいて、非常に申し訳ない」

米利刑事はしばらく、頭を下げ続けた。やがて、革張りのソファに座り直しながら、ゆっくり頭を上げる。

「オレも織林も表立って動くことはできなくなったから、ここから先はたまたま居合わせた知人同士の世間話だ」

彼は新しいタバコに火をつけ、口の端に啜えた。声の調子とボリュウムを下げ、僕の目を見ながら、「いいか」と言った。

「ヤツの行動にはしばらく監視が付く。だから安心しろとはとても言えないが、野放しにすることはない」

僕が小さく頷くと、彼は言葉を続ける。

「それと、例のブツは販売元にも製造元にも怪しいところは一つもなかった。製造ラインも調べたが、妙なところは一つもなかった」

ただ単に、流通量が多くないだけで、この辺りのスーパーや駄菓子屋にはたまたまに出回っている代物らしい。実際に販売されていた物の鑑定も、製造元にある材料の調査もシロだと判断された。

「身元不明の遺体とヤツの関係性は、まだ分からない。状況証拠と妙な証言だけ

で、決定的な物証は出てこない。まずはヤツの身元を辿るつもりだ」

「捜査はできないんですね？」

「ヤツの身元と身分証偽造のセンは、まだ止められていない」

米利刑事は、「そつちは任せとけ」と誇らしげに言った。ただ、真境名という名前も顔も偽装だった場合、振り出しに戻るだけ。一介のスクールカウンセラーにしては、工作の手が混み過ぎている。

「それともう一つ」

米利刑事は、テーブルに分厚い本をドンと音を立てて置いた。さつきから、僕らの話が微塵も分らないという様子の江辺野さんは、急な音に身体をびくつかせた。小さな事典のような本には、「タロット入門」と書かれていた。

「命輝保育園のマークも、そのスポーツバッグのロゴも、例のラムネのマークも、全部、塔のマークじゃないかってね」

彼は目の前で本をめくり、「塔」のページを開いた。細長い棒状のものに、雷が落ちて途中から崩れかかっている絵が描かれていた。バリエーションもいくつもあるらしく、コレを図案化して幅を持たせると、ああいうデザインになるんじゃないか、というのが占い好きな織林刑事の推理らしい。

「それが何を意味するのは、オレには全く理解できん」

「でも、実際にそれっぽいマークが街中の至るところに存在している、と？」

「マークの意味、点在の背景と上からの圧までがセットだとすると、何もかも、お膳立てされてる気もするよなあ……」

米利刑事は啜えるものを、タバコからアイスコーヒーに刺さるストローに切り替えた。水がたつぷり入ったグラスの中身が、一息で半分ぐらいまで吸い込まれていく。

「考え過ぎじゃないですか？」

江辺野さんにしては珍しく、自信がなさそうな声で米利刑事に言った。米利刑事は首を振りながら、「いやあ、ヤツのことだからなあ」と呟く。僕も、それに同意した。

「その本は君にやるよ。最悪の誕生日だっただろうし、お詫びも兼ねて」

米利刑事は、開いた本を化粧箱に戻しながら言う。彼からのプレッシャーというか、断りにくい雰囲気飲まれ、それなりにいい値段のする重たい荷物を受け取った。

「ただ、捜査は打ち切りで、公的には介入しづらくなった。納得行くまで首を突

つ込むタイプだろうが、無理はするな。公務執行妨害で逮捕するなんてことはしたくない」

米利刑事は、「いいか、約束だぞ」と喫茶店の会計を終えて外で別れるまで、何度も繰り返した。あくまでもポケットマネーによる奢りを受け、彼は「ちゃんと彼女を送っていけよ」と言い残して去って行った。

気がつけば、辺りは夕暮れ時。もうしばらく明るいとは言え、状況が状況なだけに一人で帰らせるわけにも行かない。ただ、彼女の方が強そうだけど……。

「もしかして、とんでもないことに巻き込まれちゃった？」

薄暮の住宅街を並んで歩いていると、江辺野さんは急に口を開いた。閑静な住宅街、自動車を避けながら道端で遊ぶ小学生も一杯いたのに、事件があつてからは人通りが少なくなっている。帰宅途中の自転車に乗ったサラリーマンや、学生さんとすれ違うぐらい。細い道での無灯火に気を付けながら、右を歩くか左を歩くか、頻繁に動いている。

「なんであの時、バスを降りちゃったのかなあ」

彼女は独り言のように言う。先に降りた僕を追いかけて、一つ先のバス停から戻ってきた理由は、彼女に分からなければ誰にも分からない。不思議そうにこちらを見ても、答えようがない。

視線を逸らすと、その先の通りから、真境名先生が「やあ、今晚は」と顔を出した。闇を縫うように、全身黒っぽい服装とサングラス姿で、音もなくヌツと姿を現す。江辺野さんの前に立ち、柔道の授業を思い出しながら少しだけ身構えた。「そんなに身構えないで。そこら中で監視されているのに、何もしませんよ」

サングラスの下、義眼がどこを見ているか正確には分からないが、通りの角や住宅の陰に警察が潜伏しているらしい。監視や尾行もバレバレのようだ。

真境名先生は、少し先の公園を指差した。

「あそこのベンチで、少しお話ししませんか？ お時間は取らせませんので」

彼はあくまでも淡々と、「構いませんよね？」と江辺野さんに視線を向けながら言う。僕は江辺野さんを遠ざけるように軽く押したが、真境名先生は「せっかくなので彼女も一緒に」と冷たく言った。僕は不本意ながら同意を示し、不安そうな表情を浮かべる江辺野さんに「大丈夫。信じて」と目一杯虚勢を張ってみせた。

真境名先生の先導で、隣に田んぼと駐車場が広がる公園に辿り着いた。遊具も

ほとんどなく、草刈りがなんとか終わったばかりという公園だった。照明の下にベンチが二つ置いてあった。

二人掛けのベンチに僕と江辺野さんが座り、もう一つのベンチに、真境名先生が腰を下ろした。江辺野さんは、真境名先生から出来るだけ遠ざける。

「先生が犯人なんですよ？」

真境名先生は、小さく笑った。

「もうそんな関係じゃないのに、まだ先生と呼んでくれますか。いい生徒ですよ、君は」

彼はサングラスをずらし、独特の義眼で僕を見つめる。

「そんな君に、釘を刺しておきましょう。くれぐれも、内密に。私の作品に、警察の出番はもう十分だ。野蛮で無粋な三流役者には退場願いたい」

「作品って、一体——」

「それと、私は機械仕掛けの神だ。君なら意味は、分かるよね？」

真境名はサングラスを掛け直す。そうか、マキナだ。

彼はシャツの胸ポケットから、小さな鍵を取り出した。それを僕に差し出す。拒否する権利はない。素直に受け取って、周りから見えにくいようにポケットへ仕舞う。

真境名はそれを見届けて、口角を上げた。

「そう、それでいい」

彼はベンチから立ち上がり、ズボンの尻を払った。急に思い出したように、

「あ、そうそう」と言った。

「プレゼントがもう一つ」

彼は僕のケータイを指し、「すぐに分かるよ」と付け加えた。

「じゃ、健闘を祈る」

真境名はそう言うと、さっさと公園の出口へ向かう。彼の言っていることがよく分からない。真境名の動きに合わせ、潜伏していた警官の尾行が再開するらしく、遠くの方で人影がモゾモゾ動き出した。

「大丈夫？ 何かされなかった？」

背後から、織林刑事が走ってきた。草むらにでも隠れていたのか、細かい葉っぱが頭や上着に付いている。

「いえ、何も」

彼女は、僕と江辺野さんの身体を頭の前から足の先までじっくり確かめた。彼

に渡された鍵は、見つからなかったらしい。目立つ外傷も特になく、織林刑事は無線で何やらやり取りしている。

彼女のやり取りが落ちてくまで待っていると、僕のケータイが鳴り始めた。嫌な予感に、胸がギュッと締め付けられた。

初出 令和四年一〇月二四日 noteにて公開

第七話

向かいの席で惣菜パンに食らいついていた駿は、あつという間に三つ、四つ平らげると、プロテイン添加の乳製飲料に手を伸ばした。何も出ない司法解剖を終えた古谷から、立派な右腕を引き継いでいる。手術痕も綺麗に消して接合できるのに、スキンの色調整もせず、半袖から覗く右腕には違和感しかなかった。

「高二的男子が、その弁当でよく足りるな」

彼は、肉つけも赤色も少ない弁当を見ながら言った。早弁に追加のパンを食べる彼ほどではないが、食欲はあるし、腹も減っている。それでも、僕の箸は次を迷って動かない。以前なら、僕の意見など気にすることなく、横から箸や指を伸ばしておかずを横取りする奴だったのに、今日は黙って紙パックのボトルに口をつけている。

「お前が食い終わらないなら、テッチャんだな」

彼は食事後のゴミをまとめ、空いた手に自前のグローブを二つ持って立ち上がった。テッチャんは多分、部室で昼食を食べているところだろうから、ココにはいない。駿は、「なんだ、いないじゃん」とゴミ箱まで行って帰ってくる。

「江辺野もスポーツできるんだっけ？」

アスリート向けに調整された彼と、プリミティブな人間の彼女とでは、軽いキヤッチボールであっても無理がある。腕を付け替えて、休部中かつ調整中で野球部内の面々とやり取りしにくいのは分かるけど、何を考えているのやら。

「稲荷と嶋田も誘って、親睦深めとかないと」

「グローブが足りないじゃん。発想も古臭いしき」

歴史の資料で、昼休みにバレーボールをやったサラリーマンとか、OLのいかにもな映像を見せられたこともあるけど、二百年も前の話だ。キヤッチボールで仲良くなるうなんて、前時代的すぎる。

「お前が相手してくれれば済むんだよ。いいから、早く食えって」

目の前で圧をかけられながら、駿に急かされたところで、箸が進むわけではない。身体に良さそうなおかずを彼に分け、白米と梅干しはなんとか食べ切った。キヤッチボールをする時間は残らなかった。

駿は不満そうな表情を浮かべ、自分の席へ戻って行った。昼休み明けは、淡々

と板書させられる世界史の授業。腹を満たされた高校生は、ともに授業を受けることなく、そこから中で机に突っ伏していく。平穏な日常に、戸惑いと安心とが混在していた。

人通りの少ない校舎の裏で、駿の投げた球を受け止めた。変なところへ投げて窓を割らないよう、気を配りながら投げ返す。左右には外れなかったものの、大きく上へ逸れてしまった。駿は「何やってんだよ」と言いながら、後逸したボールを拾って、その場からこちらに投げて来た。そこそこ力強い球が、胸元にスッポリ収まった。グローブを付けていても、まあまあ痛い。

駿は元の場所へ戻りながら、グローブを胸元に構える。

「胸を狙って投げろよ。昔、散々やっただろ？」

強引に参加させられた少年野球チームの練習、個人的には思い出したくない思い出の一つではある。彼はそのまま野球を続け、僕はフライをまともに取れないまま、さつさと辞めてしまった。

姿勢制御、落下地点予測の処理は悪くないはずなのに、普通の人間より劣る身体能力は何故なのか、親にも自分にも自分にも分からない。数学があまり得意でないことと関係があるのだろうか？

余計なことを考えながら投げた球は、再び真つ直ぐは行かず、真つ当な部活動でいっぴいの、グラウンドの方へ逸れてしまった。窓を割らずに済んで、ホッとしている。

今までであれば、さつさと帰宅して、もうそろそろ妹の迎えに行かなければいけない時間。ばあちゃんらの面倒を見なくても良くなったら、妹の世話も母の手で賄えるようになってしまった。ヤングケアラーのお役御免は、嬉しい反面、寂しさもちょっぴりある。

正体不明の申し訳なさを、駿のキャッチボールに付き合うことでどうにかしようとしている。自分から積極的に関わって、負担じゃないつもりだったけど、解放された爽快感、自由の充実さも隠しようがないぐらいに感じている。

ボールを拾って戻って来た駿は、「付き合わせて悪かったな」と僕に貸し出したグローブを受け取りに来た。

「放課後にドラドラキャッチボールするのも、良いもんだな」

駿と共に、駐輪場へ向かう。

「無理に付き合わせて、悪かったな」

駿は僕の顔を見ながら言った。

「身内と友達じゃ全然違うけど、お前の気持ちはよく分かる」

僕は頷き、「ありがとう」と言った。

「良い気分転換になったよ」

「無理だけはするなよ。お前も大事な友達なんだからな」

駿は自転車に跨ると「気をつけて帰れよ」と颯爽と通用門を出て行った。帰り道も途中まで一緒なのに、さつさと一人で帰るところがとて彼らしい。駿の氣遣いに心の中で感謝しつつ、外周を走る運動部に注意しながらペダルを漕いだ。

いつもより遅い時間に帰っても、夕方の家事はしなくていいし、ばあちゃんの通院だの、真珠の世話だのの段取り、時間のやりくりにヤキモキしなくてもいい。母さんが家において、灯りが多いだけなのに、非常な幸福を感じている。

弁当を出してカバンを持って自室に入る。カバンを置き、部屋着に着替えて洗面所で両手を洗ったら、真新しい仏壇に両手を合わせる。遺骨も遺品も何もないのに、遺影と形だけは立派なソレに、こちらも形だけ整えて心の中でばあちゃんに挨拶した。

「お肉とか、トマトとか、まだ避けた方がいい？」

弁当を洗いながら、母さんが訊いて来た。どうやら僕以外は、もう平気でそういうものを食べられるらしい。あんな光景を目にして、それほど日数も経っていないのに。僕の神経、処理系統がおかしいのだろうか。

「オレのことは気にしないで。面倒でしょ」

「面倒は面倒だけど……」

まだ何か言いたそうだった母さんを無視して、僕は自室に引き上げた。

机の上には、米利刑事からもらった例の本が、本棚に収まらないからと平置きにしてあった。横の小さな引き出しには、例のラムネボトルと真境名から受け取った鍵がしまつてある。どちらの正体も、未だによく分からない。

どこかのロッカーの鍵ではなさそうだし、刻まれている型番を検索してみても、それらしい物は見当たらない。

なんでも出来る荒唐無稽な舞台装置を名乗る割には、シナリオがあまりにも雑すぎるのではないか。脚本家、演出家を気取りたいなら、もつと的確なヒントを出して欲しい。

あまりにも独善的な筋書き、示威行為のために、身の回りの同級生とばあちゃ

んが犠牲になった。入駒も古谷も、ばあちゃんみたいに身体中から体液を吹き出して亡くなったのだろうか。電子を融通するナノマシンが空気に触れて赤茶色に変色する様は、今思い出しても吐き気がする。

これで今日も、晩御飯は大して喉を通らない。目の前にある材料をヒントに、少しでも前進しないと、心身ともに参ってしまう。真境名ならそれも許さないのである。

ああでもない、こうでもないとい人で考えていると、ケータイに通知が届いた。江辺野さんから、大学附属病院の研究室にこないかという、お誘いだった。彼女のお父さんが職員をしているというのは、聞いたことがある。

「悩んでる暇があるなら、今すぐ来い」

彼女からのメッセージは明確だった。僕は財布と例の鍵をカバンに詰め、ケータイを握りしめて部屋を出た。もうすぐ夕飯だという母さんに、「晩御飯はいらない」と返して家を出た。

次の週末には返す予定の、通院用の車に乗り込み、附属病院の行き先を入力する。薄暮の住宅街を抜け、江辺野さんが待つ研究室へ急いで向かった。

初出 令和四年一〇月二五日 noteにて公開

第八話

江辺野さんは、年季が入った大きな本を開きながら、同時にA4サイズのタブレットを操作して、積極的に見たいとは思えない画像を僕に見えやすいよう拡大してくれた。見るも無惨な人の死体。二十世紀後半頃に撮影された記録らしい。

江辺野さんは、同じ写真を逆さまに覗き込みながら、低い声で「うくん」と唸った。

「やっぱり、マールブルグ病かエボラ出血熱あたりの症状だよね」

彼女は写真を動かし、時に別の画像と切り替えながら、見解を述べた。肌の質感や現場に広がった体液の色合いに差はあるものの、あの時見たばあちゃんの姿と、確かに似ているような気はする。

「あなたたちの身体に、こういう症状を引き起こす新種のフィロウィルスか……」
江辺野さんは顎に手を当てて、必死に考えている。時々忘れそうになるが、こちらが必死に似せているだけで、彼女たちとは全く違う生き物だ。彼女たちの定義からすれば、生き物かどうか怪しい部類。生殖能力を獲得した、人型の家電に過ぎない。

演算装置により意識、人格を獲得したために権利が認められ、新たな人として対等な扱いを認められてはいるが、ヒトとして同一の種であるとは言えない。技術の発展により、見た目の差異、生活する上での違いは乗り越えつつあるが、あちらからこちらへの「乗り換え」はまだまだ一方通行。新たな身体を得て生きることは可能だけれど、炭素製の身体へ生まれ直すことはまだ出来ない。

全く違う生き物を、結果だけ似せて殺戮するウィルス？

「あるいは、どっちも殺せる生物兵器、とか」

たまたま今までの犠牲者が全てこちら側であっただけで、機械仕掛けの神を気取るアイツが仕込んだ小道具なら、相手を選ばない可能性も十分にある。

「ラムネは未開封だったんだよね？」

ばあちゃんが死んだ日、自室の引き出しにしまっておいたラムネは、誰にも触れられた様子はなかった。封もラベルも、中の粒も全く変化なし。

「タネも仕掛けもないのに、こんなことができるなんて」

ノースで思いのままに人を殺せる。物証も残さない。あまりにも都合のいい仕掛けではないか。

「でも、フィロウイルスならもつと死人が出てるよね？」

僕はタブレットを操作して、マールブルグ病やエボラ出血熱の項目に目を通す。当時の基準でも相当危険な伝染病に分類されている。警察も入念な感染症対策をしていたようにも見えるけど、潜伏期間や感染力もフィロウイルスと同等なら、自分の身に何も起きていない理由が分からない。

「感染力を抑えたのかもね。広がらないように」

「ピンポイントで殺せちゃうウイルス、か」

「筋書きが独りよがりすぎるんじゃない？ やり過ぎても面白くならないって」

何故か、江辺野さんは頬を膨らませている。神を自称する割に、匙加減を誤り過ぎだという印象は、僕にもある。

大量殺戮は目的ではなく、何か違う意図がある？

手が混んでいるような、雑なような。真境名の振る舞いからして、そんな回りでどいことをわざわざやる理由が見えてこない。

「自分の仕込みじゃないのかも……」

僕の呟きに、江辺野さんは首を傾げた。

現実逃避する時にもやりがちな違和感。世界観と合わない既存の何かを、無理やり取り入れた時に生じる、独特の気持ち悪さ。

「作ったのは真境名じゃなくて、持ち込んだのが真境名だとしたら」

「こんな危ないものを、真境名以外の誰が作るの？」

江辺野さんの表情が一気に曇る。なんでもアリの舞台装置が既存物、神を自称する男はそれを使うだけという状況は、確かに不気味だ。

こんな状況を作って、真境名は一体何がしたいんだ？ 目的がますます見えなくなる。

二人で悶々と煮詰まっていると、不意にドアがノックされた。急な物音に、驚いてしまった。ドアがゆっくり押し開けられ、扉の向こうに江辺野さんのお父さんが立っていた。彼は懐中電灯を片手に持っている。

「もうそろそろ、閉めてもいいかな？」

彼の言葉に、タブレットの時計を確かめた。午後九時に差し掛かっている。引つ張り出した資料とタブレットを元の場所へ片付け、二人揃って小さな資料室を出た。お父さんが鍵を掛けた。

僕らがいた部屋以外は、廊下も含めて真っ暗だった。構内に点在する非常灯以外の光源がない。お父さんを先頭に、誰もいない廊下を進む。煌々と明かりがついている職員室まで戻ると、宿直の警備員以外の人はいなかった。もう、みんな帰ったあとらしい。

お父さんは懐中電灯を充電スタンドに戻し、鍵束を所定の位置に戻した。

「遅くまで、すみません」

「いいよ、いいよ。大事な鍵を届けてくれたお礼だから」

彼は「その代わり、鍵の紛失は内緒にしてくれよ」と口到人差し指を添えた。

僕は「もちろんです」と言いながら、彼が指差すところへ真境名から受け取った鍵を掛けた。

「よし、オッケー」

お父さんは、「さあ、帰るぞ」と江辺野さんを伴って職員室を出た。宿直の警備員に、「お疲れ様です」と声をかけながら、駐車場へ向かう。

「結局、何の鍵だったんですか？」

「関係者以外立ち入り禁止の、閉架の鍵。あれだけじゃ、入れないんだけどね」

僕らがさつきまでいた部屋は、あくまでも江辺野さんと縁がある教員の資料室。研究室や大学本体の図書館、書庫は入れなかった。

「取扱注意の資料もあるからね。特別な人でないと入れない」

図書館の職員でも、特別なパスがないと閉架に通じるクリーンルームにも入れないらしい。クリーンルームの中にある二つの鍵を、二人で同時に開けないと閉架にはたどり着けない、と。

「随分、嚴重なんですね」

「情報主義の時代だからね。仕方ないよ」

駐車場まで来ると、お父さんは先に江辺野さんを車に乗せた。僕は隣に停めた自分の車のドアロックを開ける。

「謎のマーク、秘密の暗号を追いかけるってカッコいいね。オジさんも、何とかコードとか、何十世紀青年とか、夢中になって読んだもんさ」

お父さんは終始にこやかに言い、「ま、頑張つてよ」と僕の肩を叩いて運転席に乗り込んだ。僕が車に乗るのを見届けると、クラクションを軽く鳴らして、手動運転で駐車場を出て行った。

僕はシートベルトを締めながら、さつきまでの出来事を整理する。ケータイに通知が届く。別れたばかりの江辺野さんから、「URL」が送られていた。百科事典の

ものらしい。エンジンをかける前に、そのページを開く。

「一説によると、『塔』はバベルの塔がモチーフになっているといわれている……」

バベルの塔なら、ぼんやりと知っている。だから細長い凶形と雷の絵なのか。確か、その後、散り散りになったんだよな。そこから、別々の言葉を話すようになった、とか。

街中に散らばる意匠違いのマーク、警備が異様に嚴重な資料室、上層部から介入されて中止になる捜査……。何か、とんでもないことをさせようとしている？

「パンドラの匣を、オレに開けろってか」

開けた罪を僕になすりつけて、何かを得るつもりなのか。それぐらいなら、真境名本人にでもできるはず。何が目的なのか、さっぱり分からなくなった。次の目ぼしいヒントも見当たらないのに、何かやり遂げることだけは背負わされている。

「あああ、くそっ」

真境名への不満とイライラが最高潮に達し、僕は目の前のハンドルに、力一杯右手を叩きつけた。

初出 令和四年一〇月二五日 noteにて公開

第九話

下校途中に何者かに尾行されていると思ったら、自宅の近くまで来たところで、ラフな格好の米利刑事が「よう」と片手を挙げた。昔から駅前にあるスーパ―銭湯の割引チケットの期限が二十日までらしく、行けそうなのは今日だけらしい。

同僚なり友達なりを誘えばいいのに、知り合ったばかりの高校生を誘うとは。

彼の誘いを受け、スーパ―銭湯に行つてくると告げて家を出てきた。その結果、人がそこまで多くない平日の夕方から全裸になって、オジサンと並んで大きな風呂に入っている。

「お互い、手持ちのカードを使い切っちゃったな」

僕が湯船に入るなり、彼は本題を切り出した。最も、慰めや労いを言いに来た雰囲気でもない。「いやあ、参った参った」と朗らかに笑みを浮かべる。

「誤解のないように言っておくが、俺に衆道の趣味はないし、未成年に不埒なことを働く輩ではない。残念な同業者もたまにいるけどな」

米利刑事は、歯を見せてニツと笑う。そのわざとらしい笑顔は、逆効果に思う。真っ白でモヤシみたいなひよろ長い身体に、化粧ノリも悪そうで美形とは程遠い顔の僕に、わざわざ白羽の矢を立てる物好きも少ないか。ただし、彼の引き締まった隙のない身体で押さえつけられたら、抵抗は難しい気もする。風呂に浸かっているのに、無警戒にリラックスすることもできないとは。

「まあ、いいや。その調子で聞いてもらおう」

彼は小さくため息をついてから、真面目な表情を作った。

「持つてる情報も、ぶち当たってる壁も、ほとんど一緒だ」

真境名に振り回されてやっと入手した情報、把握した状況は、彼らが握っているものと大差ないとは。さすがは公的機関と言うべきか、たかが高校生の能力を過大評価しすぎと言うべきか。自己評価は高くない認識だったけど、人並みに自惚れていたのか。

米利刑事は身体の向きを変え、露天風呂がある方、大きな窓の外を向いた。空模様がいぶ怪しくなっている。彼は「梅雨だもんなあ」と独りごちる。

「で、アイツはここへ来る前に、北海道にいたという足取りだけは分かった」

米利刑事は顔だけこちらに向け、「ただし」と付け加えた。

「身分証が本物で、マキナダイゴ本人だった場合、だ。あの外見なら、容姿も顔も本物かどうかは分からない」

両腕も義手、目は両方とも義眼。指紋も虹彩も本人確認に使えない。外科的処置を施しただけのネフイリムなら、僕らみたいな識別番号もない。米利刑事の言い方なら、身分証が偽造されたものかどうか、確証を持ってないのだろう。

新しい情報提供はそれまでで、サウナにも誘われたけど、僕らに対応していないタイプだったから、諦めた。早々に切り上げ、服を着て銭湯を出た。外は既に雨が降っていた。

折り畳みの傘も持っていなかった米利刑事は、風呂に入ったばかりだと言うのに、「じゃ、またな」と雨の中を突っ切り、駅まで走っていった。僕は念の為に持ってきていた傘を取り出し、雨の中、駅とは反対方向に歩き出す。真っ直ぐ帰っても、夕飯にはまだ早い。ここ数日のモヤモヤを何とかするためにも、ちょっとだけ寄り道しよう。

海の方へ向かって十分ほど歩くと、ハチ公タワーの麓に広がる海浜公園に出る。公園と言っても、だだっ広い遊歩道として整備されているだけ。海を眺めながら歩く分にはオススメらしい。

流石に雨が降っていると、人通りは少ない。手すりの向こうに広がる灰色の空と海とをボーッと眺めながら、モヤモヤが少しでも減れば良いんだけど……。

海上を走るフェリーや貨物船は、もつと南の方へ行く。遠くに見える船は、神戸や九州にでも行くのだろうか。少なくとも、この辺りに大小含めて船舶が接岸する場所、乗り降りする場所はなさそうに見える。さっきまでいた駅も、タワーが立ってから開業したらしい。

真下から見上げても先端が見えないハチ公タワー。東京のハチ公像との関係はイマイチ分からない。飛行機の航路もなさそうなのに、誘導灯っぽい灯りが向こうの方で点滅している。

口を開けて上空を見上げていると、下の方から金属音が聞こえて来た。慌てて口を閉じ、音のする方を見る。ハチ公タワーの中から、作業着を着た男性が二人出てきた。一人はヘルメットを外しながら、どこかへ歩いていく。その場に残ったもう一人は、今出て来たドアの方を向いている。しばらくすると、指を差して何かを確認していた。

大都エンジニアリング（株）と車体に書かれたバンが入って来た。作業着の男性は、ハーネスを外しながら後部ドアを開け、肩に担いでいたケイブルと共に、荷物を車の中へ放り込んだ。後部ドアを閉め、小走りですぐ助手席に乗り込んだ。

大都エンジニアリングの社用車にも、例のマークと若干意匠違いのものが付いている。作業員二名を乗せたバンは、周囲にすっかり気を配りながら、すぐ脇を走る大通りへ出て行った。無駄のない動きで、スムーズに遠ざかっていく。

車の行く先をぼんやりと眺めながら、ハチ公タワーの本体に近付いた。彼らが出て来たところへ近付いてみると、点検用っぽいドアがついていた。ダメ元で手をかけ、軽く引いてみる。しつかり施錠されていて、びくともしない。

雨粒がついた黒い壁に手を置く。ひんやりと冷たい。ドアをノックするように軽く叩いてみると、耳馴染みのある金属音が返ってくる。そこまで特殊な鋼材、構造でもないらしい。人が中に入れて当然だけど、これのメンテナンスにも例のマークが関わっている。

公園の運営やタワーの管理自体は、万博関係の会社か府や市の管轄だと思っただけ、下請けや孫請けに『塔』が関与している？

例のスポーツメーカーも、ラムネの製造元も、決して大手ではない。ただ、着実にどこかへ関与している。目立つことなく、ひっそりと。掴みどころの無さ、正体不明さだけが増していく。

真境名も、『塔』も分からない。オレは何と向き合われている？

モヤモヤを少しでも吐き出す、吹き飛ばすために海浜公園まで来たのに、悩みも迷いも増えてしまった。ここまで思惑が外れて、雨脚も徐々に強まってくるとなれば、長居は無用。公園近くの売店で売っていた鯛焼きを一つ買い、暖をとりながら帰路に着いた。

「ハチ公タワーの内部見学、昔行かなかったっけ」

海浜公園のホームページを見ていたら、テツちゃんが横から声をかけて来た。見学ツアーがあることを知らなかった僕が一人で驚いていると、そばにいた駿はテツちゃんに同意して、「ああ、そう言えば行ったな」と興奮気味に言った。

「多分、お前も一緒に行ったぞ。幼稚園だか、小学校だかの遠足か、社会科見学で」

彼は僕を指差すが、そんな前の話は覚えていない。テツちゃんが頷くからには、間違いないのだろう。

「ちよつと、男子。何やってんの？」

江辺野さんより丸顔でほんわかしている稲荷さんが、彼女には珍しくピリツとした口調で注意した。近くにいた江辺野さんと、怠そうにガイド本を捲る嶋田さんが一瞬こちらを見る。

「ちゃんと調べてよね。折角の自由行動なんだから」

稲荷さんの剣幕を、駿は「へいへい」と肩の力を抜いて躲した。僕も慌てて、「北海道観光ガイド」と記されたロードマップを開く。駿もテツちゃんも、適当にページを捲っている。

「秋口の北海道ねえ……。どうせなら、沖縄の方が良かったなあ。海にも入れるし」

「現役」の水着姿も見れるしね」

嶋田さんは稲荷さんの方を見ながら、「凄いのよ、この娘」と言った。

「甲斐くん的には桂花かな？ この娘もスタイルいいよ」

江辺野さんに「ちよつと、花梨」と注意されると、嶋田さんは悪びれる様子もなく、「ごめん、ごめん」とケタケタ笑った。

「お前らのちんちくりんな姿見ても、なんとも思わねえよ。なあ、テツちゃん」
駿に話題を振られたテツちゃんは、「僕は二次元専門だからね」と顔も上げず、寄りたい場所に付箋を貼っていく。嶋田さんと真面目そうに、項目を別紙に書き出した。

「お前もそうだよな？」

駿の矛先が僕に向く。同時に、江辺野さんがチラリとこちらを見た。回答に窮した僕は、手元の雑誌に集中しながら必死に考える。ドラマや映画のロケ地や舞台、聖地みたいなのもピックアップされていた。

「逃避行って、なんで北に行くんだろう？」

「はあ？」

「南に行ってもいいのに、東北とか、北海道に行かない？」

野球一筋の駿には、イマイチピンと来ないらしい。

「あつたかい島国に行くより、寒くて広い場所の方が合うんじゃない？」

文学少女の稲荷さんが、さつきまでの真面目さを他所に、乗っかってきた。僕は、「なるほどね」と頷きながら、横目で向こうの江辺野さんを見る。彼女はこちらを気にすることなく、嶋田さん、テツちゃんの作業に協力していた。

稲荷さんの妄想混じりの見解に適当な相槌を打ちながら、修学旅行のグループ

行動が決まってく様を遠巻きに眺めた。

初出 令和四年一〇月二六日 noteにて公開

第一〇話

ほんの二、三日前に来たばかりなのに、再びハチ公タワーの麓へ来ることになるとは思わなかった。最も、北摂の人たちが何かあるたびに活用する万博記念公園ぐらい、週末ごとのイベントで使用頻度がそれなりに高い場所でもある。

妹やばあちゃん世話を手伝っている時は、夕方や土日でも出歩く機会が少なかつたから、こうやって同級生と共に遊びに来れるのは嬉しい気もする。ただ、周りにいるのは小学生と保護者が大半で、高二にもなつて混ざるようなところではなかつたかもしれない。

一緒に来た江辺野さんは割と平気な様子で楽しんでいるが、なぜかくつついて来た駿は、一刻も早く帰りたいそうにしている。

この間来た時は殺風景だった場所に、芝居小屋みたいな小さなテントを中心に飾り付けがなされていて、それを取り囲む形でキッチンカーや出店が立ち並んでいた。チャルカという人形劇の劇団と、それを支援する零細宗教のお祭りなんだとか。

公共性の高そうな場所で、特定宗教のお祭りは意外だったけど、カルト宗教とは程遠い、非常に融和的な宗派で勧誘に関するトラブルも一件もなく、あくまでも人形劇をメインに押し出す活動ということもあつて、長く続けられているようだ。

メインの人形劇が始まるらしい。いわゆるパペットという奴ではなく、糸で操る、マリオネットというタイプのようだ。江辺野さんを含めたキッズたちは、例のテントに集まっている。

落ち着きがない駿は、ハチ公タワーの本体に対して、何やら調べ物をしている。チャルカ教の簡易な休憩スペース、控室もこしらえてあるのに、無遠慮にそちらへ接近した。

「おお、コレか」

彼は周囲の導線を見捨て、例のドアへ真っ直ぐ進む。内部見学のタイムスケジュールを張り出した紙と、「本日の見学は終了しました」の追加の案内が掲示されている。午前中には整理券が配られて、午後イチだというのに、もう全ての

見学が終了したという。

「あいつに一泡吹かせられると思ったのになあ」

悔しがる駿に、「お前が遅刻したんだから、仕方ないだろう」と言った。古谷の件もあつて、彼にとつても真境名は仇らしい。

「真境名の野郎、回りくどいことしやがつて」

駿はハチ公タワーに八つ当たりした。硬く握った右拳が、ハチ公タワーの壁を叩く。固そうな金属音が、鈍く響いた。その大きさに思わず周りを見回したが、誰かが咎めに来る気配はない。

出来れば、さつさとこの場を立ち去りたい。舞台裏みたいなのに、部外者がズツと居るのは良くない気がする。駿にも離れるように急かすが、彼は聞く耳を持つてくれない。彼に力で勝てるとは思えないが、無理矢理にでも離れたい。駿のシャツに手を伸ばしかけたところで、控室の方から声を掛けられた。

「マキナが、どうかなさいましたか？」

個人的には耳馴染みのある、若干聞き取りにくい合成音声。真珠の使っているものより大分品質が悪いのか、あるいは古くなっているのか。音量は小さく、音の高低も安定感に欠けている。

声のする方へ振り向くと、いかにも作り物っぽい顔、人造マスクを付けた年代物の機械人形が立っていた。身につけているものは、頭上の冠も含めて、とても高そうに見える。

「ああ、失礼。コチラの方がよかつたかな」

声の主は、緩慢な動きでマスクの上に、更に目元を覆い隠すようなベネチアンマスクを装着した。怪しい印象は増す反面、不気味な印象は軽減された。とても古そうな外套の下はどうなっているのか、想像がつかない。

彼は抑揚に波のある合成音声で、グレゴール十八世と名乗った。チャルカ教の開祖にして、現代まで生き続けている人物だという。

「ワタシはただの外部端末。ワタシは世界中にいて、ローマの本体と繋がっています。アナタたちも、マキナを信じる人たちですか？」

二重のマスクのおかげで、グレゴール氏の目は見えない。見えたところで、ガラス玉のような目では、表情や意図は読み取れまい。かすかに読み取れそうな口元は、微笑んでいるように見える。

頭の中に「？」ばかりが浮かんでいそうな駿と共に、グレゴール氏に招かれるまま、隣のテントに入る。中は簡易な礼拝堂っぽく見えた。彼に促されるまま、

中に入って椅子に腰を下ろした。彼はそのまま教壇の奥に行く。

「白き土のアナタたちも、赤き土の兄弟も。チャルカの子どももワタシも、皆等しく神が造りたもうた被造物。チャルカは紡がれたもの、作られたものこそを尊びます」

彼の手前にある教壇には、手回し式の糸車が刻まれていた。世界史の授業で見覚えがある。ガンジーが回していたアレだ。

「歴史も社会も、遺伝子も。別々のものが縊り合わさつて紡がれるもの。ピノックイオも、ゴーレムも、フランケンシュタインの怪物も。ワタシのようなロボットも、蔑む必要のない貴重な存在です」

「肌の白いオレたちも、そうでない人間も、等しく尊いと？」

グレゴール氏は、駿の言葉に頷いた。

「日本にも似たような表現がありましたね。ヤオヨロズの神とか、ツクモ神とか」
厳密にはどちらも違う気もするが、モノに対する考え方、尊ぶ姿勢は似ていないとも言切れない。

「チャルカは、被造物を区別もしない、差別もしない。等しく機械、マキナと呼んでいます。紡ぎ出されたもの、作り出されたものもたらす幸福や未来を信奉しています」

グレゴール氏は僕らの顔をしっかりと見据えて、「アナタたちも、マキナを信じますか？」と問うた。僕も駿も答えに窮していると、彼はゆつくり微笑んだ。

「何を信じるかは人それぞれ。チャルカはいつでも、誰にでも門戸を開いていますから、気が向いたらいつでもどうぞ」

グレゴール氏は深々と頭を下げた。

表の賑やかな曲が止まり、大歓声が上がった。拍手喝采の後、後ろの扉が押し開けられ、江辺野さんが入って来る。

「人形劇、終わっちゃったよ。何やってんの？」

彼女は僕らの方を見て、言った。僕と駿は、グレゴール氏に促されるまま、彼女のいる出口へ向かう。テントの外に出ると、前を歩いていたグレゴール氏は立ち止まって、その場で振り返った。

「老いぼれの話聞いていただき、ありがとうございました」

使い込まれた手袋に包まれた右手を差し出した。握り返そうか迷っているらしい駿を避けて、僕が先に握手した。手袋の中は、いかにもマニピュレーター然とした細くて硬い、冷たい構造をしている。駿は、僕の後から握手に応じた。

グレゴール氏は、僕らの後ろにいた江辺野さんにも手を差し出した。彼女はイマイチ事情が分からない様子だったが、躊躇なく、その手を握り返す。握手を終えると、彼は驚いたように声、音を漏らした。

「特別な星が巡ってきましたか。赤と白の兄弟たちに、新たな融和をもたらさることを」

彼は小さな糸車を外套の中から取り出し、僕らの頭上で何度か回した。チャルカ教の儀式だろうか。彼のところに、人形劇の主宰者らしい男性が近付いてきた。グレゴール氏はそちらに向き直りつつ、僕らに別れの言葉を述べた。

「いずれまた、お会いしましょう。それまで、マキナのご加護がありますように」
主宰者の男性は、名残り惜しそうなグレゴール氏の背中を押して、控室のブースへ入って行った。その後ろ姿を見送りながら、駿は終始、訝しむような目で見ている。

「で、どうだった？」

江辺野さんの一言に、駿は大きな声で「あ」と叫んだ。

「内部見学、できてないじゃん」

「え、何それ？」

江辺野さんは、「貴重なオフだったのに」と心底残念そうにぼやいている。駿はそれに「だって、仕方ないだろ」と応えた。コイツの遅刻が最大の理由なのに。

チャルカ教のお祭りと、それに合わせた催しは夕方、午後五時まで続くらしいが、目玉の人形劇は演目が同じで、ハチ公タワーの見学も終わっているとすれば、高校二年生的に目ぼしいものは特にない。

ちよつと早いけど、帰ろうか。僕が口にするまでもなく、駿も江辺野さんも、駅へ向けて歩き始めている。

「遅刻した人の奢りで、お茶でもしない？」

江辺野さんの提案に、駿は眉根をひそめた。

「いいね。乗った」

「おい、益巳！」

駿は掴みかかっていたが、僕は軽く避けた。

「遅れてきた駿が悪いんだよ」

「等しく尊いって説教されただろ？」

「それとこれとは、話が別だよ」

話が今ひとつ飲み込めていなさそうな江辺野さんを差し置いて、口八丁手八丁で、歩きながら駿とやり合う。皮膚が焼けるような紫外線は勘弁してほしいけど、こういう休みもたまには悪くない。

初出 令和四年一〇月二六日 noteにて公開

第一一話

翌日は、起きた時から慌ただしかった。日本では午前七時過ぎ、ローマの現地時間では日付が変わったタイミングで、チャルカ教本部から、グレゴール十八世の名前で世界中に発信された報せと、三十分後に「ザ・シティ」を名乗る団体から表明された文書とを巡って、世界中で騒ぎが起きているらしい。

どちらもあまりにも荒唐無稽な内容であり、唐突すぎる発表は度を越したただのイタズラ、規模の大きな何らかの偽計ではないかと、色んなチャンネルのコメントーターが喚いていた。

登校時間まで各局の緊急特番を切り替えながらテレビを見ていたけど、発表の真偽も、ザ・シティなる団体の正体も、よく分からなかった。緊急に回ってきた連絡では、この辺りの駅前や街中でも騒動になっているらしく、登下校時は注意するようにとのお達しが出ていた。残念ながら、休校にはならないらしい。

雲行きが少し怪しい中、いつもの時間に天気予報もやってもらえず、とりあえず傘を握りしめて家を出た。自転車を辞めて、歩いて行く。通学路の途中にある、少し大きめの公園でも、幟やお立ち台を持ってきて、今朝の発表に「目覚めた」人たちが近所迷惑も鑑みず、拡声器を握りしめて演説していた。目が合わないように気をつけて集団の脇を通ると、向こうから遠慮のない視線が投げかけられる。幸い、危害を加えられる雰囲気ではなさそうだ。

朝から暇で元気な、一風変わった人達はまだ極少数らしく、妙に絡まれることもなく無事に学校へ到着した。教室の中の空気は、いつもより少し張り詰めている気がする。

「あ、おはよう」

先に着いていたテツちゃんに声を掛けた。どこかよそよそしい態度で、申し訳なさそうな小さい声で「おはよう」と言った。彼はすぐに授業の準備に戻る。窓際の自席までに、稲荷さんもいたので、同じように挨拶した。先日の、修学旅行の段取りが思わしくなかったのか、逃避行のご高説を賜っていた相手とは思えないぐらいそつけない態度で、一瞥されて終わった。

彼女やテツちゃんに、何か悪いことをした覚えはない。今朝のアレを真に受け

て、それが影響しているのだろうか。腑に落ちないまま、自分の席で授業に備える。遅刻ギリギリで、駿が教室に入ってきた。ギリギリの割に、いつも通りに騒々しい様子で席に着く。最も、普段のような盛り上がりはない。反応の悪さに、彼も微妙な表情を浮かべていた。

駿の準備が整う前に、始業のチャイムと共にヤッセンが教室に入ってきた。週明け一発目にヤッセンの数学とは、気合が入らない。いつも通りに思える教室の様子だけど、何となく活気に欠けている気がした。

昼休みになっても、重たい空気、ピリピリした雰囲気は変わらなかった。普段は仲が良さそうな人達も、急に仲違いしたかのように、ぎこちなく当たり障りのないやり取りをしているように思える。

「今朝のアレ、どう思う？ あいつのせいで、飯が不味く感じるよ」

空気を読む機能が搭載されていない駿は、そう言いながらも、普段通りの食欲で早弁後の追加の昼食を食べている。今日はガッツリ、米らしい。

「融和がどうか言ってたクセに」

「んん、まあね」

駿の言い分も最もだけれども、昨日の彼はネットワークで常時繋がっているとはいえ、ただの一端末。本体と考え方の違い、齟齬はあったかもしれない。ただ、昨日の今日でこの動きなら、昨日のやり取りが何かのきっかけになっている可能性もある。

「ホラ話にしても、一千年はやり過ぎだろ。誰が信じるんだ、そんな話」

「あゝ、実は一千年ズレてるって話？ 確かに無茶だよな」

チャルカ教の発表、暴露をそのまま信じるなら、今年は西暦二二二一年ではなく、三二二一年だと言う。一千年もズレているなら、NASAやJAXA、その他の研究機関が何らかの情報を掴んでいそうだけど、そんな発表は聞いたことがない。

ケータイでニュースサイトを調べてみても、今のところ、その手の報告、新着ニュースも特に見当たらない。

「昔、ファントムタイム仮説っていう騒動はあったらしい」

「それでも数百年だろ？ 理由もなんとなく分からんでもないしさ」

駿も同じページを見ているらしい。最終的には否定されたっぽい騒動が、はるか昔にあったという。

「やっぱり、一千年はやりすぎだつて。意味も不明だし」

駿はさつきと同じことを言う。嘘の盛り方が過剰だと言いたいらしいが、それは個人的によく分からない。一千年ズラす理由、公表する意味や意図が不明というのは同意する。

「人間さまに、大きな顔させるためだろ？」

近くで弁当を食べていた押井が、駿を半ば睨み付けながら、キツイ口調で言い放った。

「出来損ないのオレたちを、創造者だと祭り上げてバカにしてたんだろ？ 守つてあげなきゃいけない、大事な大事なペットだつてな」

「なんだ、テメエ」

駿は押井に掴みかかった。押井は胸倉を掴ませ、身長差で上から睨み付けている。教室の緊張感が一段階上がった。二人の周りから人が離れ、小さな輪が出来る。斜向かいの席にいた江辺野さんが立ち上がり、二人の間に割って入った。喧嘩腰の男子に介入するなんて、見ているコッチが緊張してくる。

「私はまだ死にたくない。そこまでしてくれる？」

彼女の「死」というフレーズに、周囲が一瞬ざわついた。もう一つの声明文を思い返す。江辺野さんは、駿を見た。

「古谷くんみたいになんた、なりたくないんでしょ？」

駿は押井の胸倉を離し、右腕をさする。駿の態度に気が削がれたのか、押井も少し落ち着いたらしい。気まずそうに背中を向けて、食べかけの弁当に向き直った。江辺野さんは周囲の視線を気にすることなく元の座席に戻ると、何事もなかったかのように嶋田さんとのランチを再開した。

教室中の緊張感が若干下がった。それでも、普段の雰囲気からするとヒリついている。

「ジャンヌダルクつて、あんな感じか？」

駿も食事を再開しながら、彼女の方を見ながら呟く。

「タヌキ顔の男前か？」

「タヌキ顔じゃなかったと思うよ。ジャンヌダルクは」

駿の言葉を訂正していると、眉間に小さくて硬い何かが、猛烈な勢いで飛んできた。昨日の出店で買われた、プラスチック製のストラップ。飛来した方向を辿るものの、当事者っぽい女子は取り繕うこともなく平然とおしゃべりしていた。

駿は悪戯っぽい表情を浮かべ、「や〜い、怒られてやんの」とケラケラ笑った。

「誰のせいで怒られたと思ってるんだ」

「知くらない」

彼はズーッと楽しそうに笑っている。直前の出来事を引きずることなく、切り替えも早くて図々しい。「古谷みたい」の一言ではあちやんの最期を思い出し、ケチャップのかかったオムレツを食べにくくなつた僕とは大違いだ。

深く考えるのをやめ、機械的に箸を動かして弁当を腹に詰め込んでいく。駿のどうでもいい話やギャグも気にかけることなく、なんとなく教室全体に視線を向ける。今朝の怪文書を信じるのなら、僕や江辺野さんだけでなく、この教室にいる全員に、滅びのリセット機能が組み込まれている。『人間』や『我々』かどうかに関係なく、今の時代を生きる人達全員に。

真境名は、ザ・シティとやらが仕掛けたというソレ、あるいは何らかの装置、機能を持ち出した、利用しているにすぎないのだろうか。きつかけや仕組みは全く予想もつかないが、それなら荒唐無稽さは若干下がる。

最も、チャカル教の話も、ザ・シティの存在や彼らが出した声明文も、まだまだ荒唐無稽の域を出ない。真偽は宙ぶらりんのまま、「本当ならどうしよう」と構えているにすぎない。

どちらか一方なら、作り話だと笑い飛ばせたのに。

いろんなことが腑に落ちないまま、居心地に悪い時間が過ぎていく。弁当を食べ終わる頃までもつっていた天気は、いよいよ雨を降らせ始めた。

初出 令和四年一〇月二七日 noteにて公開

第一二話

今日の放課後も、駿の都合に合わせてキャッチボールに付き合う心算でいたら、校内放送で呼び出しがかかった。職員室まで来いと言う。掃除当番を終え、帰り支度を整えて職員室へ向かった。

職員室から応接室へ通されると、母さんと織林刑事が待っていた。荷物は母さんに預けて、織林刑事と共に警察署まで着いて来いと言う。

「夕方にはお返ししますので」

織林刑事の申し出に、母さんは「遅くなくても構いません」と応えた。彼女は、「遅くなるなら、連絡するのよ」と言い、弁当その他を手に応接室を先に出た。母さんを見送ってから、校内を通って駐車場へ向かう。

道すがら、クラスメイトや他の生徒に見られるのはちよつと恥ずかしい。並んで歩く織林刑事は、堂々と胸を張って姿勢良く歩を進めるが、僕は何となく身体を小さくして歩いた。

屋過ぎから二時間ほど降っていた雨は弱まり、もうほぼ上がったも同然に思える。駐車場まで来ると、覆面パトカーらしき車が停まっていた。その横で、携帯灰皿を片手に米利刑事が紫煙を燻らせていた。彼はいつものように、「よう」と手を挙げた。

「もお。こんなところでタバコ吸わないでください」

「硬いこと言うなって。学生も来ないだろ」

米利刑事は吸殻を携帯灰皿に納め、流れるように助手席側のドアを開けた。不満そうな織林刑事に、顎で運転席を示す。

「あ、僕は……」

「ああ、ごめんなさい。気が利かなくて」

織林刑事が、運転席の後ろのドアを開けてくれた。何から何までやらせてしまったようで、申し訳なくなる。乗り込んだ後のドアまで彼女が閉めてくれた。

先に乗り込んでいた米利刑事は、僕がシートベルトを締めるのを待ちながら、紙製のバインダーを差し出した。

「署までちよつとあるからな。車内で読めるか？」

僕は渋々受け取りながら、曖昧に応えた。

「無理なら無理でいいぞ」

「ちよつと先輩、あんまり若い子虐めないでもらえますか？」

運転席に乗り込みながら、織林刑事が茶々を入れた。

「虐めるなって言うなら、お前が迎えに行くなよ」

「ええ。強面のオジサンより、お姉さんの方が嬉しいよね？」

織林刑事は、チェックを兼ねてバックミラーでこちらの様子を探る。彼女の視線をそれとなく交わしていると、車がゆっくり動き出した。

僕は米利刑事に手渡された資料を開く。

「思春期で気になるのは、豊かな膨らみだけだろ。中途半端なちんくりんが来たって、妄想も捗らねえよ。なあ、青少年？」

米利刑事は軽口を叩きながら、窓を開けてくれた。雨上がりで少しひんやりする空気が、俯き加減の心身に心地いい。やっぱり資料は後で見るとしよう。前でやりとりされている話は聞こえないフリをして、顔を上げる。

「一緒にいた娘は細かったけどなあ」

「現役女子高生と一緒にすんなって、言っちゃれ」

側から見ている方がソワソワする勢いで、二人のラリーが続いている。話のきつかけが自分にあると思うと、余計に気まずいし、深入りしたくない。織林刑事が、「ドラレコもあるんですからね」と圧をかけている間に、覆面パトカーは夢洲署へ到着した。

一足先に降りた米利刑事が、グルッと回ってドアを開けてくれた。気持ち悪いぐらいの接待に、渡された資料を車内に置き忘れそうになる。米利刑事が指差すそれをしっかりと握って、パトカーを駐車しに行った織林刑事を待たず、中へ案内される。

僕は後ろを少し気にかげながら、先導する米利刑事の後を追う。今まで通された取調室とはまた違う部屋に向かっているらしい。前を向いて、廊下を歩きながら、米利刑事は口を開いた。

「今朝の騒動は知ってるな？」

チラリと見られて、答えに迷う。彼は「詳細までは、知らなくていい」と言った。それならと、頷いた。

「声明文のいずれも検証中の立場だが、治安維持の観点で捜査の継続が認められた」

夢洲署の奥、署長室と書かれた部屋の立派なドアを、米利刑事は三回ノックした。彼は返事も待たずドアを開け、「失礼します」と中へ入った。ドアの外で躊躇う僕に、中へ入れと顎で示す。

奥のデスクで、深々と椅子に座っている制服姿の男性を、「西日署長だ」と軽く紹介するなり、その手前にある応接スペースにとっかかり座った。間に資料が積まれたテーブルを挟み、入口から遠いソファを勧められる。

西日署長は僕をチラリと見て、「よろしく」とメガネをずらして片手を上げるだけで、自分がさつきまで目を通していた書類に視線を戻した。机の両サイドに、山のような資料が積み上げられている。こんな時代でも、承認待ちの書類が後を立たないらしい。

僕が恐る恐る米利刑事の向かいに座る頃には、織林刑事が当たり前のように署長室へ入って来た。米利刑事の隣へ腰を下ろした。

米利刑事は、僕に持たせていたバインダーを拾い上げると、資料の一番上に置き、該当ページを開いて資料の右下を指差した。

「見覚えは、あるな？」

どちらが出した声明に関する資料かはまだ掴めていないが、彼が示しているマークは、この数日何度も目になっている。細長い長方形と、雷のマーク。

「バベルの塔は、街と表されることもあるらしい」

聖書には、「バベルの塔」という表現では現れず、別の書き方がなされているというの、この間自分でも読んだ気がする。

「バベルの塔の大筋は知ってるよな？」

「天まで届く塔を作ろうとして、神の怒りに触れた」

米利刑事は小刻みに頷きながら、「そうだ」と言った。

「技術革新に対する戒めとする説もあるそうだ。そんな連中が、意思疎通を阻害されて散り散りになった。バベルの塔を表す記号を持つて」高い技術を有する連中が、「街」を名乗って、陰に日向に偏在している。決して目立つことなく、確かな存在感を示しながら。

「チャルカ教と連中の関係は？」

「コインの裏表つてところかな。それ以上は」

米利刑事は、両手を上げて肩をすくめた。

「これを調べ始めたら、ストップがかかったんですね。捜査を継続してもいいんですか？」

僕は横目で西日署長の方を見た。彼は欠伸を噛み殺しながら、書類を近づけたり遠ざけたり、メガネをつけたり外したりを繰り返している。

「問題はここだ」

米利刑事の指が、マークの少し上を指した。カルワリオ協定に基づき、違反を検知した際はリセットを執行する、と書かれていた。

「カルワリオ協定とか、リセットとか、何なんですか？」

「全く分かん。そこまでアクセスする権限はないらしい」

米利刑事は、「ですよね、署長」と大きめの声で言った。西日署長は「そういうことで、よろしく」と軽い調子で返す。

「何を意味するかは分かんが、治安維持命令が出た」

朝の緊急特番をよく聞いておけばよかった。米利刑事の言いたいことがイマイチ分からない。ただ、街中の様子とか、教室での出来事を鑑みるにそうすべき理由はよく分かる。

「平たく言えば、仲良くやれよっていう脅しっぽいんですけどね」

米利刑事の隣でおとなしそうに、資料をパラパラとめくっていた織林刑事がボソッとつぶやいた。

「双方の言い分が正しければっていう前提の上ですけど」

「正しくなくても何かが起こる可能性があるなら、警察としては市民の安全を守るために尽力しなきゃならない」

「内部の追及、情報開示は許されないのにやれることをやれ、と」

米利刑事は「そういうこと」と頷いた。

「無茶苦茶だよなあ、全く」

ソファの背もたれに身を任せ、どっかりと座り直した彼の言動が見えない、聞こえないはずはないのに、西日署長は微動だにすることなく、次から次へ書類チェックに勤めている。

「で、僕が呼ばれた理由は？」

警察の治安維持、チャルカ教とザ・シティのやり取りに、一人の男子高校生が協力、介入する余地はなさそうに思える。米利刑事は織林刑事に何やら目配せするが、彼女は全く気がつかず、マイペースに資料をチェックしていく。米利刑事は仕方ないといった様子で立ち上がり、「コーヒーもらいますね」と戸棚の前で怠そうに宣言した。

「君はどうする？」

「あ、私は緑茶」

米利刑事は、「お前は自分でやれ」と織林刑事に言い捨て、僕の方を見直した。僕も彼と同じコーヒーにしてみよう。二人分のコーヒーと、織林刑事の緑茶を入れてテーブルへ戻ってきた。

「一旦情報を整理すると、我々が直接、ザ・シティを調査することは難しい。治安維持と、真境名の足取り、過去を探ることはできる」

「警察でもできないことをやれっていうんですか？」

「危険なことはもちろんやらなくていいし、君のご家族や君自身の身の安全は、我々がちゃんと保障する。君は、君にできることをして欲しい。必要なら、いつでも声をかけてくれ。いくらでも協力する」

立場上できない事情があるとして、警察や大人にできないことを、僕にできるとはとても思えない。何をやらべいいのかも、今ひとつ見えてこない。

「大勢の命に関わることも知れない。改めて、協力して欲しい」

米利刑事は居住まいを直し、頭を下げた。マイペースだった織林刑事も、タイミングを見計らっていたのか、同じように椅子に腰掛けたまま深々と頭を下げる。できることなら協力はしたい。幸い、協力できそうな環境も整っている。真境名は僕を舞台の主演に据えようとしていて、それを拒むことはできそうにない。コレも、彼の筋書き通り、なのだろうか。

明確な答えが出せないまま、目の前の大人二人はじつと頭を下げている。

「ちょっとだけ、時間をもらえませんか？」

僕が二人にそういうと、彼らはややあつて頭を上げた。

「お茶も入ったことですし、ちょっと、休憩しませんか？」

織林刑事の言い方に、米利刑事は何か言いたそうだったが、途中で言葉を飲み込んだらしい。彼女に同意して、休憩することになった。解散でも解放でもなく――。

第一三話

気分転換を所望したら、係の人に案内されて屋外の展望スペース（という名の喫煙所）へ連れて行ってもらった。外部の人間には、普段開放されていない場所らしい。駅の方まで行けば、一体になった高い建物、建造物は多々あるが、この辺りでは視界を遮るものは少ない。

もつと遅い時間、陽が落ちればそれなりに夜景も見えそう。海の向こうに見えるのは、尼崎の工場地帯だろうか。もつと西へ目を向ければ、神戸の夜景も見えそう。海を背にすると、自分達の住む街が見渡せる。

日中の曇り空が嘘のように、綺麗な夕焼けが広がっている。その下では、そろそろ夕飯時なんだろうな。釜戸から立ち上る煙なんかも、見える時代があったのかも。後ろで金属の軋む音が聞こえ、振り返ると、米利刑事が缶コーヒーを二つ持って立っていた。

「ホットで良かったかな」

彼は白っぽい缶と、期間限定っぽいデザインの缶を持ちながら、両方差し出した。僕は白い方を受け取った。しっかりと握り締めるには、まだ熱い。雨上がりの夕方とはいえ、六月下旬。冷たい方が良かったかも。

「やっぱ、お子ちゃまだな」

カフェオレを選んだ僕を甘党と言いたいようだが、彼のそれも、それなりに糖分が含まれている。米利刑事は手すりに身を預けつつ、タバコに火をつけた。一気に飲み干した空き缶を、灰皿代わりにする。

「こんなにコーヒーばかり飲んだら、トイレ休憩も要りますね」

「できたら、その前に終わらせたいな。無理することもないけど」

米利刑事は、こちらを見ることなくポーツと宙を見つめている。煙の行く先でも眺めているのだろうか。

「僕の意見なんて、必要なんですか？」

彼は「ん？」と小さく唸りながら、僕を見た。

「拒否権なんて、なさそうに思うんですけど」

「自由意志なんか無視して、力尽くで命令しろって？」

僕が、「その方が、楽なんですけど」と頷くと、彼はすぐには返事をせず、タバコを口につけた。たっぷり間を置いて、煙を長く吐いた。

「権利もないし、義務もない」

彼は自分を指差し、次に僕を指差しながら言った。

「ただの公務員に、他所様の大切なお子さんを、保護者でもないのに指図する権利はないよ。オレたちは公僕だから、上からの命令には絶対服従。たま〜に現場都合で違反することもあるけど、仕事だからなあ」

「オトナって、大変ですね」

「誰だって大変だろ。形と大きさ、タイミングが違うだけでさ」

便宜的にオジサンと呼んでいる米利刑事だけど、年齢的にそこまで離れているようには思えない。お兄さんとオジサンの間ぐらい、周りから見れば若造と呼ばれるようなのに、随分と変わっている。達観というのか、修羅場をくぐっているといるのか、その辺りをどう言葉にすればいいのか、僕にはよく分からない。

「なんで僕なんですかね」

自分より身体的な意味でも頭の出来という意味でも、優れている人は沢山いる。著名な同級生、名家の高校生だっているだろう。どこにでもいる、普通の、もしかしたら普通以下の、ただの男子高校生だ。

「あ、選ばれたとか思ってる？ 読書家が主人公気取りだ」

米利刑事の物言いに、なんとなくイラツとする。さっきの織林刑事も、こんな気分だったのだろうか。

「いいんじゃないの、主人公で。変なところで自信過剰な、特別な自分で結構じゃないか。三文芝居の演出家に同意するのも癪だが、似合ってるんじゃないか？」

米利刑事の言葉が、イマイチ釈然としない。飲み込め切れていないのに、織林刑事が「そろそろ、再開しますよ」と呼びに来た。米利刑事は僕の缶コーヒーも回収し、飲み残していないかを確かめると、歩きながらゴミ箱に放り込んだ。

僕はそれを小走りに追いかけて、途中でトイレに寄ってから、署長室へ戻った。署長はすでに、帰宅した後らしい。

「で、どうする？」

ソファの向かいで、どつしり構えた米利刑事が改めて訊いて来た。

「嫌なら嫌と、言ってもらって構わない」

隣に座っている織林刑事の方を見ると、彼女は頷いた。

「無理しなくていいからね」

彼女の優しい声が、逆に僕を追い詰める。

一瞬壁掛けの時計へ視線をやると、もう間もなく午後六時。そろそろ決断して、帰りたい気持ちにもなってくる。とはいえ、このまま受けて、やり遂げられるとも思えない。

「米利刑事は、どこまでが真境名のシナリオだと思えますか？」

「最終目標、目的は分かんが、ここまでは想定通りだろうな」

物証を残さず身元不明の死体を作れる彼なら、最初の現場でわざわざマークを残した理由はなんだったのか。意図的に、ここまでする種を蒔いていたのなら、辻褄は合う。

チャルカ教の言い分、ザ・シテイのいう「協定」や「リセット」の意味するものも全く分からないが、こうなるところまで狙い通りだと言うのなら、舞台上に登らない選択肢は無いに等しい。

そこまで目の前の二人も分かっただけで、その上で主導権、決定権を委ねてくれている。できることなら背負いたくない。自由で気ままな、馬鹿な高校二年生で在り続けたいと思う。でも、このまま逃げ続けたら、アイツに一矢報いることは不可能だ。舞台上に上がれば、アドリブのチャンスはあるかもしれない。

「やりませぬ。僕に何ができるか、分かりませんけど」

僕が口を開く前に、米利刑事は顔を見て頷いた。彼は、「よろしく頼む」と手を差し出した。僕の手を強引に取り、無理やり握手させられる。これぐらいの強制は、許されるらしい。手が痛むぐらい、力強い握手だった。

握手を終えると、米利刑事は机の上の資料を片付けて傍に寄せ、織林刑事に一枚の書類を持って来させた。使い込まれた万年筆が、横に添えられる。

「一応、形だけな」

機密云々が記載された委任状となっている。日付と署名を書き込むようになっていた。印鑑は持ち合わせていない。最後に、苗字を書いて丸で囲んでOKとすることになった。

念の為、織林刑事がチェックして、コピーを取って原本をファイルにしまった。コピーはクリアファイルに入れて、僕に差し出される。

「今日のところは、こんなところかな」

米利刑事は、資料の山と、先ほどの書面を指差し確認しながら言った。織林刑事もダブルチェックする。彼女が「OKじゃないですか？」と言うと、彼はソファに腰掛けたまま両腕を左右に開き、両肩を大きく動かした。頭上に掲げ、背伸び

もする。

「具体的な話はまた今度な」

米利刑事は腕時計を見て、「もうこんな時間か」と呟いた。織林刑事は広げっぱなしの資料を、順番に並べ替えて整頓に励んでいる。

「カツ丼でも食って行くか？」

取調室でないとは言え、まだ警察署の中にいる。現役の刑事に、時代錯誤なそのセリフを言われると困ってしまう。

「奮発して、ちよつといい奴食いに行こう」

「臨時の予算がついたからって、ダメですよ」

署長室の戸締りを確認していた織林刑事は、一通り指差し確認も終えて、僕らを部屋の外へ追い出した。彼女に持たされていた鍵で、署長室の扉が施錠される。

「たまには上手い奴、食いたくないか？」

「それはそうですけど、一応彼の経費だし」

米利刑事の言葉に、織林刑事の心が揺さぶられているらしい。そう言えば、さつきの委任状に、経費だ権限だのの記載もあった気がする。どうやら、奢りにしたって、一時的には僕のお金になるらしい。

家族のいないところで、他所の大人と飲食するのも興味津々ではあるが、「何時ごろになるの？」という母さんのメッセージで、心を決める。

「とりあえず今日は、帰ります」

僕の言葉に、なぜか織林刑事の方が残念そうな表情を浮かべる。彼女の様子を見ながら、米利刑事は「そいつは、残念だな」とケラケラ笑った。

「送って行くか？」

米利刑事は、空中でハンドルを握るそぶりを見せた。僕は、首を横に振った。駅も近いし、バスか電車で帰ればいい。

「じゃあ、コイツだけ」

米利刑事は、交通用のICカードを取り出した。後払い方式のタイプだ。

「使い過ぎ厳禁。着服は、こうだからな」

米利刑事は両手首を合わせて見せた。使い放題とは行かないらしい。でも、これに必要な時の交通費は、少ないお小遣いから出さなくていい。

「じゃあ、また連絡するから、それまでは学業に励めよ、青少年」

特別な権限を行使して、学校をサボるのは無理らしい。玄関で手を振る二人に別れを告げ、目の前の通りに立っているバス停の路線図と、時刻表とを確かめた。

初出 令和四年一月二八日 noteにて公開

第一四話

「で、昨日の女刑事とは何も無かったんだ」

昼食のハンバーガーをテイクアウトした帰り道で、駿が昨日のことを訊ねてきた。一緒に歩いているところを、彼にも目撃されていたらしい。

「年上のお姉さんと、これ見よがしに目立ってたのに」

「やつぱりそう思う？」

駿は目を丸くして、真つ直ぐこちらを見つめて頷いた。やつぱり、米利刑事の方が良かったか。リモートが終わるまでに、学校中のみんなが忘れてくれることを願おう。リモートが終われば、すぐに期末試験で夏休みのはず。

駿は両手に下げた買い物袋を、左と右とで入れ替える。在宅勤務の母と、小学校もリモートになった真珠の分も含まれていた。わざわざ二人で来なくてもいいだろうに、朝からウチで一緒に勉強していた駿は、「外に出るなら、ツーマンセルで行こうぜ」と提案し、それを明確に否定する材料もなく、そのまま復路を歩いている。

往きで特に問題はなかったし、帰りも同じ道を通るならトラブルはないだろう。場所によっては、昨夜のニュースや今朝の情報番組でやっていたような、デモ隊の衝突とか小規模な騒動は起きているらしい。

ほぼ住宅街のこの辺りでは、そんなに目立つ不穏な出来事は見当たらない。昨日見たような、選挙前の街頭演説に近いアピールがせいぜいだ。ただ、オフィスや教室といった閉鎖空間、部活動といった場面で暴力沙汰、数人単位の小競り合いはあったようで、リモートにできるところはリモートで、という会社や学校は出ている。そのおかげか、普段よりこの辺りを出歩く人は若干多い気もする。

「大人も上手いこと、サボってるんだな」

駿は、誰にいうともなしに、ボソツと呟いた。本来なら授業を受けている時間に、自由に外を出歩いているのは、我々だけではなさそうだ。

公園に隣接した公民館や、大きめのスーパーで、大勢で集まって怪しげな集会をしている人たちがいない訳ではない。警ら中の制服警官、お巡りさんも増えているのは、ありがたかった。

昨日も集会が行われていた、大きめの公園まで戻ってきた。この三叉路を曲がれば、家まであとちょっと。今日も幟が何本か立っていて、ビールケースをひっくり返してまとめたような、簡易のお立ち台も出来上がっていた。

昨日より少し多めに人が集まっている。極力絡まれないよう、関わらないように、目を逸らしてさっさと横を通り抜けてしまおう。そう思って横を見ると、駿はお立ち台の方を見ながら足を止めている。

「何やってんだ。早く行くぞ」

駿の背中を軽く引つ張って、小声で促す。駿は「でも、アレ」とお立ち台へ上がる人物を指差した。目の前の人だかりを避けながら、その先を確かめた。

私服の稲荷さんを見るのは初めてだった。彼女らしいゆるふわな、ファンシーとかガーリーと言った印象の服を着ている。身体の線をできるだけ強調しないようにしているのだろうか。

そのファッションには似つかわしくない拡声器を、腕章をつけた係員みたいな男から受け取った。スイッチを入れ、何度か声とマイクの調子を確認する。

「機械が我々の創造主など、ありえない。機械の創造主は、我々人間だ。被造物は大人しく、人間に隷属すべきだ。対等な関係、人権なんて必要ない」

やや低いトーンの落ち着いた声からは想像しにくい、ちよつぴりキツイ主張が飛び出した。周りの人間が、「そうだそうだ」と同調し、彼女をどんどん煽っていく。集団の一番後ろに、私服のテツちゃんも立っていた。僕らには気が付いていない様子で、お立ち台の稲荷さんをジッと見て、拳を掲げている。

「ロボットは、ひたすら労働、隷属すれば良い。ロボットは、人を傷つけてはならない。カレル・チャペックも、アイザック・アシモフもそう言ってる。機械は、本来のロボットに還れ」

ここから見える彼女の目は、悪ふざけとか単純な好き嫌いとかのレベルを超えた、怒りや憎悪に染められているようだ。テツちゃんも、同じ気持ちなのか？

「おい、行くぞ」

駿は、僕より先に人だかりから離れながら、小声で言った。僕が先にそう言ったのに。忍足で徐々に小走りへ遠ざかる予定が、ビニール袋と中のバーガーの匂いのせいで、集団の中の一人に気付かれた。こちらを振り返られただけなら、危害は加えられまい。

「おい、その機械！」

そこまで高くないお立ち台でも、平場よりは見通しがいいらしい。稲荷さんが

拡声器で僕らのことを教えると、集団が一斉にこちらを向いた。正常な連中なら、何も無い。一瞬足を止めて振り返る。目つきや息遣いが、若干怪しい。

これはマズイと思っていると、大通りの方から別の集団が近付いてきた。どうやら公園で集まっているメンツと相反する主義のデモ行進らしい。

「機械差別はやめろ。被造物の立場を弁えろ」

機械が人間を造ったという、チャカル教の言い分を間に受けている方々の、シユプレヒコールがぶつけられる。

「隷属すべきは被造物だ。創造主に跪け」

さつきまでこちらに向いていた危ういエネルギーが、デモ隊の方へ向く。助かったと言いつつ切れない状況で、怪しい空気は加熱していく。

「今まで散々虐げられてきた機械の怒り、長年の恨みを忘れるな。世界も街も、我々が造ってるんだ！」

デモ隊の戦闘で、拡声器を持つ男性が、公園で集まる集団に向けて叫んだ。

デモ隊について来た二人の巡査は、一人は無線で応援を呼び、もう一人は二つの集団の間に入って、物理的な衝突が起こらないように制している。たまたま自転車に乗って通りかかった巡回中の警官も、「そこまでだ、止めなさい」と大きな声で忠告している。

住宅街の中、狭い通りが人で渋滞しつつあった。応援で呼ばれたパトカーや、宅配のトラックが双方から侵入してくる。一方はサイレンを、もう一方はクラクションを鳴らしながら、道を開けろと要求していた。

トラックの同席者が降りてきて、集団の一番後ろにいた男性に、「道を開けろよ」と突つかかる。警官はそれを諫めながら、集団の解散とデモ隊に立ち止まらないよう指示を出す。何者かに押された警官が、近くに居たバンドマン風の兄ちゃんとぶつかった。

「痛えな。何すんだよ」

彼が警官を軽く突き飛ばすと、今度はデモ隊の先頭近くにいた恰幅の良いおばちゃんが尻餅をついた。彼女は、「ちよつと、何すんのよ」と尻を払って立ち上がる。

掴み合いの喧嘩が、いつ始まってもおかしくない。双方が距離を詰め、胸倉を掴み合い始めた瞬間、応援に来た警察官が拳銃を抜き、空に向かって撃った。大きな音が、周りにいた人間の足を止めさせる。

「我々の指示を聞いてください。歯向かえば、公務執行妨害で逮捕します」

駆けつけた多数の警察官により、公園で集まっていた集団は解散させられ、デモ隊は予定通りの更新を再開した。双方拡声器の使用は止められ、交通整理ができて道が通れるようになったら、宅配のトラックはうちの方へ曲がって、ずっと先まで走って行った。

幸か不幸か、稲荷さんやテツちゃんがこちらへ流れてくることはなかった。警察に誘導されて、交番で簡易の事情聴取になると、一番近くにいた警察官が僕らに教えてくれた。

「まだ、真偽不十分の状況でコレか」

騒動をじつと見て動けなかった僕を小突いて、駿は一足先に歩き始めた。昨日の教室の時点で相当おかしかったけど、アレを真に受ける人たちが段々増えている？

「あそこにテツちゃんがいたのはショックだな」

駿も彼を見つけていたようだ。流石に分かるか。テツちゃん以上に、あの稲荷さんがあそこまでの演説を打つとは思わなかった。文学少女なだけに、そういう世界にも明るいかもしれない。

「実はこんなに嫌われてるとは、思わなかったよ」

昨日突っかかってきた押井ならまだしも、仲の良い幼馴染三人組としてやってきたテツちゃんにも、あんな風に思われていたとは、確かにショックだ。最悪、僕ら個人への恨みつらみじゃないと良いけど、稲荷さんの方はかなり本気っぽかったなあ……。

例の協定、違反の中身やラインが全く分からないけど、この調子なら、ザ・シテイが振りかざした「リセット」とやらも思いの外、近いかもしれない。

「どうしたもんかねえ」

僕の呟きを、昨日の出来事を一部しか知らない駿は、「ん？ どうした？」と明るい調子で聞き返してきた。僕は「なんでもない」と返し、簡単には話せない辛さというのを、今更ながら味わった。

第一五話

昼食を終える頃、不意に呼び鈴が鳴った。母さんが、モニター付きのインターホンで応対してくれている。流石にポテトが多過ぎたかと思いながら、食べ終えた真珠の包み紙を受け取った。

「アナタのお客さんだつて」

母さんは僕の方を見て言った。やり取りを変われと手振りで行われる。後片付けと来客対応とを入れ替えてもらう。モニターを覗き込むと、ベネチアンマスクで目を隠した、いかにも怪しげな人物が立っていた。身につけているものの雰囲気、デザイン性はグレゴール氏が纏っていたものと似ている気はする。

六月の昼過ぎに、いかにも分厚そうなあの生地だとキツそうな気もするけど、男女の別も分からない相手は、教団からの使者だと名乗った。声を合成していなければ、恐らく男性だろう。

「上がってもらったら？」

母さんは、食卓を片付けながら言った。普段なら、事前に言えとうるさいのにな。どうするか答えが出ないまま、とりあえず玄関のドアを開けた。中へ案内するものの、相手は「こちらでもよろしいですか？」と上がり框に腰掛けた。座っているのに、かなりの存在感がある。教材や置き薬の訪問販売みたいなスタイルで、彼は話を切り出した。キッチンから、麦茶を持たされた駿が、お盆を持ってやって来る。

「迷える若者を導きなさい、と言われましてね」

彼はそばに置かれたグラスを見て、「よろしいんですか？」と僕らの方を見た。運ばせた本人は、ドアの向こうでよく見えないが、多分問題はないのだろう。代わりに頷いた。

「では、ありがとうございました」

謎の訪問者は、ゆつくりとした動作でグラスを両手で持ち、よく冷えた麦茶を一口飲んだ。すぐ近くで、駿が相手のことをじろじろ観察している。次の言葉を待っている間に、胸ポケットに入れたケータイが震え始めた。会話を中断して通知を確認すると、米利刑事からの電話だった。

訪問者へ一瞬目をやると、彼は「どうぞ」と手で促した。遠慮なく、電話に出た。

「すまん。部下がやらかした」

電話口の米利刑事は、随分と早口で言った。後ろが少々騒がしい。どうやら外、それも街中らしい。少し強めにドアを開閉する音も聞こえるような。車にでも乗り込むのだろうか。

「やらかしたって、何を？」

「アイツの監視だ。神出鬼没の奴だから、しつかり見張れって言ってたのにな」

一瞬声が遠くなり、「チャカル教の教会だ」と小さな音が聞こえた。シートベルトを引き出すような音と、小さな金属音も一瞬間こえる。

「足取りを追跡中だ。そっちも、警戒頼む」

米利刑事は、そこで一方的に電話を切った。

「どうかなさいましたか？」

訪問者は、ケータイを握りしめている僕を見た。どう説明するか組み立てている間に、リビングへ通じる後のドアが開いた。昼食を終えた真珠が、二階の自分の部屋へ帰るところらしい。

駿は上手に避けて、道を作る。真珠は訪問者を認めるなり、無邪気に「こんにちは」と挨拶した。訪問者は自然に「こんにちは」と返す。真珠はそれ以上気にすることなく、マイペースに横の階段を登っていく。訪問者は、真珠の後ろ姿をじつと見ていた。

「妹さんですか？ 相変わらず、お元気ですね」

訪問者は、麦茶を飲み干してグラスをお盆に戻した。

「隣の部屋に、美味しいラムネが隠してあるって、教えてあげなくていいんですか？」

訪問者は、真つ直ぐ僕の顔を見る。ベネチアングラスの奥が見えても、正体はきつと掴めない。彼は上がり框から腰を上げた。

「さ、参りましょうか」

彼は僕らの方を振り返った。こちらが従わない限り、ドアの前から退く気はないらしい。僕は彼に、「ちよつと待つてもらえるかな」と伝えると、彼は「どうぞ」と答えた。

「車を回して参ります」

彼はそう言うと、玄関ドアを開けて外へ出た。僕はお盆とグラスを回収し、駿

を伴ってリビングに戻った。まだキッチンにいた母さんが、「あら、もういいの？」と呑気に言う。僕はお盆とグラスを彼女に差し出し、「ちよつと、出かけてくる」と言った。

「遅くなるなら、ちゃんと連絡しなさい」

彼女は昨日のことで、まだブーブー言いたいらしい。夕方六時に連絡しても、ダメらしい。もつと早く連絡すると伝え、自室へ荷物を取りに行く。駿の荷物も、僕の部屋に置いてある。

隣の部屋から、微かに午後の授業が始まったような音声が聞こえてくる。駿は声の調子を落として、口を開いた。

「どうしたんだ、一体」

「今日はお開き。悪いけど、帰ってくれ」

駿は、「まだ、昼過ぎだぜ」と文句を言いながらも、僕が慌ただしくしているからか、素直に散らかった荷物をカバンに詰めている。財布や例のカード、ケータイの充電器と、どこへ行くときにも持つていくものをリュックに詰め、支度が済んだ駿と共に下へ降りる。リビングの方へ「行つてきます」と言い、駿と共に外へ出た。

表には、訪問者の言っていた、立派な黒塗りの車が停まっている。彼は車の横に立ち、僕らが出てくるのを待っていた。

「お友達も一緒にどうですか？」

不服そうな顔で立ち去ろうとしていた駿が、足を止めて振り返った。口調こそ終始丁寧だが、拒否させない謎の威圧感が含まれている。

「帰れって言つたけど、付き合ってくれ」

無理やり帰らせたのに、舌の根も乾かぬうちに撤回する羽目になるとは。駿は困惑した表情と、嬉しそうな感情が入り混じった顔で、訪問者がドアを開けた後部座席に乗り込んだ。僕はその隣に座る。

訪問者は車をぐるっと周り、僕の目の前、助手席に乗り込んだ。お抱えらしい運転手が、文句の一つも言わず、車を発進させる。どこへ行くのか、行き先は聞いてない。

「いい加減、暑いんじゃないですか。先生？」

僕は目の前に座っている人物に、ぶつきらぼうに話しかけた。

「いいえ、快適ですよ。温度センサーは切つてありますから」

彼は玄関先でやり取りしていた時は少し砕けた調子で、フランクに答える。

「もうそのマスクぐらい、取ってくださいよ」

「これを外しても無意味ですよ」

サイドミラー越しに微かに見えるその口元は、微笑んでいるように見えた。米利刑事達の、必死の裏取り捜査、追跡調査は丸っ切り徒労に終わるかもしれないなど、その一瞬、脳裏に過ぎった。申し訳ない気持ちも、微かに湧いてくる。

カバンを胸の前に抱えた駿が、小声で耳打ちして来た。

「なあ、これ、どこ向かってんの？」

一瞬前に目をやるが、前の二人はどちらも何も言わない。助手席の彼は聞こえているだろうに、楽しそうに窓の外を見ている。

「とりあえず、いきなり命の危機はないと思う」

「命の危機って、お前……」

僕は耳打ちせず、前の二人に聞こえるように言ったつもりだが、やはり二人は微塵も動かない。運転手は完全に、自動運転の付属品と化している。僕は駿に、大人しく座っているように手で合図して、前を向いた。

「目的地は、教えてくれないんですよね？」

「着くまでのお楽しみと言いたいところですが、もうすぐですよ」

彼は、奥に見えてきた建物を指差した。先日も訪れた、命輝大学。江辺野さん、彼女のお父さんと共に、真っ暗な構内を歩いた瞬間は今もまだ鮮明に覚えている。何故そこへ向かうのか、次の質問を考える間に車は目的地に到着した。僕も先日停めた駐車スペースに車を止め、謎の人物は、僕らに降りるよう言った。

彼の先導に従って、大学構内を歩く。僕の少し後ろから、周囲を見回しながら歩く駿が付いてくる。僕らが連れてこられたのは、例の研究室ではなく、大学の図書館だった。

第一六話

「あれ？」

自分達を先導してきた人物に気を張りすぎて、それ以外への注意力が散漫になっていた。図書館の中に入ると、そこには江辺野さんが居た。すぐ側に、彼女のお父さんもいる。彼女は、僕が現れたことに驚いた様子で、さっきの言葉を漏らした。どう返すか迷っている間に、駿は僕より先に中へ入って、「よう」と彼女に挨拶する。

「君だったか。確か、甲斐くん」

江辺野さんのお父さんが、僕の方を見た。僕は軽く頭を下げて会釈する。駿は、江辺野さんにお父さんを紹介され、「よろしくお願ひします」と声を出して挨拶していた。

「閉架に案内して欲しい人がいると申請があつてね。本当は教員の同席が必要なんだが、代理で私が指名されちゃつて」

彼は、先日僕が職員室に返却した例の鍵を持っていた。

「クリーンルームに入るパスも、もう持つてるからつて」

彼が言うようなものを、誰かから受け取つた覚えはない。状況を整理して説明する前に、彼のペースで事務処理を進められる。学外利用者の利用票と、閉架へ入室するための申請書に、日付と名前を書くように促された。僕の隣で、駿も促されるままペンを走らせている。

僕はふと顔を上げ、後ろを振り返つた。いつの間になくなったのか、ここまですべて来た人物の姿は、そこになかった。ペンを手に持ったまま、入り口からロビーへ戻る。周囲を見回しても、それらしい人物はすぐには見つからない。兎にも角にも、米利刑事に連絡しておかないと。

ケータイを取り出して、通話履歴を開いた。その瞬間、背後から耳元で囁かれる。

「野暮なアドリブは控えてもらおうか」

全身に毛穴なるものは無用な身体だが、あまりの不意打ちに鳥肌が立った。無用の長物に思えるそんな機能も再現してあるなんて、日常の中では体験できない

感覚だ。どうでもいいことを脳の中で考えながら、なんとか冷静さを取り戻し、声の方を振り返った。

一瞬の出来事だったのに、怪しい人物は見当たらない。幻聴というにはあまりにもしつかりしていたが、誰もいないなら電話をかけられる。気を取り直し、発信ボタンを押すためにケータイを持ち替える。ブラックアウトした画面に、ベネチアンマスクが映り込む。

「これは警告だ。次も違反すれば」

映り込んだ人物は、指で銃を作って撃つフリをした。ややあつて、マスクに覆われていない口角が上がる。後ろを振り返ると、分厚そうな外套を抱え、ベネチアンマスクを外しているアイツがいた。

真境名はゆつたりとした足取りで、建物の外へ出て行つた。僕はケータイを握り締め、そのままポケットにしまった。駿が僕を呼びに来る。

「どうした？」

「いや、別に」

心拍数上がり、冷や汗をかいているのを悟られないよう、図書館のカウンターまで戻った。必要書類に記入して、お父さんに書類をチェックしてもらう。彼は僕と駿の書類に、自分の腕時計とカウンターに設置してあつた時計とを確かめてから、受付時刻を記入している。

「僕らを連れて来た人、見ましたよね？」

作業の横から悪いなと思いつつ、質問を投げかけた。彼は手元にペンを走らせながら、「ああ、見たよ」と答えた。

「いつもおいでになる、この先生だったけど」

彼は、「なあ？」と娘に確認する。彼女はその場で頷いた。駿は、「へー。変わった趣味の先生がいるんだな」と言う。どうも僕らと、江辺野さん親子の見ていたものが違うらしい。

「そうか。ジャミングだ」

すっかり失念していたが、周囲の視覚や聴覚に干渉して、フェイクの画像や音声を刷り込ませる技術が随分前に確立されていた。初期はコンタクトレンズやゴーグル、特殊なデバイスが必要だったが、今は仕掛ける側にジャミング装置、機能があれば可能だ。

一般市民の使用は禁止、許認可制で限定的な使用は認められている機能だが、彼の前では便利なツール、楽しいおもちゃの一つに過ぎない。流星に、なんでも

アリが行き過ぎじゃないか？ 独りよがりの三流脚本に拍車がかかっている。

「よし、コレでOKだ。じゃあ、行こうか」

お父さんは、カウンターの一部を跳ね上げ、僕たち三人を中へ誘う。「関係者以外立ち入り禁止」とプレートがかかった扉も、躊躇なく開けてその先へ踏み入っていく。

「江辺野さん、桂花さんはどうしてココに？」

「閉架に入れるって聞いたなら、自分も入りたいつて懇願されてね」

お父さんは、僕らの後ろをついてくる江辺野さん、駿の方を見た。二人とも、さつきから妙に仲が良さそうに喋っている。

「彼とは、どういう関係なのかな？」

「僕の腐れ縁というか、幼馴染で。今度の修学旅行で同じグループに」

お父さんは、「ふーん」と前を向いて道案内に戻った。

「私としては、まだ君の方が良いかな」

「何がですか？」

彼は僕の顔を見て、曖昧な笑顔を見せた。これ以上は深く突っ込んではいけな
い気がする。黙って彼の後をついていく。

「さ、着いたぞ」

図書館のバックヤードめいたところを抜け、サーバルームっぽい部屋の隣へやって来た。嚴重そうな扉と、その横に認証キーをタッチするパネルが設置されている。

「それじゃあ、パスをそこに」

お父さんに促されて思い出したが、それっぽい特別なものは持っていない。一応カバンを開けて、中を確かめてみる。目ぼしいものはやはり見当たらない。後ろから中を覗き込んでいたお父さんは、米利刑事から受け取ったICカードを指差した。

「それじゃないかな」

「いや、そんなはずは……」

ただの交通系ICカードで、このセキュリティをクリアするはずはない。無理だろうなと確信を持ちながら、ICカードをパネルにかざしてみる。一瞬ピピッと音がすると、さつきまで赤かった小さなランプが緑に変わった。取っ手を握り、奥の方へ体重をかけると扉が動いた。

ただの交通系ICカードだと思ったけど、どうやらなんらかの身分証、特別な認

証キーも兼ねているらしい。裏表をじっくり眺めてみても、ただのICカードには見えないのに。

とりあえず、鞆を持って扉の奥へ入った。大小さまざまなロッカーが左右に並び、金属探知機みたいなゲートの向こうに、もう一枚扉が見える。どうやらあそこから先が閉架らしい。

お父さんは、手元の資料へ改めて目を通し、必要な箇所を読み上げる。

「中での記録は禁止されているので、通信機器、カメラ等は持ち込めません。ペンとメモは持ち込めますが、書いたメモは最後にチェックされ、不合格の場合は没収されます」

さっき使ったICカードも、ここのロッカーに入れておいた方が良さそうだ。貴重品も一緒に入れて、鍵をしてしまおう。僕も駿も、ほぼ身一つになる。江辺野さんは、小さなポーチを肩から下げていた。ハンカチやティッシュと言ったものらしい。

準備ができた人から順番に、ゲートを潜る。二重構造のゲートの中で、強烈な空気を浴びせられた。靴裏もしつかり消毒させられる。

左右に鍵を差し込む装置がある扉の前に、全員が揃った。江辺野さんのお父さんは、娘さんにもう一つの鍵を渡し、それぞれの端末へ別れた。一本ずつ鍵穴へ挿し、声を掛け合ってタイミングを合わせ、鍵を回した。

宇宙船のエアロックみたいな扉が、自動的にスライドして開く。光に弱い資料を守るためか、閉架の中は相当暗いようだ。お父さんが先に中へ入り、壁際にあつた備え付けの懐中電灯を手にとった。ようやくそれで、少し先の足元の様子が見える。

同級生三人で顔を見合わせ、誰から行くか、譲り合う。ちよつとしたやり取りの結果、僕から先に中へ入ることになった。最新の注意を払いながら、閉架の中へ入る。足音の反響の具合から、かなり広大な空間が広がっているようだ。そして、内部は少し肌寒い。

後の二人が来るまで暗闇をじつと眺めていると、少しずつ目が慣れてくる。表の書架も相当な蔵書があるように見えたけど、こことは比べ物にならないようだ。ゲームで訪れる秘密の地下施設みたいな雰囲気も感じ取りながら、懐中電灯とお父さんの先導を頼りに、暗闇の世界へ足を踏み入れた。

初出 令和四年一〇月二九日 noteにて公開

第一七話

薄暗がりをしばらく歩いてみると、徐々に普通の施設へ変わっていく。入り口の物々しい雰囲気はなんだったのか、あるいは本当に「閉架」として使われる部分が特殊なのか、そこを抜けると、図書館の下に広がる地下空間とは思えないくらい、設備の充実した最先端の研究室然とした空間が広がっている。

もしかしたら、地上の図書館どころか、大学の敷地より広いのでは？

頭上を見上げても空が見えないくらいで、それ以外は地上の設備と遜色ない。むしろ、こちらの方がレベル的には上な気もする。

表沙汰にはできないグレーな人体実験でもしているのかと思いきや、そんな雰囲気も特にならない。唯一それっぽいのは、回収されてきた我々と同じタイプの亡骸が、余すところなく部品ごとに分解され、洗浄されてリサイクルされるブースを垣間見たぐらい。

破損した四肢や、蘇生前のボディで使用していた記憶媒体、遺品整理で形見分けされなかった残りのパーツがどうなるか、それは事前に小学校で学んで知っていたから、特に驚くこともなかった。

ただ、丸々一人分の人間サイズの素材が目の前で解体され、取り分けられた部品が再び製造のラインへ送られて行くのをガラス越しに見るのは、それなりに衝撃的だった。ああやって回収される部品が、僕にも駿にも入っているのかと思うと落ち着かない。食肉加工の見学に行くと、似たような感覚を得られるのかも。

現代社会の表には出しにくい部分、隠しておきたい部分がここに集まっていて、ここでできない研究、開発があるんだろうなというのも、誰に説明されなくても分かる。一々立ち止まって質問したかったけど、先導しているお父さんは前しか見ていない。こんなところで彼と離れ離れになってしまうと、元いた世界に帰れない気もして、ただひたすら後ろをついて行く。

彼は手元の資料、印刷された地図に指を走らせ、現在地と地図の関係を照合しながら、壁の案内を確かめる。

「ああ、ここだここだ」

彼は、目の前の扉を開けた。ガラス張りの部屋に、自動的に明かりが灯る。入

つてきたところと似たような書架に見えるが、秘匿具合でも違うのだろうか。彼は持ってきた懐中電灯を、壁際のスタンドに置いた。充電器も兼ねているらしい。部屋の中は、純粹に資料、書籍を読むためのスペースになっている。簡素な台と、長く座ると尻が痛くなりそうな椅子しか見当たらない。彼は棚の書架から、分厚く大きな資料を数冊取り出し、台の上に並べた。一番上のものを拾い上げ、ページを捲つていく。

「まあ、まずはコレからかな」

お父さんは首から下げたメガネをかけ、中身を確かめながら僕らに見やすいよう、ページを広げた。何かの写真、図とひたすら文字が書かれている。パツと見には何のことだかよく分からない。

僕と並んでそれをジツと見ていた江辺野さんが、「えつ、嘘」と声を漏らした。彼女は顔をあげ、父親の方を見る。お父さんは小さく頷いた。

「何がどうだつて？」

事情がさつぱり掴めない駿が、江辺野さんに訊ねた。彼女は一度唾を飲み込んでから、口を開く。

「私たちの遺伝子は、オリジナルのホモ・サピエンスとは明確な違いがある。別種の生物だつて」

彼女は資料の図と、文章を指差しながら教えてくれるが、それらが何を指すかはイマイチ要領を得ない。

「でも、そんなのつてすぐ分かるんじゃないですか？」

かつてより人口は減つたとはいえ、何千万人単位の人間がいる。全員の検査は無理でも、一定数のサンプルを調べればすぐに分かりそうだけど。僕の疑問に、お父さんは「全員が、別種の生き物だつたら？」と答えた。

「物差しとすべき資料が欠落、あるいは秘匿されていて、比較対象が存在しないとしたら、どれだけ調べたら分かると思う？」

周りにいる全員が、一定の方向で元のホモ・サピエンスとは違う性質、遺伝情報を獲得しているとしたら、分かるはずがない。じゃあ、比較対象となる『彼ら』はどこへ消えた？ たかが二〇〇年ちよつとで、全員が死滅するなんてあり得るだろうか。

「でも、お医者さんは流石に気がついたんじゃないの？」

江辺野さんの追加の質問にも、お父さんは頷いた。

「病気の症例や薬の効き方で、資料と合致しないケースは秘密裏に報告されてい

る。ここには、その記録がすべて集められている」

お父さんは、この部屋というよりは、地下空間全体を示すように、両手でジェスチャーした。

「報告した人は」

駿の質問に、今度は首を横に振った。両手を上げ、分からないといった様子で肩をすくめる。秘密裏に処理するのも、ここへ幽閉して有効活用するのも、それほど難しいことではなさそうに見える。処理の方法も、記憶の消去から物理的な破壊、機械の体へ入れ替えて表の街へ戻すなど、いくらでもありそうだ。

お父さんは積み上げた資料の中から、一番下にある物を引っ張り出した。劣化具合は他の物とあまり変わらないように見えるが、「二七一七・四〇」とラベリングしてある。

「これが一番古い資料だが、『失敗した』という記述から始まっている」

彼は表紙を捲り、最初の行を指差した。確かに、いきなり「失敗した」のフレーズで始まっている。これが一番古い資料ということは、例の一千年問題も事実なのだろうか。まだ疑問を抱きながら、冒頭の一文に目を走らせる。

「えー、三〇〇年以上の長期保存により、ヒトゲノムを一部欠損させてしまった。このままでも再生、解凍は可能だが、マスターたちの保存に失敗してしまった罪は大きい。モウイチド、アイタカツタ」

その後も、遺伝子の解凍を担った担当者との後悔と苦悩とが延々と綴られている。欠損を彼らなりに修復して、今を生きる人間が造られた、と。

「君らのご先祖さんは、それを彼らなりの原罪として受け止め続けてきたようだな」

お父さんは、僕らの方を見ながら、感慨深げに言った。本来なら絶対的な主人である創造主、マスターたちの大切な遺伝情報をきちんと保管できなかった。その後悔が、似姿である彼や江辺野さんらに対する申し訳なさとして、現れている？

世代を重ねて薄れてきているのか、少なくとも僕や駿にはそう言った罪の意識はない気がする。機械の身体だからと、人間より下に身を置こうとする輩も確かにいる。

当事者には、よっぽど罪の意識があつたのか、後悔が強かつたのか。反省の弁とも、謝罪の弁とも取れそうな、懺悔の告白が長々と綴られている。あまりにも長すぎるためか、途中で強引に切り捨てられていた。

「例の一千年問題と、創造主と被造物の関係は分かったよ。とりあえずな」

まだ全部は納得してないらしい駿が、「とりあえず」を強調して言った。

「二千年もズラした理由と、ここまでの話をひたすら隠す理由が、まだ分からない」

駿の質問に、別の資料を見せて答えるつもりだったのか、お父さんは重ねた資料の背表紙を確かめ、パラパラと何冊か開いてみるが、途中でやめた。江辺野さんが見えていた資料も回収し、全て閉じて元の場所に返す。

彼は懐中電灯を取ると、「ちよつと歩くぞ」と告げ、一足先に部屋を出た。今度は駿を先頭に、資料室を後にする。扉が閉まり、誰もいなくなると部屋の中の照明が、自動的にゆっくりと落ちた。

先頭のお父さんは、再び手元の地図を丁寧に確かめながら、代わり映えのしない廊下を進む。左右のブースやドア横のラベルを見れば少しずつ移動していることは分かるのだが、風景としての変化が異常に少ない。上下移動もいつの間にか坂を登ったり降ったりして、今、自分達が地下南海にいるのかもよく分からない。東西南北も、今どちらを向いて歩いているのか、全くもって判然としない。

一風変わって、今度はそれぞれの小部屋にジオラマっぽいものが展示してある区域にやって来た。歴史的な建造物や、世界的な絶景を模している部屋もある。我々はその中でも、あまり楽しくないエリア、歴史的な出来事の区分に案内された。戦争被害を模したジオラマだ。

お父さんは無造作に、そのうちのひとつに入った。駿、江辺野さんに続いて、中へ入る。この光景は教科書や広島の資料館で見たことがあった。あまりの光景に目を転じると、向こうには長崎、少し右に視線を振ると、焼け野原になった大阪や東京の様子もリアルに再現されている。

記憶と異なるのは、ジオラマに付された年号。三〇一四年の出来事となっている。

「二千年、時間をズラしたのも、詳細な情報を秘匿するのも、理由はコレだ」

目の前の光景に、さっきまで元気に見えた駿は、塩を振った青菜のような顔を浮かべた。流石にこれは、しばらく言葉を失ってしまう。

「我々と君らの先祖の間で起きた、一〇〇年に及ぶ全面戦争。カルワリオ協定は、その時に結ばれた停戦協定だよ」

第一八話

我々が二十世紀前半の出来事と教わっていた光景は、我々の先祖が二〇〇年以上前に作り上げたものだったとは。元の出来事より、後から重ねられた出来事の方が、幾らか凄惨だった可能性も否めない。

自分達がしでかした事を、物言わぬ先人たちの仕事だと押し付けてまで、チャルカ教やザ・シテイは真相を覆い隠した。

「理性がある自分達なら、野蛮なこととはしないはず。その目論見が外れるどころか、野蛮人と見做した過去の愚か者より、酷い暴力性を見せたんだ。二度と繰り返さぬよう、そして思い出すこともないように、その歴史を丸ごと無かったことにする」

一〇〇年に及ぶ戦後処理、世界中の復興作業を進めながら、世代を積み重ねるごとに記憶の洗浄も進め、争い記憶と長い空白の時間とを埋めていった、と部屋の片隅にあったプレートには書かれていた。

「二〇〇〇年代、この辺りで万博があった頃の生活水準、科学水準を再現して、一千年分曆をズラせばちょうど良い。チャルカ教やザ・シテイの代表団で作られた方舟委員会は、いつの間にかそう決めた」

「そして、それがバレないように、世界中に散ったザ・シテイの面々が総力を上げて口裏合わせに力を尽くした」

お父さんの説明を受けた駿の呟きに、お父さんはしつかり頷いた。NASAやJAXA、天文学の専門家たちも完全に騙す、ザ・シテイ。とんでもない科学力と結束力だ。実行力も半端じゃない。

「で、どんな取り決めを？」

駿の問いに、彼はジオラマの合間を縫って進み、会議室で何かを掲げているシーンのブースへ移動する。僕らもその後を追いかけた。第二次世界大戦時の停戦協定の何かだと思わされてきたが、これが本当は「カルワリオ協定」の調印式だったらしい。

横に設置してあった、解説のパネルに目を通す。

「二度と同じ過ちを繰り返さぬよう、全ての人間に制御装置を取り付け、双方の

諍いが限度を超えた場合、協定違反としてリセットを実行する——。制御装置？」

僕の疑問に、お父さんは「ああ、それか」と拾ってくれた。

「僕らにも、君らにも、強制的に自死する装置、プログラムが組み込まれている。字義通りの、セントラルドグマとして」

生物学的な用語では確か、遺伝情報の伝達経路、基本的には一方通行に流れ、滅多なことでは逆転しないルール、法則みたいなもの、だったか。まさに、生きていく上での中心教義。チャルカ教やザ・シテイの取り決めで、さらにソレが足されている。外れる事を許されない、強い戒律として。

「彼らはソレを操り人形、ピューパと呼んでいる」

お父さんの言葉に、今度はさつきから何かを考え込んでいた江辺野さんが口を開く。

「フィロウイルスっぽい症状は、そういうこと？ 非暴力の糸車も、随分良い趣味してる」

娘の物言いに、父親は苦虫を噛み潰したような表情を浮かべる。僕と同じくピント来ていないらしい駿が、「どういうこと？」と彼女に尋ねた。

「エボラとか、マールブルグを引き起こすウイルスは、同じフィロウイルス科で、フィロの名前の通り、細長い糸みみたいな形してるの。フィロって、ラテン語で糸って意味」

「だから、つまり？」

「操り人形の糸が切れたら、どうなるか」

江辺野さんの答えを遮って、僕が駿に答えた。非暴力不服従の象徴、偉大なガンジーも使っていたと思われる糸車の名前を、彼らは名乗った。

「暴力ではなく、ルール違反の罰則、か」

自分の呟きに、我ながら嫌悪した。ビルトインの機能をオンにしただけで、暴力は振るっていない。そんな詭弁でニコニコ微笑みながら、平和な偽りの歴史をみんなで紡いでいる、と。

「とんでもない詭弁だな」

駿は怒りを含んだ様子で言った。静かに沸々と感情を昂らせているらしい。その心情を察したかどうかは定かではないが、お父さんは「ちよつと、休憩しよう」とジオラマの間を抜け、ガラス張りの展示スペースを後にする。僕らもその後が続いて、部屋を出た。

ここまでやって来る途中にも何回か横切った、自動販売機の設置してあるブー

スに向かうらしい。広大な空間故に一箇所だけではないらしく、既にいくつか見つけている。食堂やカフェテリアっぽい施設や、仮眠施設っぽいものも、一定区間ごとに設置してあった。

比較的近く、ゆつたりと広めの休憩スペースにやって来た。お父さんは僕らをテーブルにつかせ、人数分の水を持って来てくれた。

「君の言う通り、我々は詭弁と嘘で平和を成り立たせてきた」

お父さんは駿の方を見ながら、優しい声で言った。

「そのおかげで、長らくリセットは回避できていた。少なくとも、今までは」

「何を思ったか、チャルカ教はそれをひつくり返しに来て、今に至ると」

「だからお前、あの時あんなこと言ったんだな」

駿が江辺野さんのことを、「お前」と読んだ瞬間、お父さんの肩が一瞬ピクッと動いた。二人はそれを気にすることなく、お互いのやり取りを繰り返している。

「でも、口外禁止だったんですね？」

僕がお父さんに質問すると、彼は頷いた。

「詳しいことは話してないさ。我々と君らの間で喧嘩が起きそうになったら、止めなさいとだけね」

父から娘への教え方がよほど真に迫っていたのか、ここでは話にくいことを彼女に伝えていたのか。どちらが真実かは分からないが、教室での彼女がなぜあんな振る舞い、言動をしたのか、その理由はよく分かった。

「方法はさっぱり分からないけど、真境名はそのピューパを起動する装置を持っていて、個別に数人殺害した」

チャルカ教か、ザ・シテイが放った実行部隊の可能性もまだあるが、それにしでは周りの動きと噛み合わない気がする。彼が直接、大量殺戮を目的としているのなら、ピューパの使用頻度や、情報漏洩のきつかけもイマイチ腑に落ちない。

ここまでお膳立てすれば、あとは勝手にリセットが起ると踏んでいるのだろうか。でも、それなら彼も、セントラルドグマによって息絶える。周囲を巻き込んだ手の込んだ自殺劇を、わざわざ僕みたいな奴を巻き込んでまで実行する意図も見えてこない。

「あのマークは、とんでもない世界への入り口かと思ったのに」

彼女は、通路の要所所に掲げられている『塔』のマークを見上げた。わざわざバスを降りて、彼女と共に命輝保育園の周りを嗅ぎ回っていた頃の緊張感は無くなっている。

「とんでもない世界なのは間違いないだろ」

駿は、周囲に視線を配りながら言った。彼の言い分も最もだ。

「でも、パンドラの匣ではなかったし、開く役も僕じゃなかった」

リセットの脅威が現実化すること、もしくは一千年ズレていたという事実、二つの人間に争いの火種をもたらすことがパンドラの匣、もしくは開けたことによる厄災だとするなら、直接的なきっかけは、チャルカ教のグレゴール十八世だ。彼と出会い、握手はしたが、単なる外部端末の一つに、日本の片隅、それも大阪の一角で出会った一人の人間に、大きな影響をもたらせるとは思えない。

「で、何かヒントは掴めたかな？ 君らに見せて欲しいと言われたものは、全て見せたはずだけど」

お父さんは、場を盛り上げるためか、気持ち切り替えるためか、明るい口調で言った。未曾有の危機がチラつきつつあると言うのに、なんとも能天気だ。江辺野さんは口には出さなかったが、「こんな父親でゴメンね」と表情で伝えて来た。僕は首を横に振り、「とんでもない」と返した。

もしかすると、色んな情報へ触れる前より、「分からない」が膨れ上がったかもしれない。特に、真境名の意図や目的に関することについては、どんどん分からなくなってきた。

「ちなみに今、何時だっけ」

江辺野さんがお父さんの時間を尋ねると、彼は腕時計を確かめた。既に夕方六時を過ぎていた。家に連絡しないと、また文句を言われてしまう。米利刑事との連絡も、真境名を見失ったという一報から途絶えている。そろそろ、何か来ているかもしれない。

早々に例のロッカー、そこへ仕舞い込んだケータイの元へ戻らねば。

小さな紙コップに残っていた水を飲み干し、四人分のカップをゴミ箱に放り込む。戻る準備を整えたのに、江辺野さんのお父さんは、テーブルの上で地図を確かめていた。

「非常に申し上げにくいんだけど、今から戻っても、上の図書館が施錠されちゃうんだよね。セキュリティ以外の電源も必要最小限に切り替えられちゃうから、ゲートが開かないんだ」

彼は地図を見ながら、「どう頑張っても、間に合わないよなあ」と呟いた。

別々の経路へ指を走らせるが、その度に首を傾げる。いつの間にそんなに歩いたのだろう。

「そうだよね。家に連絡はしたいよね」

彼は僕らの方を一瞬見て、再び地図へ戻った。あんまりない緊急事態らしい。彼は何度か地図をなぞり、行く先を決めたらしい。

「よし、一旦宿泊施設へ向かおう。そこまで行けば、外部への連絡もできる」

彼は地図を握り締め、休憩スペースから足を踏み出した。

「つまりそれって」

「今夜は、ここで泊まってもらおう。いやあ、本当に申し訳ない」

彼の背中に投げかけた僕の質問に、彼は首だけ振り返って、たははと力無く笑いながら答えた。偉いことになったなと、駿と江辺野さんの方を見ると、彼らは非常に嬉しそうな表情を浮かべ、嬉々として先導者の後をついていく。

僕は最後尾で「マジかあ」と呟くと、「早く来ないと迷子になるぞ」と、曲がり角でこちらに向かって叫ぶ駿のところまで、走ることにした。

初出 令和四年一〇月三二日 noteにて公開

第一九話

「元氣そうじゃないか。無事なら何よりだ」

電話口の米利刑事も、声の様子からすると調子はそれなりのようだった。結局、入浴や夕食でバタバタしてしまい、連絡がついたのは午後八時を過ぎていた。流石に帰宅していたらしく、警察の内部で電話を取り次いでもらって今に至る。

「ご両親への連絡は、友達の分も合わせて、署の方からしておいてもらった。なんとか誤魔化してあるから、気にするな」

僕は、向こうのテーブルでトランプ遊びに興じている駿の方に視線をやった。

江辺野さんと二人で楽しそうにはしゃいでいる。僕は視線を逸らして、ひとまず

「ありがとうございます」と伝えた。

「真境名のこととはすまなかつた。そっちへ行つたらしいな。何事もなくて良かったよ」

「その後の足取りは？」

「もの見事に撒かれて、今も追跡中だ。奴が盗んだ衣類も、先ほどクリーニングされて手元に戻ったらしいから、クリーニング店を当たればもしやとは思うが」

「ジャミングを使えるとなると、無理ですよね」

さつきより気落ちした声で、「まあな」と相槌が返ってきた。チャルカ教関係者の衣類が盗難に遭い、その日のうちに証拠も一緒にクリーニングされている。でも、ジャミングが使えるのなら、最初からそんなことをする必要もない。僕はその疑問をそのまま、米利刑事にぶつけてみた。

「単純な話で、有効時間、持続時間が短いんだよ。使いやすい場所も極めて限定的だ。どこでも使えるシロモノじゃない」

「逆に言えば、どこで使えば有効なのか。使いどころがよく分かっている？」

「そういうことだな。この街の特性を、隅々まで熟知している可能性もある」

道に詳しいとかいうレベルとは格が違う、土地鑑があるのだろう。例のマークも含め、街中に散らばったものを上手く活用し過ぎる気もある。

「真境名が、ザ・シティの関係者という線はないですか？ チャルカ教か、ザ・シティに恨みを持つ者の犯行、とか」

「現時点で、否定もできんが、肯定もできん。行動の背景も意図も、奴の素性すら、まだ何も掴めていない」

警察の捜査に圧力をかけて中断させるほどの力を持つ秘密の組織、ザ・シテイ。秘匿されているはずの技術、装置の活用も含め、『街』の使い方も上手すぎる気はする。全くもって無関係な人物に、そこまでのことができるとはとても思えない。

ただ、こつち方面に表立った捜査ができない彼からすると、裏取りのしようもない情報には、白とも黒とも判断つかない、もしくはつけないのが最良の選択肢だというのも、よく分かる。

「ちなみにその後、街の様子はどうですか？」

「割と落ち着いてるよ。過激なのは極一部。大半は、難しいことを考えることもなく、日々の生活を営んでる。そうそう、交番に連れて行かれた君らの同級生だが、今日のところは嚴重注意のみで、お咎めなし。今頃、無事にお家でお勉強中じゃないか？」

稲荷さんと、テツちゃんのことか。何にもないなら、何よりだ。

米利刑事は少し間を置き、「ただな」と声の調子を落として言った。

「二人とも、極めて微量の妙な薬物が検出されている。カフェインのような興奮作用と、葉っぱを吸った時のような高揚感をもたらす、モロに合法のドラッグらしい。噂話を聞いたことは？」

「ないですよ、もちろん」

あの二人、特に小さな頃から知っているテツちゃんに、薬物依存の話なんて聞いたことがない。学校教育での啓蒙にも真面目に取り組んでいる奴だ。誘われたって、そんなものに走るとはとても思えない。

不良連中との接触も、なかつたように思う。

「尻尾を掴めない妙な薬物が蔓延したら、小競り合いや喧嘩も、止めようがなくなるかもしれない」

「いつ何が起きてもおかしくないってことですか」

「そういうことだな」

それを撒いたのが誰かは分からない。軽い興奮と高揚感が何を引き起こすかも、全く予想がつかない。決め手に欠ける分、かえって厄介な状況になりつつあるのかも。チャルカ教の狙いも、ザ・シテイの思惑も、真境名の目的も、ますます見えなくなっている。

僕の困惑をよそに、米利刑事は「じゃあ、またな」と爽やかに電話を切った。会話を続ける気力もなくなりつつあったが、急に会話を切られてしまうと、心の支えまで失ってしまった気になる。なんとか有線の受話器を戻し、通話ブースから離れた。

二人ではだんだん遊びの幅がなくなってきたのか、駿も江辺野さんも、さつきより元気がなさそうに見える。

「なんで二人が疲れてんのさ」

僕は駿の隣に空いていた椅子に腰を下ろした。彼は僕が加わったというのに、散らかったトランプを箱にしまい始める。

「田舎の古い温泉宿みたいなアナログな娯楽しかないから、遊ぶのも一苦労だよ」

「オセロも将棋も、全然勝負にならなかつたもんね」

駿の向かいに座っていた江辺野さんは、作務衣みたいな館内着の乱れを整えた。浴衣とはまた違う、ドキドキ感がある。一見隙のない感じに、かえって想像力をくすぐられる。

「修学旅行じゃ見れないもんな。しっかり見とけ」

駿は僕の顔を見ながら言うのと、立ち上がってどこかへ向かう。慌てて取り繕いながら、僕がどこに行くのか尋ねたら、トランプを元の場所へ戻してからトイレに立ち寄るのだとか。遠ざかる駿の背中から視線を戻すと、江辺野さんにジッと観察されているのが気がついた。

「やっぱりちよつと、ヒョロいよね。もうちよつと鍛えようとか、思わないの？」

テーブル越しに、彼女の手が伸びて来た。僕の肩から上腕にかけて、服の上から半分揉まれるような手つきで触られる。僕の抗議も意に介さず、今度はその手で、自分の腕周りを確かめた。

「私の方が太いかなあ。ほら」

彼女は、僕にも触れと言わんばかりに右腕を差し出した。

今はまだ大浴場にいるとは言え、彼女のお父さんも近くにいる。彼女はジリジリと無言の圧を高めるが、迂闊なこととはできない。しばらくすると、駿が戻ってくるのが見えた。彼女は、「つまんないの」と少し膨れっ面になりながら、腕を引つ込める。少しだけ不服そうな表情は、すぐに改められたが、僕の方は見てくれない。身体ごと、明後日の方へ向けられた。

「あっちの方に、家庭用レトロゲーム機のコーナーもあつたぞ」

駿はこちらの空気を気にすることなく、僕に「行こうぜ」と誘いをかけた。

「お前も行こうよ」

「お前って言い方は、どうかなあ。江辺野桂花って名前があるんだし」

駿はゆつくり後ろを振り返った。お父さん、江辺野空湖さんが2回目のお風呂を終え、僕らの元へ戻って来たらしい。

「運動部で勢いのある男子が、女子のことをそう呼びたくなるのも分かるし、私の同級生にもいたけどさ。親としては気分良くないよ」

「あ、ごめんなさい。すみませんでした」

駿は、空湖さんと桂花さんに深々と頭を下げ、しっかりと謝った。空湖さんは、「いいよ、いいよ」と言いながら、近くの給水機で小さなカップに水を取り、桂花さんの隣の席へ座った。ゆつくりと、入浴後の水分補給をしている。

「別のそこまで怒ってるわけじゃないから。礼儀の問題というよりは、ただ単に、私の気分の問題だし」

空湖さんの言葉に、駿はゆつくり頭を上げた。空湖さんは笑顔を浮かべ、「気にしないで」と駿を労いながら、カップに残った水を飲み干した。

「さて、寝るにはまだちよつと早いけど、どうする？」

「どうするって言われても、他の選択肢は」

「特にない。あ、トレーニングルームはあるよ」

彼は駿に、トレーニングルームの方を指差した。大浴場とトレーニングルームは、夜は二三時まで、朝は六時には開いているらしい。汗をかいても風呂に入れるのは、ちよつと嬉しい。

駿は、「ウエイトは今別に」と言いながらも、運動不足を気にしているようだった。本当は、キャッチボールやバッティングとかをやりたいのだろう。

「球技とか、バットは残念ながら」

空湖さんは、両手で大きなバツテンを作った。凶器になり得るものは極力置かないようにしているのだろう。さっきのトランプも、紙でできていた。筆記具、ペンにも全部、頑丈な紐がついている。

「SNSもインターネットもテレビもないけど、寝るか」

駿の一言に、僕は渋々頷いた。

修学旅行のデモンストラーションと思って、早めに寝よう。同室になった彼のいびきに耐えられるか、それが最新かつ最大の懸念となった。

塔が見える街

初出 令和四年一月一日 noteにて公開

第二〇話

微かな肌寒さに目を開けると、寝る前に見たものとは違う天井が広がっていた。寝入る前の記憶にある天井も非常に殺風景だったが、今日の前に広がっているのはそれに輪をかけて殺風景な、手術室っぽい様相を呈している。

そう言えば、自分が寝ているベッドも若干硬い。デスクゲームの控え室、セーフルームみたいな寝室だったけど、寝具はもう少しまともな物だった。掛け布団も薄いを通り越し、ドラマや映画でたまに見る、手術の時に上から掛けられるあの布に似ている。おまけに、素肌に直接、上下の布の感触を感じていた。

夢遊病の気が全くないとは言わないし、暑さで寝ながら寝間着がはだける事もないとは言わないが、流石に部屋も寝具も何もかもが変わっているのは異常すぎる。どうやら、下着も着けていないようだ。

ゆっくり上体を起こし、周囲の様子を探る。手を伸ばせば届きそうなところに、自分と同様の状態で寝かされていたのは駿ではなく、桂花さん。駿がどこかに行つたと言うよりは、僕らが寝ている間に連れてこられたのだろう。彼女もどうやら、布の下は素っ裸のようだ。薄い布が作る線に、つい目を背ける。

彼女はどうかやら、まだ深い眠りにについているらしい。静かに寝息を立てている。僕は布をしっかりと腰に巻き付け、股間の間で揺れるものをできるだけ意識しないよう、手術台っぽいベッドから降りた。ベッドの周りにはある機材を避けると、甲高い金属音が部屋中に響き渡る。

周囲はそれほど広いとは思えない、簡素な手術室といった印象だ。素足にリノリウムの床というのが、なんとも気持ち悪い。中途半端な冷たさも、身体に悪そうだ。

一体ここはどこで、駿やお父さん、空湖さんはどこへ行ったのか。そして今はいつ、何時なのか。脱出は容易でなくても、せめて厚手の毛布、ブランケットぐらいは探し当てたい。

調度品や作り付けの棚、備品が少なそうなのこの部屋には、余計なもの一つもなさそうだ。隣の部屋へ続くドアノブを見つけた。静かにドアノブを回し、そこからへ移動する。正体不明の端末が所狭しと並ぶその部屋は、今までいた部屋の様

子を詳細にモニタリングする施設らしい。さつきまでベッドに寝ていた僕のデータや、桂花さんのものっぽいデータも、壁際にいくつも並んだモニターに映し出されている。

その横は、大きなガラス、透明なアクリル材でできていた。奥の様子がよく分かる。SF映画で時々見かける、巨大な培養槽みたいなものが目についた。その中で、女の子だろうか。小さな子どもが胎児のような格好をして浮かんでいる。

さつきのモニターにも、あの子のデータが出ていたりするのだろうか。奥の部屋を注視しながら、周囲の様子を探っていると、向こうの部屋で動いている人影を見つけた。透明な仕切りに近付いて、その人物をよく観察すると、彼は時折培養槽周りを気かけながら、周囲の機械を弄っている。

白衣を着たその人物が、一瞬、こちらを見た。両方とも義眼の、心情が今ひとつ掴めないアイツ。そいつは手元のスイッチを押し、横にあるマイクに向かって喋り掛けた。

「おはようございます。よく眠れましたか？」

クリアな音で、声が聞こえてきた。どこかにスピーカーでも仕掛けられているらしい。

「主演の出演にはまだ早い。もう少し寝てもらってもいいですよ」

彼はそこで一旦マイクのスイッチを切り、端末の前にあるキャスター付きの椅子に腰掛けた。培養槽の中に浮かぶ子どもを見て、椅子に座ったままマイクの前に移動する。

「君たちの遺伝子は素晴らしいですね。まさかの安定率一〇〇%だ」

スピーカーから聞こえてくる声は、心底喜んでいようだった。これまで聞いた彼の言葉としては、最も感情が籠っているように思える。

こちらの部屋にあるモニターをよく見ても、彼の言いたいことはイマイチ分からない。一〇〇%という割には、別の何かは進行中っぽい表示を出している。こちらから向こうの部屋へ通じるドアはなさそうに思える。さつきまでいた部屋の、別の出入り口を探すしかなさそうだ。

この部屋自体が奥の部屋、隣接する部屋のモニタールームというのなら、こちらから向こうへ話しかける装置もありそうなものだ。どの端末、机がどういう用途なのか皆目見当が付かないまま、それっぽい機材を探して一つ一つ確かめていく。向こうでヤツが操作しているものと良く似た、マイク付きの筐体を発見した。脇のスイッチを押せば、向こうとのやりとりが出来そうだ。

「出来損ないの人モドキも、君のような機械人形も、無駄でも繁殖させてみるもんだなあ。想定外の奇跡が起こる」

こちらが何かを言う前に、向こうの言葉が続く。相変わらず、何の話をしているのかが分からない。連続の不意打ちにめんを食らっていると、見た日向こうから一方的な通知が届く。

「さて、予備は十分だが、もう一発よろしく願おうか」

彼は、横に置いてあつた蓋付の細い管二本を、丁寧な手で取り扱い、こちらに見せつけるように持ち上げた。

「一体、なんの話だ？」

「イマドキでも、高二なら流石に分かるだろう」

彼は細い管を慎重に元の場所へ戻し、椅子から立ち上がって培養槽を差した。

「あんな無粋なやり方は一回でいい。君も、女を知らぬまま親になるのは嫌だろう？」

彼は再び目の前の端末に向き合い、キャスターが転がって自然と離れていった椅子を引き戻した。

「それとも、据え膳も食わん腑抜け野郎か？ 新人類のアダムとイヴにしては、情けない話だな」

向こうは、これ以上の会話は無駄だと言わんばかりに、マイクから離れて目の前の進行状況に集中している。何の作業かは、ここまでの会話、材料だけではまだまだ分からない。アクリル板の向こうへ行って直接見ればすぐだろうに、さっきの手術室へ戻るしかなさそうだ。

ゆつくりドアを開け、元の部屋に戻る。先ほどと同様に、手術台っぽいベッドの上に桂花さんが、裸に布一枚の状態で寝ていた。小さな寝言や寝返りに、ついで目を奪われてしまうが、落ち着いて他の脱出経路を探さねば。

入ってくる場所もないのに、急にこんなところには辿り着かない。壁を入念に探れば、脱出経路が見つかるはず。手近な壁から手を当てて、それっぽい場所がないか丁寧に確かめる。

「無駄だよ」

部屋の角についた監視カメラっぽい機材に光が灯った。カメラではなく、小型のモニターらしい。少し下がって、頭上のそれを見上げる。

「やらなきゃ出られない、夢のような部屋さ。お膳立ては済んでいるんだ。気にせず、ヤレよ」

モニターの向こうで、アイツがニヤニヤ笑っている。別のカメラで、こちらの様子も向こうに見えているのだろう。僕と彼女が二人つきりで裸にされている。彼の言わんとしていることが、だんだん分かってきた。こんなシチュエーションでなければ、願ってもない状況ではある。

「若いんだ。一発や二発、サルのようにできるだろ？」

ヤツの囁きが、僕の理性、良心を揺さぶる。こんなことをしてはいけないと思いつつ、布の下を見たい気持ち、胸の膨らみに触れたい気持ちも湧いてくる。唇を重ねるくらいなら、許されるだろうか。

不用意に近付いてはいけない。見てもいけない。でも、気になつてしようがない。桂花さんの寝顔を見ながら、硬い生唾を飲み込んだ瞬間、向こうの壁に外側から強い衝撃が加わった。何かかと思つてそちらに目をやると、壁にポツカリ空いた穴の向こうに、傷だらけの駿がそこにいた。彼の後ろから、空湖さんも顔を出した。

僕の隣で、桂花さんが「うるつさいな」と目を覚ました。

「え、甲斐くん？　つて言うか、なんで私」

状況が飲み込めていない桂花さんは、身体を起こすと共に布を引き上げて胸元を隠す。この状況を、友達や彼女のお父さんに見られるのはとてつもなく恥ずかしい。彼らは普通に服を着た状態で、僕らの元に駆け寄った。

壁際のモニターはいつの間にか、通信が切られている。空湖さんは、自分の上着を桂花さんに掛けてあげた。

初出 令和四年一月一日 noteにて公開

第二一話

「無事か？」

そこら中に擦り傷や小さな切り傷を負っている駿は、僕に荷物を差し出した。「夜中にトイレに起きたら、服だけ残してもぬけの殻だったから、おやつさんと一緒に必死に探したよ」

彼の話聞きながら、とりあえずパンツとズボンを履いた。もう使わなくなった布は、空湖さんに渡して、桂花さんの着替えに少しでも役立ててもらおう。上半身は適当にシャツを引っ掛け、靴を履き直してさっきの部屋へ戻る。駿も一緒について来た。

アクリル板の向こうで、真境名が苦々しそうな表情を浮かべ、培養槽の中にいた子どもを外に出していた。濡れているその子を大事そうに拭き、新しそうな布に包んでいる。

「ただの一エキストラ、石ころ役のつもりでしたが、目論見が外れましたね」

彼は全ての部屋へ音が入るように切り替えたらしい。こちらからの音声も向こうに通じるのだろうか。そんなことを微塵も気にしていなさそうな駿は、アクリル板に向かって果敢に殴りかかる。

「想定外も織り込めないなんて、演出家失格だろ」

アスリート向けに調整された彼の右手でも、分厚いアクリル板はうんともすんとも言わなかった。さっきの壁をぶち破ったのも、どうやら専用の工具を用いたらしい。怒りに任せ、思いつきで素手で試してみるのは彼らしいが、無茶や無謀のラインがちゃんと引けていない。

「自慢のガーディアンも、お役御免ですか」

「へっ。アスリート、舐めんじゃねえ。そこで待つてろ。今すぐぶん殴ってやる」
駿は一旦、隣の部屋へ戻った。さっき使った工具、巨大なハンマーを持つてくるようだ。彼の馬鹿な発言を真剣に受け止めて、いつまでもジツとしているような真境名

ではない。彼は、子どもを抱き抱え、「それでは、またどこかで」と向こうの部屋の更に奥へ駆けて行った。

ハンマーを引きずって戻ってきた駿は、「あれ、アイツは？」と僕に尋ねた。「いつまでも待ってる訳ないだろ」

「そりゃそうだけど、お前はそこでずっと立ってただけか？」

駿の言葉に、何の反論も浮かんでこない。彼は持つてきたハンマーを振りかぶり、アクリル板に穴を空けた。一つでも穴が空けば、その後の破壊は簡単そうだった。彼は自分で作った入口から奥の部屋に侵入した。ハンマーを引き摺りながら、真境名が使っていた端末に近付いていく。

「ちよっ、危ないって」

僕は駿の腕を引いて、端末から距離を取らせようとする。真境名が証拠隠滅を兼ねて端末に仕掛けた小さな時限爆弾が、駿の目の前で起動する。後ろに引つ張っても、完全な回避は間に合わなかった。僕の目の前で、駿は両膝を床について崩れ落ちる。

「おい、駿。駿！」

僕は彼の身体を抱き抱え、揺さぶってみる。身体の前面が焼け爛れていて、生存反応は確認できない。

「大丈夫か？」

後ろから、爆発音を聞きつけてやってきた空湖さんが、僕に声をかけてきた。

彼は駿の姿を見て、言葉を飲み込んだ。彼の後ろから、衣服を身につけた桂花さんが近付いてくる。彼は娘に惨状を見せないよう、彼女を抱き抱えながら視界を塞ぐ。

「彼は越智くん、だったな。まだ大丈夫だ。蘇生しよう」

空湖さんは、僕に駿の身体を運ぶように指示を出し、娘と共に僕を先導した。ひどい有様だが、バックアップが残っている限り、蘇生は出来る。身体も再利用できるところはそのまま使って、足りない部分、破損箇所を取り替えればいい。

地上では品不足でも、ここではアスリート用のものでも揃っている。

僕の前を歩く桂花さんは、更に前をいく空湖さんのことも気にかけてながら、時折こちらを振り返る。僕が半ば引きずるようにして運んでいる駿のことが気になるようだ。彼女は歩くペースを僅かに落とし、僕の隣まで来た。

「ねえ、なんかした？」

彼女は、前にいるお父さんには聞こえないよう、小声で言った。僕は、首を横に振る。「じゃあ、なんか見た？」

僕はもう一度、首を横に振った。

「寝顔ぐらいいかな」

彼女は「えー、嘘お」と心底嫌そうな表情を浮かべた。

「イビキとか、よだれとか、大丈夫だった？」

よく聞き取れない寝言は発していたが、イビキもよだれも気が付かなかった。

僕は「多分」と答えた。彼女は「あー、良かった」と安心した様子で、さつきよ

り少しだけ姿勢が良くなった。

「何にもしないも、ちよつとショックかな」

「えっ？」

「触りたいとか、思わなかったの？」

真つ直ぐ僕の目を見る彼女の問いに、僕は答えを見つけれなかった。即座に切り返せない僕がよほどおかしかったのか、彼女は「じょーだん、冗談」と舌を出して笑った。

「今は、越智くんのが最優先だもんね。ふぎけちゃつて、ごめんさい」

彼女は顔の前で両手を合わせ、僕に謝った。謝る相手は僕じゃなくて、駿のよ
うな気もするが、彼女なりの僕への気遣いなんだろう。彼女とやり取りしている
間に、蘇生のための設備へ到着した。

手術台のようなベッドへ、駿の身体を乗せる。顔は損傷が激しいため、一旦、
布を被せた。空湖さんは、ベッドの自動診断機能を走らせた。頭から順番に、身
体の損傷具合を確かめている。

その間に、駿の記憶データを手分けして探しにかかると。一定時間ごとに自動で
アップロードされる記憶の中から、一番新しい彼のものを探し当て、息絶える前
の数秒を戻して記憶媒体にダウンロードする。

身体は首から上を同型のものに差し替え、顔の造形を立体的に形成し直す。首
から下は、表面的な資材を取り替えるだけで十分賄えるらしい。ハンマーを振る
った分、両腕は新しいものに付け替えても良さそうだ。

頭を新しいものに取り替え、記憶媒体を差し込んだ。条件が整うと、自動で再
起動がかかった。ベッドの上で、駿がゆっくり上体を起こした。

起き上がったばかりの駿に、空湖さんは彼がさつき死んだことを伝えた。駿も
手慣れた様子で、「ああ、そうっすか」と事情を飲み込む。思いつきり失敗して
蘇生すればいいという信条らしく、僕みたいなビビリと違って、相当場数を踏ん
でいるようだ。

状況把握を終えた駿に、空湖さんは両腕の状態を伝える。

「ちなみにだけど、ここには軍事用のパーツもある。希望するなら付け替えるけど」

市場にはなかなか出回らない、アスリート用のものより数段、筋力や出力の大きい軍専用。カタログを見てみると、人型にとどまらない腕や脚、武器と一体化したものもあるようだ。

「いや、軽微の修理で済むならこのままで」

駿は、「友達の大事な腕なんで」と付け加えた。空湖さんは「そうか。分かった」と答え、僕らと共に一旦部屋を出た。今から中で、焼け爛れた部品の交換、修理が行われる。僕らですら、目の前で見てあまり気持ちのいいものではない。見なくていいなら、見ないに越したことはない。

僕らは、蘇生設備の脇にある待合スペースに移動した。給水機からカップと水を受け取り、水分補給をしながら修理が終わるのを待つ。

「無事で良かった」

空湖さんは、娘の顔を見て、しみじみと言った。

「君も、何事もないようで何よりだ」

空湖さんの、信頼に満ちた真つ直ぐな視線が、ちよつとだけ心に刺さる。僕は視線を逸らしながら、「あの部屋、何なんですか？」と切り出した。彼はさつき見たものを思い出すように上を見る。

「詳しいことは私にも分からないな。すでに、私の権限を遥かに超えている」

彼の申し訳なさそうな表情に、つい「いや、気にしないでください」とフオローを入れてしまった。

「ただの大学の職員だからなあ。教員とか、専任のものならもつと詳しいことまで分かるんだが、申し訳ない」

「いや、そんな」

頭を下げようとする空湖さんに、僕は必死に抵抗していると、修理を終えたばかりの駿が部屋から出て来るなり、「じゃあ、もう一回調べてもらいますか」とにこやかに笑いながら言った。

「おお、そうだな」

空湖さんは駿に同調し、自信たっぷりに頷いた。昨夜のやりとりが嘘のように、一気に仲良くなっている。僕らが寝ている間に、どんな山を乗り越えたのだろうか。

初出 令和四年一月一日 noteにて公開

第二二話

空湖さんの案内で、今度は管理部とやらに向かうらしい。待合スペースを片付け、早々に歩き出している彼の後を追いかけた。

「君らを探す時にも頼ったんだ」

彼は前を向いたまま言った。

「手がかりがあまりにもなさ過ぎて、泣きついたって言ったほうが正確かな」

彼は情けなさそうに言うが、寝て起きたら、隣にいるはずの娘が忽然と姿を消している状況なら、そうなるのも無理はないように思う。ましてや、それに先んじて気が付いたのが、隣の部屋にいた娘の同級生ともなると、いたたまれなさも倍増したことだろう。

「あれ、ハンマーは？」

隣を歩いていた駿は、周囲を見回した。彼が引きずっていたハンマーは、彼が一度死亡した現場に放置してきた。駿は額に手を当て、「あっちゃく」と言った。

「借りた備品、置いてきちゃったよ」

今から取りに戻るか、と一人ブツブツ呟く彼に、空湖さんは「大丈夫じゃないか」と肩を叩く。

「ガーディアンの損壊も、壁も機材も、ここなら特に何も言われない。今頃、自動で回収しに行ってるさ」

そう言えば、ガーディアンとやらの残骸は、ここまでの道中でも特に見当たらなかった。例のハンマーと駿の身体能力で倒してきたようだが、駿の身体に残っていた傷跡も含め、戦いの後はすっかり片付いている。

その内、壁の凹みや破損したアクリル板も、改修や修復が終わるのだろうか。随分と働きの者で、綺麗好きでな施設だな。

昨日、散々歩き回ったエリアとは違い、より一層怪しげで秘密の施設っぽい雰囲気へと変わってきた。区分的には西エリアを管轄する管理部らしい。他にも同様の設備が三つあり、東西南北で分けられているようだ。

空湖さんを先頭に、部屋の中へ足を踏み入れる。カウンターの奥には、鉄道やバスの管理センターみたいなパネル、モニターがズラツと並んでいた。施設内に

点在する監視カメラの映像や、空調や電力の使用状況、その他の内容がよく分からないものも山ほどある。

カウンターには、一昔前、いやそれ以上前の、いかにもロボット然とした受付係が、空湖さんの話に耳を傾けている。我々は、その背後にある待合用の革張りの長椅子に腰掛けた。桂花さんは、部屋の中をジロジロ見ている。口は自然に開いていく。

空湖さんは、番号が書かれた札を手に、僕らの方へやって来た。先進的に見える設備でも、運営は意外とアナログ、地上の役所と大差ないらしい。

「とりあえず、部屋の詳細と、利用者について開示請求を出した。どこまで回答が得られるかは、まだ分からない」

空湖さんの持つている札には、二九七と数字が入っていた。呼び出し番号は、ずらりと並ぶモニターの中でも、一際大きなモニターに表示されるらしい。他に待っている利用者はいないようだが、準備に時間がかかるのか、中々呼び出しがかからない。

しばらく軽い興奮状態だったのが薄れてきて、寝不足の影響がジリジリとのかかってくる。僕だけでなく、周りの全員が軽口を叩く余裕もなく、どんよりとした空気が漂い始めた。うつらうつらと舟を漕ぎ始めたタイミングで、呼び出し番号が更新された。いつの間にか目を閉じていた空湖さんの肩を叩き、彼と共にカウンターへ向かった。

カウンターに呼び出しの札を返すと、奥から別の職員が書類とタブレットを手にやってきた。彼は一枚の書類を空湖さんに手渡ししながら、右手にある会議室つぼいブースへ僕らを案内する。僕は長椅子で寝始めていた二人を起こし、先にそちらへ向かった空湖さんの後を追いかけた。

ちよつぴり不機嫌そうな彼らを宥めながら、職員の方の席に並んで座る。空湖さんは座席配置の関係で職員の隣に座ると、さっきまで自分が読んでいた資料を僕に差し出した。さっきの部屋に関する説明が掲載されていた。培養槽つぼいものがある時点で何となく察しはついたが、動物実験や人体実験の類に用いられる場所のようだ。

「利用者に関する情報なんですけども」

衣服が若干乱れている職員は、まだ寝起きつぼいガラガラ声で、タブレットを操作しながら僕らに画面を見せる。そこには、「不明」の文字が大きく表示されていた。

「あんな部屋でも、誰か分からなくても使えるんですか？」

「利用希望が重なる日中であれば、申請いただくんですが、空いてる時であれば誰にでも使えるようになっていました」

彼の持つて来た設備案内にも、同様の記載がなされていた。この空間に身を置ける時点で、個々の設備に関する特別な申請は必要ないのだろう。

「ちなみに、何をやっていったのか、調べられますか？」

「実験に関する内容は秘匿性が高い情報なので……」

彼は困ったような表情を浮かべる。僕らが必死に見つめても、覆る可能性はなさそうだ。半ば睨むようにして見つめていると、彼は空湖さんと、駿の顔を見て「ああ」と、声を漏らした。

「先ほど、人探しにいらつしやった方々ですか。そうすると、なるほど、なるほど」

彼は「ちよつと、失礼しますね」とタブレットを手元に引き寄せ、何やら画面を触り始めた。

「この時間でも電力消費の激しい部屋はないか、機転を効かせて探してくれたんだよ」

駿が横から教えてくれた。さつきまでちよつぱり眠たそうな顔をしていた職員だったが、今は集中力たつぷりといった様子で端末を操作している。公務員然とした、のつぺりとした顔の持ち主だったが、意外と融通も効くらしい。

「直接関係があるかは分かりませんが」

彼は再度、僕らにタブレットを見せ、タブレット操作用のペンを手に取った。

画面には、「遊川詩恵留（ユカワシエル）の記録にアクセス」というログが表示されている。

「あの部屋の操作記録を追跡すると、辿り着ける有力な情報はこれぐらいですかね」

彼の提示して来た情報が、何一つ分からない。それと、さつきの出来事とがどう繋がるのかも、さつぱり分からない。彼も上から画面を覗き込みながら、ペンで画面を何度か切り替える。

「どうやら、生体脳へのダウンロード、インストールを実施してたようですね。

何か、心当たりは？」

彼の視線が僕に向けられた。駿や空湖さん、桂花さんの視線も僕に集まる。現場で色々見られたのは、ほぼ僕だけ。何を見たんだっけ。必死に思い出そうとし

でも、培養槽とそこに浮かぶ子どもの姿しか浮かんで来ない。

「ちなみに、あの部屋で出来ることって何ですか？ 具体的な例というか、代表的なものというか」

僕の質問に、職員は手元の紙にチラリと視線を落としながら、「そうですね」とチラリと上を見た。

「新種のタンパク質や生体組織の生成、あるいは生体組織と新商品の接合テストとかですかね」

「異種族間の生殖というか、キメラの合成みたいなことは？」

「それも問題なく出来ると思いますよ」

職員の頷きに、僕は心底落胆した。これ以上の話を、空湖さんや桂花さんには聞かせたくない。でも、目の前の情報を統合すると導かれる答えは一つ。

「あの子が、それか」

「あの子って、アレか？」

駿の顔が、今まで見たこともない驚きの表情を浮かべた。そこまで彼が驚くのなら、彼の記憶はあの子を目撃したところまでは残っているらしい。

「ちなみに、その遊川って人の情報は」

「三年前の在籍記録は残っていますが、それ以前も、それ以降も何にも残っていないですね」

職員は、「アレ、おつかしいな」と言いながら、タブレットを回収して自分の手で作業に没頭する。素早くペンを走らせ、時々髪をかき上げながら、タブレットを触りまくるが、何度タップしても欲しい情報には辿り着かないらしい。

「こんなことは滅多にないんですけど、個人情報も経歴も、綺麗さっぱり残っていないですね。退所後、死亡後の記録がないのはよくあるんですけど、それ以前の記録もないというのは珍しいですね」

彼は「こんなはずはないのにな」と、なおもタブレットをいじっている。横から覗くと、物静かそうなメガネ姿の女性の顔写真と名前のデータだけが表示されていた。パッと見の年齢的には、織林刑事よりは上、学校の先生方よりは大分下に見えた。時間をかけても、それ以上詳しいことは分かりそうにない。

職員に礼を告げ、部屋の資料だけもらって管理部を出た。駿は管理部を出る前に、備品を置き忘れて来たこと、色んなものを破壊した旨も告げていた。

「結局、何にも分からなかったな」

空湖さんの呟きが、僕の胸をグッと締め付ける。駿は「どうした？」と僕の微

かな変化も見逃さず、声をかけて来た。こんな時だけ敏感にならなくても良いのに。後ろを振り返ると、桂花さんも僕の顔をジッと見ている。

「ちよつと言いな辛いな」

空気を読まない駿の顔が、ますます答えにくくする。

一人で困惑していると、管理部の方からさっきの職員が小走りに近付いて来た。

「甲斐さんは、君ですよね？」

「はい、僕ですけど」

「警察から、電話が入ってます。今、出られますか？」

彼の急ぎっぷりに、ノーと答えるわけには行かなかった。この状況を引き伸ばすチャンスをくれた彼と、電話をかけて来た人物に感謝しつつ、神妙な面持ちで彼の案内に従い、通話ブースへ足を運んだ。

初出 令和四年一月二日 noteにて公開

第二三話

「早朝から悪いな、大将」

受話器から聞こえてくる米利刑事の声も、どこか寝起きっぽい印象があった。時刻を確かめると、午前四時半を過ぎたところ。夜明けも迎えていない。

「早々で悪いんだが、まずい状況だ」

彼の声にまだ覇気はないが、掠れ気味の声が、状況がいかに悪いかを伝えている。

「欧米、特にフランスとアメリカ、香港で暴動が起きつつある」

アメリカでは特に、二十一世紀前半、BIMと呼ばれる騒動が起きていた地域で、地元住民によるぶつかり合いが、激しくなりつつあるという。

「日本はまだ静かだが、沖縄や各地の軍事基地周囲で緊張感が高まっているという情報もある。銃社会のあつちは、いつ何があるか予想がつかない」

国家同士の軍事衝突はまだしばらくなくないとしても、小規模な死傷事件、地域紛争や内戦が起こる可能性は出て来ている。

「やっぱり、例の薬物ですか？」

「さあな。効能、原料的にはただの食品、ドラッグとも呼べない。マリファナが違法じゃない地域なら、尚更な」

何かのキツカケで、憎悪の連鎖、諍いの規模が膨れ上がるかもしれない。そんなもの、真境名をどうにかしたところで、何かが解決するようには思えない。僕らがやっていることに、何か意味があるんだろうか。

「で、そっちはどうなんだ。一番ヤバそうなのは止められそうか？」

「全然ダメです。分からないことだらけですよ」

米利刑事は、はははと笑った。

「そうか。そんなもんだ」

「笑ってる場合じゃないですよ」

「笑うしかない時もあるんだよ」

電話口の向こうの声が一瞬遠のく。すぐに何か物音がして、真面目な口調の声が聞こえて来た。

「ま、こつちのことは大人に任せろ。君は君にできることをやってくれ」

僕が、「はあ」と気のない返事をする、彼は「じゃあ、検討を祈る」と受話器を置いた。結局、何を伝えたかったのか、よく分からない電話だった。のんびりしている暇はない、状況が差し迫りつつあると圧を掛けに来ただけではないか。やれやれと思いつながら、みんなの元に戻った。彼らと共に、話しやすい場所へ移動する。人通りが極力少ない休憩スペースに入り、状況を整理する。

「まず、さっきの電話だけど、時間の猶予がなくなつて来たっぽい」

米利刑事から聞いた話を、そのまま伝えた。空湖さんと桂花さんの顔が少し曇った。駿の表情は、いつも通りあつげらんとしてている。

「悩んだつてしょうがないからな。杞憂は杞憂よ」

駿は笑顔でそう言うと、今度はテーブルの上に身を乗り出して、僕に少し近付いた。

「で、さっきから話しくそうにしていることは？」

「非常に言いにくいんだけど」

僕は、空湖さん、桂花さんの目を極力見ないように、視線を下げた。

「さっきのあの子、僕と桂花さんの子どもかもしれない」

「は？」

「だから、あの部屋で培養されていた子どもは、遺伝上、僕と桂花さんの子どもになるかもしれない」

側にいた駿が聞き取れていないのかと思ひ、急にボリュームを上げて喋ったのがよくなかった。桂花さんの隣に座っていた空湖さんは両手で顔を覆い、天井を仰いだ。桂花さんは、事情を把握しきれないまま、顔を赤らめている。

「どういうことだよ」

「僕にもさっぱり分からない」

見た目こそ近くても、ほぼ機械の僕と、出来損ないといえよ人間の彼女とでは、生殖を望んだところで種が異なり過ぎる。ただの機械で終わっていれば必要もない生殖機能を獲得した我々と、彼女らの種族と、それぞれの種族同士であれば生殖、繁殖は従来から可能だったけど、垣根を越えた事例は今までなかったはず。

「もちろん、何にもしてない。仮にやったとしても、できるはずないし、できたとしても数時間でアレは不可能だよ」

「つまり、君らの生殖細胞を外科的に取得して、体外受精させた？」

空湖さんの指摘に頷くと、彼はなおも頭を抱え、「なんてこった」と声を押し殺しながら叫ぶ。桂花さんはショックを受けているようだが、父親ほどの反応ではない。

「あくまでも可能性の話で、確定した訳では」

「貴様、何を抜け抜けと」

空湖さんは一気に距離を詰め、僕の胸ぐらを掴んで壁に押し付ける。目には怒りの色を浮かべ、そのまま首を締め上げにかかった。

「ちよつと、お父さん」

「おやつさん、落ち着け。やり過ぎだ」

桂花さん、駿が間に割って入り、僕らを引き離れた。空湖さんは駿が力で抑え、桂花さんは僕が呼吸を整えるのを介抱してくれている。

「大丈夫？」

声を出しにくい状態で、首を縦に振って彼女に伝える。僕の顔を覗き込んで、ゆつくり背中をさすってくれるその優しさが、ちよつと辛くもある。呼吸を整え、空湖さんと少し離れた席に座らされた。

「そこには詳しく触れないとして、どうする？」

駿は空湖さんの隣に座り、仕切り役に回った。

「手がかりはなさそうだけど、その遊川って人から調べるとか」

「データの消され方が妙だよな。管理部の人も困ってたぐらいだし」

駿と桂花さんは、同じタイミングで腕を組み、「うくん」と唸った。

「あとは、真境名の目的と、居場所の特定かな」

「居場所？ そんなもの、特定できるのか？」

駿は僕の顔を見て、不思議そうに首を傾げた。僕は、あの時の彼の行動を思い出す。

「予備はまだあると、二本の管を大事そうに持っていた」

途中で止められたけど、無理やりさせられそうになった、とは言わずに飲み込んだ。空湖さんの睨みつけるような目がまだ怖い。

「もし、もう一体必要なのであれば、培養槽とか、さっきの部屋に近い設備が必要になる。そんな設備を一通り隠しておける場所なんて、そんなくない」

職員からもらった案内資料によれば、この設備でも、例の促成培養が可能な培養槽まであるのは、あの部屋だけじゃなかった。人格、記憶を上塗りするための容れ物が、二つ以上必要なのか。

「居場所を探るのと目的を探るのと、遊川って人の正体、足取りを探るのが今の目標か。どれも大変だな」

駿は仕切り役を全うしたぜと言わんばかりに、鼻を鳴らした。彼の頑張りを含め、僕はゆっくり頷いた。

「ちなみに、仮に私と貴方の子どもだとして、それは生き物としてどういう位置付けになるの？」

桂花さんが静々と質問してきた。僕に問われても、答えは持ち合わせていない。記憶の限りでは、人の形はしていたように思える。

「もし、新しい生き物なら、カルワリオ協定の改訂が申請できるかも」

「え？」

「もう一回条文、付帯事項を調べないといけないけど、協定の背景を考えたらさ」
彼女は明るい声で言った。

カルワリオ協定が、機械の子、人間の子の世界を想定したものであるなら、どちらでもない子が生まれたとしたら、前提を問い直す、あるいは見直しを迫る申請はできるかもしれない。

「リセットを止める思わぬ方法が出てきたな」

駿は僕の肩を軽く叩いた。

「まずは条文の確認と、遊川女史の調査かな」

「米利刑事には、怪しい場所がないか、捜査してもらおう」

駿は「よっしゃ、じゃあ手分けしよう」と言って、立ち上がった。彼の後ろから声をかけた空湖さんは、僕と桂花さんを見ながら、駿に言う。

「君は、米利刑事への伝言と、条文の確認をお願いできるかな。僕らは一旦、検査にかかろう」

彼は僕と桂花さんの手を取った。手を握る力がそこそこ強い。駿が何か言いかけるが、反論を許さないという様子で、彼は抵抗を諦めて自分の仕事に取り掛かった。

「さあ、行こうか」

静かな言い方が非常に怖い。僕と桂花さんは、空湖さんに手を引かれながら、生体検査も可能な医務室へ向かうことになった。

第二四話

「ほお、こいつは驚きだな」

医務室の外で、桂花さんと二人で検査結果を待っていると、空湖さんが、結果が印刷された書類を持って部屋を出てきた。半分は悔しそうな様子で、もう半分は嬉しそうな表情を浮かべている。

「手伝ってくれた医師も技官も驚いてたよ」

彼は僕の肩を何度か叩いた。

「まさか、君だったとはね」

空湖さんは、僕の隣に腰を降ろした。

「確か、妹さんは発声と耳に生来の障害があるんだっけ。ウチも僕の家系か、妻の家系かは分からないけど、遺伝的に子どもができにくいみたいだね。この娘の姉も、それで生身の肉体を捨てるのに抵抗がなかったようだ」

確か、紫音さんだっけ。しばらく目撃できていないけど、お天気お姉さんは今日も活躍しているのだろうか。

「僕らも君らも、人の手で造られたものだから、だんだん先細っていくのかなあとか話していたこともあるんだが、不自然な偏り同士が噛み合って、新たな種が生まれる可能性があったとは。それだけ、時間をかける必要があったんだな……」

空湖さんは、宙を見ながら遠い目をしている。桂花さんは、「でも、別に付き合ってる訳じゃないんだけど」と突っ込んだ。空湖さんは、「え、そうなの？」と驚きを隠せない様子で僕を見る。僕はちよつと申し訳ない気持ちになりながら、ゆっくり頷いた。

「奇跡的な組み合わせだと思ったのに」

「まあ、別に僕でなくても可能性が出てきたと思えば」

空湖さんは、「そういうことにおこう」と小刻みに頷いた。

「新時代の子どもたち、か。君はさしずめ、白いアダム、あるいはラヴァンってところだな。ケイ素の土なら、赤じゃなくて灰白色だろう？」

空湖さんの言葉の意味がよく分からず、僕は首を傾げた。

「ああ、アダムって元々赤い土、赤いって言葉が由来だという説があるんだよ。」

どちらかというところ、僕らが赤で、君らは白と呼ぶのが妥当じゃないかな」

彼は、指で僕と彼を差して「赤、白」と繰り返した。

「赤とか白とか、どこかで聞いたような」

独り言に近い僕の言葉に、桂花さんも「そういえば」と腕組みをしながら考え始めた。

「あの時の、なんとかっておじさんが融和だのなんだの、言ってなかったつけ」

頭の片隅に引つかかっていた記憶が、桂花さんのアシストで鮮明に脳裏へ蘇る。そうだ、チャルカ教のイベントに出かけた時、グレゴール氏の説教を聞いた後にそんな話をされたんだつけ。

あそこで握手をしてから、変なことが起こりまくっている。今更地元のチャルカ教へ赴いてもどうにもならない気がするが、行ってみる価値は十分出て来たようだ。異種間同士で生殖可能なことが融和に値するのだろうか、そもその発言の真意はどうなのか。詰め寄ったって良い。

「僕らと君ら、人と機械の融和と言えば、以前、そんなプロジェクトもあつたよ。うな。プロジェクト名、何だつけ……」

「——おお、まだいた。良かった」

空湖さんの次の言葉を聞く前に、駿が小走りに駆け寄って来た。息が弾んで、話しくそうに見える。一旦落ち着くように、長椅子を薦める。彼は僕の肩に手を置き、「ありがとう」と掠れた声で言うと、そのまま呼吸を整えた。

「例の協定の方は、再協議に関する付帯事項は特に見当たらなかった。当事者である相手側に掛け合って、再交渉の場を持つ他ないかも知れない。遊川つて人のことだけど、米利刑事に掛け合って照会してもらったけど、ヒットしなかった。偽名じゃなければ、外での記録はないかも知れない」

「そうなるよ、小さい時からこちらの住人だったかも知れないね。それでいて、人格や記憶のデータ以外、全て抹消とは、随分変な感じだね」

空湖さんは、先ほどと同様に、胸の前で腕を組み、ゆつくり考え始めた。その隣で駿はゆつくり長椅子にもたれかかり、辛そうな表情を浮かべる。

「とりあえず、飯食おうよ。朝飯」

「確かに、それもそうだ」

空湖さんは腕時計に目をやり、午前六時に近付いているのを確かめた。僕らに地図を手渡し、現在地を示した。

「君らは先にこの食堂へ行つて、朝食を食べなさい」

「お父さんは？」

「私はちよつとした野暮用だ。朝飯前にね」

空湖さんは桂花さんにウインクを送り、「じゃあ、後で」と手を振って僕らの進路とは反対方向へ歩を進めた。どこへ向かったのか少しだけ気になるが、腹の虫には勝てそうにない。駿をゆつくり立たせ、身体を支えながら食堂へ向けて歩き始めた。

高校生男女三人で、朝食ビュッフェを楽しんでいると、どこかでコピーしてきただらしい資料の束を抱えた空湖さんがやって来た。彼は「お待たせ」と言うと、パンとヨーグルト、コーヒーだけを持ち、僕らの隣のテーブルに座った。

彼は僕に資料を渡すと、いただきますと両手を合わせ、パンに齧り付く。

「何ですか、コレ？」

「ここで密かに運営している子ども園、クープの卒業アルバムとネフィリム計画の一部をコピーして来た」

クープ、別称鶏小屋。他の地域で孤児になった子や、ザ・シティの職員、研究者らの子を集め養育する、幼稚園や保育園の機能を有した託児所、子ども園と資料には書いてある。鶏小屋の別称から想像できる通り、いなくなっても分からない子どもたちには、それなりの運命が待っていたようだ。卒業アルバムに、所々バツテンが付けられていた。

そこには確かに、遊川詩恵留の名前があった。僕らと同じ、機械の子らしい。さつき見た子とは、全く似ても似つかないが、遊川という人物は確かにいた可能性は出てきた。

空湖さんが持つて来たもう一つの資料、ネフィリム計画。ネフィリムは僕もよく知っている。人の身体に、僕らの部品、四肢や目、耳、喉といったパーツを接合する技術、あるいはそれを施された人たちのこと。かつての創作物の世界では、サイボーグなどと呼ばれたアレ。

ネフィリム計画の冒頭にも書かれていたが、ネフィリムとは「落ちてきた者達」。天使と人間が交わって生まれた巨人のこと。僕らと彼らと、どちらが天使でどちらが人間かは不明だが、言葉のルーツを考えると、あまり気持ちの良い表現ではないかも知れない。

真境名も、ネフィリムだったな。あの特徴的な義眼の双眸は、決して美しいと言えないものではない。人によつては、醜さや怖さを感じるかも。

ちよつとだけ怖くなつてきて、恐る恐るページを捲つた。ネフィリム計画の始まりと、事の顛末が仔細に記載されている。朝食を食べながらあまり見たくないのは、拒絶反応とその克服に関する記述。クープに連れて来られた子どもたちも、何人かが犠牲になつたらしい。

果てしない人体実験の果てに、ネフィリム計画は一旦の終わりを迎えることになる。完璧とは程遠い結果、中途半端な技術と製品を残して。

何とか最後まで、パラパラつと眺めてみたが、コレも持つて来た意図がイマイチ分からなかつた。ロールパンにバターを塗っている空湖さんに、素直に聞いてみた。

「ああ、それね。後ろの方に、引用論文の注がついているだろう？ ユカワで分かりにくいのが、不自然に名前が消されているような痕跡がある」

空湖さんに言われた通りに、引用、注釈のページを開いてみるが、どれを指しているか分からない。

「それと、本文中の図というか写真に、不自然に消されたような跡がある」

空湖さんは、彼がマーカーで印をつけた部分を指差した。研究員の集合写真っぽいものを中心に、何箇所か書き込みがなされているが、よく観察しても微妙にそうかも知れないと思う程度の違和感しか働かない。

「アレ、この人なんか見覚えあるような」

空湖さんの言葉を整理している僕の横から、桂花さんが身を乗り出した。経過観察の項目に掲載されている写真を、何枚か指差した。

「コッチも同じ人だよね？」

白衣を着た女性と一緒に、写真に写っている男性の顔を示す。確かに、同一人物に思える。コレが、何だというのか。目を凝らして、じっくり見てみる。ずーつと眺めていると、なんとなく見覚えがあるような気もしてきた。

「コレ、もしかして真境名じゃないか？」

「え？」

左から資料を覗き込む駿が、ボソツと呟いた。特徴的な義眼は見当たらないし、ちよつと幼くも見えるが、顔の特徴は全く違うとも言切れない。写真の説明には、「経過観察中の藤倉くん」となっている。

藤倉の名前は、さっきのアルバムにも出ていた。ただし、遊川氏より三つほど年下のようだ。ネフィリム計画の資料の方は、一緒に写っている女性と妙に親しく見えた。

初出 令和四年一月三日 noteにて公開

第二五話

「この藤倉っていうのが、真境名のことだとして、隣の女性は？」

桂花さんは、藤倉の横の人物を指差した。

藤倉の担当技官、世話係を兼ねた人物のようだが、近くにある他の図や写真と異なり、人物名が添えられていない。前後の文章をチェックすれば名前を特定できそうだが、朝食を食べ終えたばかりの頭では、じっくり読み込むだけの余力は残っていない。

「真境名としての身分証があるってことは、他の誰かに成りすましてるってことだよな？　そこまでやつてるのに、何で顔は変えなかつたんだろう」

今度は駿が藤倉の写真を見ながら疑問を口にした。

顔を含めた人体の機械化は撮影当時より進んでいるように思えるが、この写真をパツと見て、元の顔と繋がりを感じる程度の顔は保っている。身分を詐称するなら、人相を変える、顔を作り替えるぐらいはしても良さそうだ。

「他人の空似で変える必要がなかったのか、変えられない理由があつたのか」

「変えられない理由って、一体なんだ？」

桂花さんの意見に、駿が素早く突っ込んだ。本来の真境名という人物と、他人の空似やドツペルゲンガー的なことがあつたとしても、そんな奇跡的なことを想定するよりは、変えられない理由を考えた方が答えには近付そうな気がする。

ただ、今は頭に血が回っていない。深く考えようと思つても、朝食ムードを引きずつたままでは上手くいかない。食後の歯磨きと洗顔ぐらいは、改めてやつておきたい。

食後のコーヒーに手をつけていた空湖さんは、僕らに渡した資料を回収し始めた。

「君らはとりあえず、一回街に戻りなさい」

空湖さんは、僕らのせいで変に癖がついた資料を整え、自らの傍に置いた。

コーヒーをもう一度啜る。

「藤倉の件と、遊川なる人物の件は、私の方でも調べてみよう。あと、甲斐くんにはコレも」

空湖さんは、名刺サイズの小さな紙を僕に差し出した。二次元コードが印刷されている。どうやら、ウェブサイトのURLか、アプリのダウンロードURLらしい。「君に渡した地図で閉架まで戻ったら、地図は外へ出る前に廃棄して、ケータイを取り出してから、そのコードを読み込むといい。ココへの出入り口が、いつでも見られる」

「で、おやつさんは？」

僕が、「へー」と渡された紙の裏表を確かめている間に、駿が空湖さんに尋ねた。

「私はココで残業するよ。夜には帰ると言っておいてくれ」

後半は、桂花さんに向かって言ったようだ。彼女は、気だるそうに「りょーかい」と返事した。

「じゃあ、解散」

空湖さんの号令で、僕らは朝食の後始末と、身支度に移った。ココまで面倒を見てくれた彼との別れに、ちよつとだけ寂しい気持ちになった。

「で、コレからどうするんだ？」

空湖さんに渡された地図を使って、来た時と同じ道を通り、何とか図書館の外に出てきた。学外利用の書類には退館時刻の記入箇所もあったように思うが、事務室はまだ閉まっていて、手の出しようがなかった。僕らが閉館時刻までに外へ出ていないことも、空湖さんが上手くやってくれるだろう。

表の通路は閉まっていたので、裏の非常口を出た。ケータイで時刻を確かめると、午前七時過ぎ。一般の学生さんにはまだ早いのか、周囲に人はそこまで多くない。まばらに登校してくる先輩方と何度かすれ違いながら、通用門から大学の敷地を出る。

目の前のバス停にあったベンチに腰掛け、じっくりケータイを見て山のような通知を一つ一つ確認していく。重要そうなのは、米利刑事からの不在通知ぐらいで、あとはウチからの「連絡しろ」の連絡だった。

「とりあえず、家に帰る？」

僕はまだ早いかなと思いつつ、母さんに向けて電話を架けた。ケータイを耳に当てながら、駿や桂花さんの反応を横目で見る。お父さんと共にいた桂花さんともかく、駿は特に自宅へ連絡を取る気配もない。

「一晩ぐらい外泊したって、何でもないって。それより、あのおっさんだろ？」

母さんと電話が繋がったので、駿の話は程々に聞き流す形になる。母さんのやり取りも、米利刑事が描いたシナリオに乗っかって、適当に返事をするだけなんだけど。もうちょつと外を出歩くと伝え、何か言い返される前に電話を切った。「グレゴールさん、居るとしたらどこだろう？」

「そりゃあ、やつぱりデカイところじゃないの？」

駿と桂花さんは、各々でチャルカ教の教会、関連設備の位置を調べている。大阪市内で一番大きそうなのは、鞆公園よりちよつと北にある物つぼい。ただ、グレゴール氏がそこにいるとは限らない。

「本部に電話して、聞いちやえば？ アポも取るべきだろうし」

桂花さんはウェブでチャルカ教の日本支部、一番大きそうなところの連絡先へ辿り着いた。そのまま代表番号へ電話を架けるも、上手く繋いでもらえなかったらしい。いきなりトップへのアポイントメント、直接の通話というのは無理なのか。米利刑事は確か、教団の関係者と接触していたんじゃないか。細かいツテではあるけど、門前払いを喰らうよりは可能性がありそうだ。

一旦閉じた電話を立ち上げ、履歴を表示する。米利刑事の番号に電話を掛けた。「よう、大将。何の用かな？」

電話が繋がった。ケータイを耳に当てて会話をしているつもりが、別の角度からも米利刑事の声が聞こえてくる。駿と桂花さんに軽く突かれ、車道を見た。パトカーの助手席に載った米利刑事が、窓から身を乗り出してこちらに向かって手を挙げていた。

電話を切つて、そちらに近付く。運転席ではいつものように、織林刑事がハンドルを握っている。彼は、「まあ、乗れつて」と後部座席を示した。バス停の前で、いつまでも停車している訳にもいかない。

駿を真ん中に座らせ、僕は車道側から後部座席に乗り込んだ。三人だと少々狭い。他の二人が少しでも快適に座れるよう、できるだけ身体を小さくする。行き先を告げる前に、パトカーはゆつくり動き出した。

「朝だつていうのに、随分お疲れじゃないか」

米利刑事は、ルームミラーでこちらを見ながら言った。そういう彼も、単なる寝不足以上に草臥れているように思える。

「で、どこに向かつてるんですか？」

「川口の、チャルカの教会。阿波座から木津川を渡った辺りだ」

米利刑事は場所を詳しく教えてくれるが、地下鉄の駅までは分かっても、そこ

から先がピンと来ない。あの辺りの地上を歩く習慣は特にない。

「教団関係者から、君と話がしたいと連絡があつてね」

「関係者から？」

「そう。昨日、ヤツに盗みに入られた関係者がいたつて話をしただろう？」

米利刑事の話聞いて、ぼんやり思い出した。昨日の昼過ぎ、真境名がウチへ来る前に盗難を働いたという、アレの被害者か。

「なぜ、わざわざ警察に？」

「君らと連絡を付けられそうなのが、たまたま俺たちだっただけだろう。市民の皆様は便利屋扱いさ」

米利刑事は笑ったが、便利屋扱いはまんざらでもなさそうだ。

「話つて一体？」

「さあ。相手が誰で、何の話か。行けば分かるつてさ」

米利刑事は最後の方、大きな口を開けて欠伸をしながら言った。随分と大きな欠伸だった。彼は欠伸と共に滲み出た目元の涙を拭くと、窓の外に目をやった。

「なあ、大丈夫なのか。あの刑事」

駿が僕に耳打ちをしてきた。真境名の居場所の搜索や、遊川氏の照会など、色んなことを頼んでいるが、実物を見て不安になってきたらしい。駿の向こう側、桂花さんはいつの間にか下を向いて寝ているようだった。

「大丈夫さ。有能だよ」

時間差で、米利刑事の欠伸が僕にも移った。最後の方は、ふにやふにやした物言いになる。駿は肩をすくめ、「本当に大丈夫か？」と言わんばかりに、不安そうなる表情を浮かべていた。

第二六話

正面に見えるステンドグラスや、脇に見える立派なパイプオルガンが、独特の雰囲気を作り上げている、チャルカ教の礼拝堂へやって来た。中には、僕らの他に、教会へ心身の安全を委ねに来た信者や関係者らしき親子、家族の姿もある。

米利刑事らのパトカーによって連れてこられた時は、チャルカ教を糾弾する集団が集まり、シュプレヒコールを上げていた。警察によって厳重な警備が敷かれ、直接的な暴力行為に発展する芽は摘まれていたが、時折空き缶や空瓶を投げつける人たちもいた。

礼拝堂の中にも、警備のために制服警官が部屋の四隅に立っている。ここに来る方が安全なのか、そうでないのかは簡単に答えが出なかった。

僕らを礼拝堂の中まで案内すると、米利刑事は念の為にと織林刑事を置いて、自分は夢洲署へ戻っていった。僕らが頼んだ捜査に戻るらしい。一人置いて行かれた織林刑事は、礼拝堂の片隅で長椅子に身体を預け、うつらうつらと一人、舟を漕いでいる。

礼拝堂で僕らを待っていたのは、グレゴール十八世だった。一度その姿を目にしている、サイズと異様な姿に正体不明の畏れが全身に満ちてくる。

「ようこそおいでくださいました」

彼は以前と変わりなく、くぐもった合成音声で言った。

外はいつの間にか雨が降り出したらしく、窓には水滴が付き始めた。表のシュプレヒコールが若干小さくなり、グレゴール氏の声でも聞き取りやすくなった。

「早速、再協議に臨まれますか？ 融和の父たるアナタには、その資格がある」
多少はそのつもりで来たのに、いざそれを目の前に突き出されると、躊躇してしまう。資格があると言われても、自覚も自負もない。駿や桂花さんの突き刺すような視線をやり過ぎつつ、質問を考える。

「融和というのは、種の垣根を超えて子を成せるという意味ですか？」

グレゴール氏はゆっくり頷いた。

「そして、その子も新たに子を成せる。そうでなければ、真の融和たり得ない」
グレゴール氏に言われて、ハツとする。子供を作れない単なる雑種なら、これ

までももいたのかもしれない。新たな種が新たな種として繁殖できること。その条件を満たせるのが、僕と桂花さんの組み合わせ。

「アナタの言う、赤と白の兄弟に、僕らが融和をもたらすと確信したから、例の発表をしたんですか？」

グレゴール氏は再びゆっくり頷いた。

「その結果、今回のような対立や騒動、リセットの発動条件が揃うかもしれない状況を招いたとしても？」

グレゴール氏は三度頷いた。

「人はそれほど愚かではありません。困難も対立も、いつか乗り越えていきます。作られたもの、紡がれたものの可能性を信じましょう」

「夢物語が過ぎるぜ、おっさん。乗り越えられなかったから、今まで、隠して来たんだらう？」

横から駿が口を挟むと、周囲にいた他の人たちが彼へ視線を集めた。

「平和のための尊い行為だ」

「何が尊いだ。都合のいい偽善じゃねえか」

信者と駿の言い合いがヒートアップしかけるのを、桂花さんが無理やり止めた。駿は冷静さを取り戻し、不貞腐れながら乱れた衣服を整える。

「アナタ方は、真実を得ました。アナタは資格も有しています。改めて問います。再協議を望みますか？」

グレゴール氏は、途中のやりとりなどなかったかのように、さつきから僕のことをじっと見続けている。淡々と僕を見るその目に萎縮して、返事を躊躇っていると、グレゴール氏は「おや？」と言った。

「アナタより優位の有資格者が居ましたか？」

「僕より優位の資格者？」

「ええ。それも、お一人ではないようだ」

突然の出来事に一人で困惑していると、側にいた教団関係者の男性が、歩み出た。

「再協議の申請が可能なのは、最上位資格の保有者、一名のみとなります」「つまり、僕がいま申請しても、再協議はできない？」

補足説明をしてくれた男性と、目の前にいたグレゴール氏が頷いた。

「再協議、もしくは無期限の凍結がお望みなら、その者をお連れ下さい。門戸はいつでも開いておきます」

グレゴール氏の言う「その者」が誰かも分からないまま、彼は話は終わりだとはばかりに一歩下がった。さつき捕捉してくれた男性は、少し申し訳なさそうな表情を浮かべながらも、「お引き取り下さい」と手で合図した。奥の部屋へ移動しようとするグレゴール氏を手伝うべく、そちらに近付く。

「わざわざ呼び出しておいて、何だよソレ」

駿は周囲の目も気にせず、悪態をついている。その気持ちはよく分かるが、ここでそういう態度をとり過ぎるとどうなるか、分かったもんじゃない。次の目的地も決まっていないけど、さつきと織林刑事を叩き起こして移動した方が良さそうだ。

駿と桂花さんとを伴って、礼拝堂の後ろの方へ歩いていると、外へ通じる扉が開いた。少し強くなってきた雨が、開いた場所から内部に吹き込んでくる。近くにいた人たちは、雨に濡れないよう、少しでも奥に入るべく移動する。

扉の開いた音、あるいはよく聞こえるようになった外の物音に、織林刑事は目を覚ました。彼女の視線の先には、随分古そうなレインコートを着た警備ロボットが一台、ずぶ濡れのまま立っていた。

「ちよつとアナタ、何やってんの？ 扉を閉めなさい」

警備ロボットの向こうには、今にも流れ込んで来そうな民衆と、ソレを食い止める制服警官の姿が見える。雨粒だけでなく、中にいる人の安全確保の観点からも、扉は閉めておくべきだ。

織林刑事の命令に、警備ロボットは耳を傾ける節がない。彼は、グレゴール氏をジッと見据えたまま、何やら呟いている。

「危険物を発見しました。排除します」

壊れたラジカセのように、何度も何度も同じフレーズを繰り返す。急に音声がかぶったかと思いきや、彼は一目散にグレゴール氏へ駆け寄ると、誘導棒を振りかぶって叩きつけた。グレゴール氏は、付き人の男性を突き飛ばし、力一杯に振り下ろされた誘導棒をその身に受けた。

礼拝堂の中は一気に騒然となり、四隅にいた警官は、中にいた市民を守るべく誘導に当たった。織林刑事も、僕らのことを後回しに、周囲の指揮を取った。僕らはひとまず扉を閉め、鍵を下ろした。

グレゴール氏に暴力を振った警備ロボットは、誘導棒を持っていた右腕を損傷し、誘導棒は粉々に砕け散っていた。それつきり動きを停止していたが、制服警官の一人が安全を確保しながら徐々に接近し、背中にある動力ユニットを完全

に破壊した。

グレゴール氏に突き飛ばされた男性は、慌てて彼に駆け寄った。しつかり胸の中に抱きかかえ、グレゴール氏 の 消息を確認する。止むに止まらず、僕と駿もそちらに近付いた。

「大丈夫ですか？」

恐る恐る、グレゴール氏を覗き込む。どうやら頭部の外装に損傷があるようだが、それ以外はさつきまで喋っていた時と何ら変わらないように見える。付き人の男性も不安そうな表情を浮かべていた。

しばらくそうやっていると、グレゴール氏のベネチアンマスクの下に光が灯った。ゆつくりと顔を周囲に向け、付き人の支えを借りながらゆつくり身体を起す。

「大丈夫ですか？」

僕は再び、同じ言葉を発した。グレゴール氏は、ゆつくり頷く。

「ただ、今の一瞬で協定違反が確認されました。二十四時間後にリセットが発動します」

「そんな、急に」

慌ててケータイを取り出し、時刻を確かめると、今は六月二二日の午前七時五八分三九秒。明日の午前八時前には、ピューパが起動する。

「止める方法はないんですか？」

「止めるには、有資格者による再協議の申請か、協定の無期限凍結のいずれか。

ただし、無期限凍結は、有資格者の再協議放棄が条件です」

グレゴール氏の説明は、要領を得るようで全くもって要領を得ない。

「有資格者って、誰なんですか？」

「賢明なアナタなら、もうお分かりでしょう。父より優先される資格者が誰なのか」

随分もって回った言い方をするが、要するに融和そのもの、子が該当者か。見つけるためには、真境名を探す必要がある。

「無期限凍結の申請方法は？」

「月が南中に差し掛かる時、ジグラットの尖端で有資格者の証を掲げなさい。申請が間に合えば、リセットの執行が停止されます」

塔が見える街

初出 令和四年一月四日 noteにて公開

第二七話

ジグラット？ 有資格者の証？ タイムリミットが示されたというのに、相変わらずもって回った言い回しを選ぶとは。良く言えばブレないが、頑固というか、ただただ面倒くさいオヤジなだけだ。グレゴール氏の付き人、教団の関係者になるというのも、なかなか大変なんだろう。

助けを求めてそちらに視線をやると、彼は「ああ、えーっと」と間を繋ぎながら、言葉を整理する。

「ジグラット、聖塔はこの街で一番高い塔のことです。有資格者の証は、私にもよく分かりません」

また塔か。この街で一番高い塔となると、海の近くに立っているハチ公タワー。上空の先端を、肉眼で捉えたことは一度もない。先日は入れなかった内部から登れば辿り着けるのだろうか。

さつきから、ケータイを見ていた桂花さんが顔を上げた。

「次、月が南中に差し掛かるのは明日の朝、六時半ぐらい」

「タイムリミットには余裕があるけど、割とギリギリなのは怖いな」

駿の感想に僕も同意する。凍結の申請を出すチャンスがあるのは不幸中の幸いだけど、時間びつたりでなくても、条件が満たせることを願いたい。有資格者の搜索と協力要請が優先ではあるものの、こちら側だけで出来そうなことは、可能な限り準備しておかないと。実行までにほぼ丸一日待たなければならぬ辛さ、ドキドキ感もなくはない。

「で、有資格者の証は？」

駿は両手の人差し指で、空中に適当な大きさの長方形を描いた。掲げると言うからには何らかの形を伴った物体だろうけど、必ずしもそういう形状とは限らない。ただ、最近誰かから受け取って、最近も意外な働きをしたそういう形の物に思い当たる節がある。

僕は大きく荷物が入っていないカバンの中を探り、底の方から小さな板を取り出した。昨日も、なぜか関係者パスとして機能した交通系ICカードを掲げ、グレゴール氏に「これのこと？」と尋ねた。

「それと、アナタの遺伝情報です」

グレゴール氏はゆっくり頷き、情報を捕捉した。

「要するに、僕がコレに触れた状態だと証になると」

グレゴール氏は、もう一度頷いた。そういえば昨日も、僕の手でパネルにタッチしたっけ。他の誰かが触っていたら、セキュリティは解除されなかったのか。

ただの「カードだ」と思ったのに、どんどん意外なアイテムになって行くな。どこへでも行ける万能感、信頼感が一人で増して行くのも興味深い。周囲の状況を忘れ、一人の世界でカードの裏表をしげしげ眺めていると、僕らが鍵を下ろした扉が、外側から蹴破られた。急な物音に驚いてそちらに目をやると、米利刑事がSATみたいに武装した同僚を伴って中に入ってきた。

彼は織林刑事に声を掛け、警備ロボットの事後処理や現場の治安維持から、自分の仕事へ移るように言った。彼女は「えー、急にそんな」と不満な声を漏らしながらも、彼の後について、僕らの方にやって来た。特殊部隊めいた警官は、現場の市民を守るべく周囲を警戒している。

さっきから続いている物々しい雰囲気、より一層引き上げられたんだなど、米利刑事の表情からも伝わってくる。

「話は付いたか。付いたなら、さっさと動くぞ」

米利刑事は、グレゴール氏の方を見た。

「あんたらは？」

付き人の男性が、代わりに首を振った。米利刑事は、近くに居た警官の肩を叩くと、「後は頼んだ」と言った。警官の返礼を軽く流し、「さ、早く」と僕の背中を叩いた。

「何をそんなに急いでんだよ」

米利刑事に駿が声を掛けるものの、彼はそれには取り合わず窓の方を見ながら、サスペンダーのようなショルダーホルスターから銃を抜いた。セーフティを外し、織林刑事の背中を押して、僕らの方に押しやる。

「走れっ！」

米利刑事の突然の怒号に、流石に織林刑事も指示や状況が飲み込め切れていない様子で、何やらぶつくさ言っている。米利刑事はこちらのことなど一顧だにせず、窓をぶち破って内部に侵入したそれに向き合い、僕らとの間へ割って入った。礼拝堂の中が再び騒然とする。状況をなんとなく察したららしい織林刑事は、桂花さんの手を引いて「こつち」と、教会の奥へ走り出した。

その後ろを追いかけながら、一瞬米利刑事の方へ視線をやると、彼は襲撃者の攻撃を、礼拝堂内の長椅子等を上手く使ってかわしていた。周囲の特殊部隊の助けも借りながら、無発砲で僕のすぐそばまでやって来る。

「ほら、早く行け」

彼は僕の後ろに着き、礼拝堂へ続く扉を閉めた。米利刑事が一番後ろについて背後を警戒し、織林刑事は先頭で行く先の安全を確保する格好になった。その間は、一番足の遅い僕が最後尾で、駿、桂花さんの順となっている。

「そっちじゃない、裏口だ。外へ出る」

先頭の織林刑事が丁字路で駐車場の方へ向かおうとしていたのを、反対へ向かえと米利刑事が指示を出した。このまま表に出してしまうと、駐車場へは若干の遠回りになる。織林刑事は一瞬足踏みするものの、先輩刑事の指示に従って、表へ通じる裏口へ進む。

教会の外、木津川に面した細い通りへ出ると、駐車場の方から爆発音が聞こえて来た。そちらへ目をやると、雨の向こうに黒煙が立ち上っているのが見える。

「立ち止まるな。走れ」

小雨が降りしきる中屋外に出て、爆発音に立ちすくんでいた織林刑事に、一足遅れて外に出てきた米利刑事が怒声を浴びせる。

「走れって、どつちに？」

「ちよつとは考えろ。演算装置は飾りじゃないんだろ？」

米利刑事が自分の頭を指で叩くと、織林刑事は「ハラスメントが酷いって、本当に訴えますからね」と言い返した。彼女は隣接する小学校の方をパッと見て、大きく息を吐く。深呼吸で気持ちを切り替えたらしく、顔を上げると「さ、行くよ」と一方通行に逆らって走り始めた。彼女が背を向けた方向に、旧型のロボットの交えた怪しい集団が見える。

小雨とは言え、雨の中で傘もささずに走っていると、段々靴の中に水が入って来て気持ち悪くなってくる。カバンの中に傘も入ってはいるが、視界確保と運動性を犠牲にしてまでやることではない。

さつきから見えていた大きめの通りにぶつかった。左は川口の交差点、右は木津川橋。車の往來を無視して直進するのは避けた方が無難に思える。どつちに進むべきか迷っているうちに、殿を務めていた米利刑事に追いつかれた。

「これはどつちに？」

「とりあえず、中央市場の方だ。西署の方が近いが、市場前の交番へ向かえ」

僕の質問に米利刑事が答えている間、駿は彼の腰あたりをモゾモゾ触った。米利刑事に「何してるんだ」と聞かれる前に、折りたたみ式の警棒をくすねた彼は、ストラップに自分の手首を通しながら、「ちよつと借りるぜ?」と言った。

彼は警棒を伸ばし、軽く素振りをする。風を切る音が聞こえて来た。

「戦力は多い方がいいだろ?」

「無茶はするなよ。過剰防衛の擁護は保障しかねる」

駿は軽い調子で「了解」と答えた。僕らのやり取りを他所に、車の往來をジッと見て、通りの真ん中で道を塞いだ織林刑事は、「早く渡れ」と手招きをした。桂花さんは一足先に通りを渡り切っている。

よくよく見ると、木津川橋の向こうにも、いかにも怪しい人たちが集合しつつある。このまま真っ直ぐ、道路を突っ切るしかなさそうだ。駿を先に行かせ、僕はその後を追いかけた。桂花さんと合流し、後ろから来る刑事二人を待った。駿と桂花さんは、僕を置いてどんどん先に進んでいる。

中央市場へ向かうには、ここから橋を二本渡る必要がある。どの程度の情勢かはまだ掴めていないが、川の上で道幅が細くなるのは、若干心許ない。

織林刑事は僕を追い越し、駿と並んだ。桂花さんを自分達の後ろに隠した。

「なあ、お前もなんか、武器無いかよ」

前を警戒している駿が、僕に向かってボソツと言った。そんなもの、ある訳がない。

「キャラじゃないのは分かるけど、ちよつとぐらい漢を見せてやれよ」

駿の言いたいこともよく分かる。彼のようなキャラクターでなくても、こういうシチュエーションでビクビクしてるだけなのは、我ながら流石にどうかと思う。武器なんて都合のいいもの、ある訳ないよなと思いつながら、雨粒が入るのも構わずカバンを探った。棒状の目ぼしいもの、さつきは取り出すのを諦めた折り畳み傘がある。

「守ってもらわなくても、結構ですけど」

傘は、僕が手に取る前に、横から覗いていた桂花さんによって持って行かれた。彼女はそれを確かめながら、ちよつとだけ柄を伸ばしてステッキのように軽く振る。

「私の方が、多分強いし」

彼女は僕を見てニヤニヤ笑う。それに対して取り繕う暇もなく、一つ目の橋が見えてきた。唯一の武器候補も取り上げられてしまった僕は、手持ち無沙汰にた

ただただ小雨の中を移動するだけだった。

初出 令和四年一月五日 noteにて公開

第二八話

道幅の狭さを心配していた一本目の橋では、先に展開していた治安維持部隊によつて、車道、歩道共に安全の確保が進められていた。自動運転が麻痺して乗り捨てられたらしい車は、片側二車線の両端に固められ、南北への行き来が出来るようになっていた。

ここでも暴れていたらしい警備ロボットや、ゴミ回収ロボの残骸がチラホラ見られ、半ばゾンビ、暴徒化した一般市民の制圧、牽制も彼らの手によつて果たされていった。

橋の真ん中辺りまで来ると、これから向かう先の中央市場の様子も徐々に分かって来る。市場関係者や搬入ロボ、作業用ロボットに不具合、反乱が起こっているらしく、あちらもそれなりに騒々しいようだ。

中央市場へ入っていく手前の道路あたりで、フォークリフトやターレーが合体したような二メートルから三メートル程のロボットが手当たり次第に破壊行動を続けている。その手前、交番勤務らしいお巡りさんが、近くの市民を誘導してこちら側へ逃げるように促していた。その先頭に、彼らを先導するお巡りさんも見える。

右手の方、中之島の方向から、暴徒化した市民三名が鉄パイプや金属バットを振りかざし、お巡りさんの視覚から襲いかかった。僕が「危ない」と声を発する前に、織林刑事、駿、桂花さんの見事な連携プレイによつて鎮圧、無力化された。織林刑事はともかく、他の二人はどんな訓練を受けたのか、上手く気絶させる程度に留めている。

お巡りさんはこちらに振り返ると、背後の米利刑事に気がついたらしく、「先輩」と声を出しながら、そちらへ手を振った。米利刑事は知り合いらしい彼に向けて銃を構え、引き金を引く。銃口から放たれた弾丸は、対岸にいた構内作業ロボットの、投網発射口を撃ち抜いていた。

「気を抜くな、横山」

米利刑事は入念に周囲を警戒しながら、インカムの耳に指を当てた。すぐに顔を上げ、横山と呼ばれたお巡りさん、織林刑事に向かって顎をしゃくる。

「国際会議場だ。隣のホテルに臨時の本部を設営中だ」

「西署は？」

横山氏の質問に、米利刑事は首を振り、「ダメだ。半分機能停止している」と答えた。

「ほら、行くぞ」

今度は米利刑事が先行し、二本目の橋は渡らずに右手へ折れた。横山氏は橋と橋の間、交差点のところで市民の誘導に当たると。僕は市民の濁流を避けるように、米利刑事の背中を追いかけた。

目の前を高速道路が横切るものの、川と川の間にある公園や、細いビルぐらいいかないこの辺りは、それほど人もロボットも多くない。高速の高架をくぐり、新なにわ筋を横切る辺りから、だんだん終末世界っぽさが強くなって来る。普段なら気持ちよさそうな堂島川沿いの遊歩道も、今はあまり歩きたくない。

堂島川の向こう側も、右手に位置する土佐堀川の向こう側も、混乱具合が二割弱っぽいというのが、かえって不気味だ。思わず身体を震わせると、桂花さんが「寒い？」と声を掛けてくれた。

「いや、大丈夫。大丈夫」

彼女の方をチラリと見て、慌てて視線を背ける。そう言えば、さつきから小雨の中を歩きっぱなし。六月下旬の生温さもあって寒くは無いが、シャツや肌着はすっかり濡れて身体に張り付いている。織林刑事のキャミソール、ボディラインも、別に見たくはないけど視界にずっと収まっていて、どう処理をすればいいかわからないモヤモヤがどんどん募っていく。

余計なことを考えている状況ではない。今はとにかく気を張らないと。次の信号まで行けば、国際会議場と本部が設営されつつあるホテルに辿り着ける。そこまで行けば、着替えぐらいいは叶うかもしれない。

「死角が多いんだから、気を抜くなよ」

駿は、僕の右側を警戒しながら歩いている。比較的に見通しのいい一本道。確かに右手の生垣は背の高い植物が植えられていて、よく手入れされた緑の壁と化しているが、コレを突き破って何者かに襲われることはあるまい。

そこここに展開している特殊部隊、治安維持部隊が、催涙弾や放水、ゴム弾で暴徒に応戦しつつ、道端で無力化、気絶させた人たちの回収にも当たっている。中には、同型のロボットを黙々と回収しているロボットの姿もあった。

生垣が終わり、視界と道が少し開けてきた。非常線が張られ、通行禁止になっ

た橋と交差点、目的地である国際会議場の前までやってきた。この信号は既に停められており、自由に行き来ができた。近隣から避難してきた一般市民、集まりつつある警察官の合間を縫い、米利刑事、織林刑事の後ろについてズンズン奥の方へ入っていく。建物の間の中庭を抜け、本部があると言うホテルにようやく着いた。やっと、雨から解放される。

ホテルに入ったところで、米利刑事は銃をホルスターに収め、インカムに指を当てている。中は空調が効いていて、ずぶ濡れの身体には少し肌寒かった。

「流石にちよつと寒いよね」

ブラウスが透けていることによく気がついたらしい織林刑事は、同じくシヤツの下が透けて見えている桂花さんを周りの視線から遮るように隠した。

「先に、お風呂つて借りられませんか？」

立ち止まって情報を確認しているらしい米利刑事に、織林刑事が尋ねた。彼はインカムに耳を当てたまま、一瞬彼女を見て、「ああ、そうだな」と頷く。織林刑事は、「じゃあ、後ほど」と一言残し、桂花さんの背中を押してフロントの方へ歩いて行った。

「お前らも行つてこい。風呂から上がったら、二階の大会議室な」

彼は、その場に残っていた僕と駿にも後を追えと手で合図した。ここで風邪をひいている場合でもない。すぐに次の手を打てる段階でもなさそうだし、素直に従つておこう。駿は米利刑事に警棒を返し、さっさと先行する女性陣の後を追いかけた。僕も早歩きでそれに付いていく。

「あ、そうそう。コレ」

先に行った桂花さんが戻つて来て、少し形が変わった傘を差し出した。橋の上で暴徒を殴打した時に、ひん曲がったらしい。

「じゃ、また後で」

桂花さんはフロントで女湯の情報を聞いてきた織林刑事と合流し、僕らにひらと手を振つて、エレベータホールへ向かった。

「俺たちは、女湯より一個下だつてさ」

先にフロントで情報を仕入れてきた駿は、そのままエレベータを呼びに行く。駿にしては、妙にスムーズで機転が効くなど後ろをついていくと、既に女性陣の姿はなかった。

大会議場の片隅で、バスタオルで頭を拭きながら情報を整理していると、先に

風呂へ向かったはずの女性陣がやって来た。二人とも、僕らと同じく支給品の紺の長袖シャツに、紺のカーゴパンツを着ていた。織林刑事も着られている感が丸出しだが、僕らも職場体験感が強い。体格がいい駿は、武装解除した新人隊員っぽさがある。

「おい、ちゃんと聞いてるか？」

いつになく真剣な面持ちの米利刑事に、明後日の方向を向いていたことを注意された。すみません、と答え、話に戻る。

「つまり、桜島方面へ抜ける必要があるってことだ」

米利刑事が蓋をしたペンで、地図をスーッとなぞった。

「完全に遠回りだ」

駿が地図を覗き込んで言った。確かに、当初の教会から中央市場、国際会議場とどんどん遠ざかっている。中央市場へ抜けられていれば、まだ少しは近付けたのに。この迂回は痛い。

「でも、車とか電車で行けなくもないですよね？」

電車の場合、乗り継ぎ方によってはかなりの遠回りにもなるが、タイムリミットの的にも、まだ二十時間以上あるし、だいぶ余裕を見た動きが取れる。

「車はまだしも、電車は無理だ。福島駅まで行けば一発だが、まともに動いていない」

「じゃあ、夢洲方面に抜けて、舞洲とか、そっち方面から行くとか」

僕はすぐその中之島駅を地図の上で指し、そこから伸びる線をスーッと西へ滑らせた。まともに電車が動いていないのなら、そのまま地下鉄の線路に沿って向こうの駅を目指せばいい。

「進入経路が限定的すぎるだろ。相手も流石に警戒するさ」

「車で強引に近付く、も無理ですか？」

米利刑事は、今度の意見にも首を振った。

「手動運転は可能だが、位置情報は筒抜けだ。迎え撃たれる」

自動運転に頼らず走行が可能でも、位置情報を完全に遮断することは難しい。特殊な車両ならまだしも、この時代にそんな車は滅多にない。赤レンガ倉庫のクラシックカーもレプリカらしく、わざわざあそこまで赴く理由はない。

「つまり、徒步行軍と」

「残念ながら、そうなるな」

随分前に営業を終了した桜島のテーマパークまで、ここから歩き通しで一時間。

米利刑事はより一層険しい表情を浮かべた。

「最短で一時間。迂回が増えれば増えるほど、そこでアイツが何かを仕掛ければ仕掛けるほど、持ち時間はどんどん少なくなる。二十時間、案外ギリギリかもな」
米利刑事は、まるで他人事だと言わんばかりに、乾いた声で短く笑った。

初出 令和四年一月六日 noteにて公開

第二九話

「で、そっちはどうなんだ？」

米利刑事は、大きなゴーグルで目元を覆いながら手元のゲームパッドっぽいスティックを両手で操作している青年に話しかけた。視線は、目の前の大きなスクリーンに向けられている。スクリーンには、上下左右に微妙に揺れる映像が映し出されていた。ピントもイマイチあっておらず、ジッと見ていると画面酔いしてしまいそうだ。

「ご覧の通りですよ。急かさないで」

青年は、ゴーグルを外すことなく、手元のゲームパッドを右左に動かしながら、スティックも小刻みに操作する。

「もしかして、アレ」

駿は画面を指差し、米利刑事に視線をやった。米利刑事は「そうだ」と頷いた。映像が段々安定してくる。街中や、どこかのショッピングモール、小売店の中ではなさそうだ。若干埃っぽく、所々色褪せてもいるが、一所懸命非日常を作り出そうとしているそれは、大手の映画会社が主となって作り上げたテーマパークの成れの果てのようだ。

本来は誰もいない場所のはずだが、遠くの方にチラホラ従業員っぽい人影も見える。

「バレたらマズいんじゃないですか？」

「だから、バレないように上手くやれって言ってるのさ」

僕の質問に答えた米利刑事は、「じゃあ、よろしく頼むぞ」と、偵察用ドローンを遠隔操作している青年の肩を叩いた。少々強かつたらしく、映像が左右に乱れた。米利刑事はスクリーンから視線を外し、再び資料が無造作にぶちまけられているテーブルへ身体ごと向き直る。

「次の問題は、例のドラッグだな。警察へのクラッキングも早々に対処しないと、満足に徒歩行軍も出来ん」

街中に蔓延る暴徒化した一般市民と、機能不全に陥り、敵味方の区別が付けにくくなっている警察への応急処置と。真境名の下へ向かうにしても、今の状況で

街に繰り出すのは少々厳しい。

「教会の方はどうだ？」

米利刑事に話を振られた警官は、首を振った。

「まだ、あちらで籠城してもらった方が安全で」

「——だよな。グレゴールつてのを置いてきたのは失敗だったな」

米利刑事は唇を噛んだ。ただ、彼も連れての脱出劇、ここまでの逃走劇は難しかったように思う。暴走した警備ロボットによる暴行がなかったとしても、元々の歩行速度からして、無理だろう。集団の最後尾を走っていた僕に、言えたものでもないのだけど。

「有資格者の権限を上書きして、君に再交渉してもらうのが一番手っ取り早いんだが」

「——ただし、彼にセントラルドグマの再設定を飲んでもらう必要がある」

どこからともなく現れた空湖さんが、米利刑事の言葉を遮った。彼は胸元に抱えていた色んな資料を、すでに広げられている資料の上に置き、両手を開けると「よう」と僕らに声を掛けた。

彼はドローンの映像が映し出されているものとは違うモニターに、小さなリモコンを向けてボタンを操作した。モニターは、真境名の居場所を特定した時の異常を検知した画面に切り替わる。

「グレゴール十八世が一時的に機能停止した瞬間、彼は自分たちのセントラルドグマを解除したらしい。この電力消費は、その時の異常のようだ」

彼は手の中でリモコンとレーザーポインタを持ち替え、電力消費が盛り上がった場所をグルグルと指し示した。セントラルドグマが解除されれば、リセットでピューパが作動しても、その影響を受けなくなる。

「できるんですか？ そんなこと」

僕の問いに、空湖さんは「技術的には」と答えた。

「ただし、協定違反だけだね。中心原理、教義に反するから」

警備ロボに殴られた後、グレゴール氏がすぐに協議違反を検知したのはそういう事情があったのか。同じタイミングで、暴徒化した市民による暴動、武力衝突が起きているらしく、そちらの理由でもリセットの発動条件を満たしたのかと思っ

た。「彼らがセントラルドグマを受け入れない限り、権限を上書きしても再協議は成し得ない。協定の前提、必要条件だから」

チャルカ教とザ・シティとで作り上げられた平和には、リセットという共通の罰則がなければ成り立たない。そこから逸脱するものがあったら、協定を新しくする意味がない。

「再協議でセントラルドグマを廃止するにしても、今の違反を是正しないと再協議のテーブルに着くことは出来ない。そういうことですね？」

織林刑事の指摘に、空湖さんは「その通り」と頷いた。

「ま、彼らの事情も踏まえると、素直に飲むとは思えないけどね」

空湖さんは、彼が持ってきた資料の中から一冊、紙バインダーを取り出して僕に差し出した。それを受け取って表紙を開くと、親しげな顔でお互いを見つめている男女の写真が目についた。

「例の関係者と見て良いのかな？」

米利刑事が、空湖さんに声をかけた。桂花さんが、空湖さんのことを紹介すると、簡単な挨拶を交わした。

「奴らの正体も気になるが、先に厄介なドラッグとシステム復旧でお力添えいただきたい。ご協力願えますか？」

空湖さんが頷くと、米利刑事は資料の山の中から、一つのクリアファイルをつ張り出し、「こちらに成分をまとめています」と彼に差し出した。空湖さんは、横にいた桂花さんと共に、クリアファイルに納められていた資料に目を走らせる。

「詳しいことは専門家に委ねますが、早速、中和剤の生成に取り掛かってもらいましょう。散布は協力してもらいますよ」

米利刑事は「もちろんです」と答えた。

「クラッキングへの対処は我々の方でも既に走らせていますが、優先度を高められないか打診します」

「よろしくお願いします」

空湖さんは米利刑事とのやり取りを終えると、早速卓上に置かれた電話に手を伸ばし、どこかへ連絡し始めた。米利刑事は彼の電話が終わるのを待ちながら、手持ち無沙汰に残りの資料を眺めたり、ドローンが映す映像を気にかけてりと、落ち着かない。

僕はそれを横目に、空湖さんに渡された資料に目を通す。

男の方は、ネフイリム計画の資料でも見た被験者。名前は藤倉勝大、元々はザ・シティの研究者だったらしい。女の方は、遊川詩恵留。ネフイリム計画の研究者、藤倉の世話も担当する人物だったようだ。クープを卒業してからも、二人

には多少なりとも接点があつた。

「えっ、ちよっ」

織林刑事の不意の声に驚いて顔を上げる。彼女はドローンの映像が映るモニターを見ていた。僕もそちらに目をやるが、彼女に「あ、ダメ」と駿と共に目を塞がれた。一瞬で何が映ったか分からなかったが、どうも肌色が多かった気はする。ドローンのマイクは音も微妙に収集しているらしく、怪しげな声が微かに聞こえてくる。

「おやおや、一方的な覗き見とは感心しませんね」

荒く艶かしい短い声に混ざって、真境名の声が聞こえて来た。誰かの指示で音量が上げられたらしく、真境名の声だけでなく、吐息のような嬌声や、粘り気のある水分のような怪しい物音、何かが軋むような音も大きくなる。真剣な表情で電話でやり取りしている空湖さんの顔も、どこか気まずそうに見えた。

「そういうプレイも嫌いじゃないですが」

真境名は息を弾ませながらも、落ち着いた口調で言う。一際大きな声が聞こえたかと思うと、しばらくして小さな金属音が聞こえて来た。織林刑事の手が、だんだん緩められていく。ゆつくりとモニターの方を見ると、上半身裸で汗だくの真境名が、屋外劇場みたいところで映っていた。後ろには、毛布で身体を隠す大人の女性がいるらしい。ドローンが上手に位置を変え、センシティブなところは映っていない。

真境名のところに、テーマパークの従業員、キャストの制服を着た若い女が大きめのタオルを持ってやって来た。タブレットを持って来た別の女は、彼が身体を拭きながらも見やすいように、画面の位置を微妙に変えている。

「おや、パパとママじゃないか。お爺ちゃんまでいるなんて、嬉しいね」

真境名はドローンに向かってにこやかに笑い、楽しそうに手を振った。どこから撮影しているのか全く分からないが、向こうのタブレットでこちらの様子が分かるらしい。彼はすぐに眉根を顰め、顔の前で両手を合わせた。

「まずは、二人に謝らなきゃ。折角二人にもらった身体なのに、二人とも早速、いじっちゃった。申し訳ない」

真境名はスクリーンには映っていない、隣の人物にも謝るように促している。

第三〇話

「おい、奴は誰だ？」

僕らが見せてもらえなかったところから、ずっとスクリーンを見ているはずの米利刑事が、周囲の人間に問いかけた。僕にはその意図がよく分からない。

「え、ふざけてます？」

思わず口について出た悪態に、慌てて口を塞いだ。周囲の視線が僕に集まった。「どこからどう見ても、真境名じゃないですか」

僕は画面の人物を指し、米利刑事の顔を見るも、彼はなおもピンと来ていないように見える。彼は「アレのどこが、真境名なんだ？」と僕に聞いてきた。そう言われて、ようやく気がついた。スクリーンに映る人物は、どう見ても真境名と同一人物とは思えない。

画面の彼は、ついさつきまで見ていた資料の人物、写真に写っている人物とはそっくりだが、目を背けたくなるような特徴的な両目の義眼は見当たらない。至る所に走っていた手術痕や、生身の身体に無理やりつけられたような機械も見つからず、サイボーグ然とした真境名の姿とは、似ても似つかない。

ザ・シテイの設備で目撃したことや、今までの話の流れ、直前まで見ていた資料を勝手に結びつけ、スクリーンに映る彼と真境名とを、自然と同一人物だと認識していた。

「流石はパパだね。話が早くて助かる」

やや暗い灰色っぽい肌をしている画面の中の彼は、「僕が真境名で、こっちがシエルだ」と隣の女性を画面内へ収まるよう引つ張り込んだ。赤い眼鏡をつけた女性は、首から下はまだ何も身につけていないのか、恥ずかしそうな表情で胸元の布を少し引き上げた。

「地元のテーマパークで、ささやかなハネムーンの最中だ。パパとママ、お爺ちゃんも一緒にどうか？」

画面の彼は従者の女からタブレットを受け取ると、ゆっくり立ち上がった。彼を捉えたドローンも、動きに合わせて慎重に画角を変える。周りには、真境名と相手の女性、世話係の従業員以外にも、何人かいるらしい。

制服を着用している人物は全員かなり若く、全ての顔に見覚えがあった。制服を着ていない人物も、向こうのテーブルに集まっている。そちらを映したスクリーンを見て、駿は「おい、アレ」と叫んだ。

「おっと、すまない。越智くんのご家族も招待すべきだったかな」

画面の真境名は、僕と桂花さんの家族がドローンのカメラへ映るように、テーブルの周囲をグルリと回る。ザ・シテイにいた空湖さん以外は、全員が集められていた。

「越智くんもココで、クルー、キャストにならないか？ ついでに助けてやるよ」
ドローンは、家族卓の近くにいた従業員の顔を大写しにした。たまたまそこを通りかかったキャストは、押井だった。彼だけでなく、僕らのクラスや学年に留まらず、一年生から三年生まで学校中の生徒が集められているらしい。僕にはよく分からないが、駿や桂花さんの部活の先輩、後輩も時折画面に写っているようだ。

「藤倉、いや真境名くんだったかな」

いつの間にか電話を終えた空湖さんが、スクリーンを見て言った。

「ここに、君が欲しそうなデータが入ってるんだが、見えるかな？」

彼はポケットから取り出した、細長いメモリースティックを顔の前で軽く振った。画面の真境名は、「ああ、見えるよ。それで？」と言った。

「コレが欲しいなら、取引をしないか？ 応じるも応じないも、君次第だが」

「それは構わないが、中身の保証は？」

「ダミーを掴ませる理由が、私にあるかい？」

真境名は、短く笑った。空湖さんはずっと、真剣な表情でスクリーンを見つめている。

「いいだろう。ただし」

「——彼らに持って行かせる。それでいいかな」

空湖さんは、そのスティックを僕に差し出した。グツと押しつけられて、受け取らない訳には行かなかった。

「条件をもう一つ。警察の関与は無用に願おう。こちらに来るのは、その高校生三人だけだ。条件を飲まない場合は、分かっているね？」

真境名は低い声で笑いながら言うと、少し間をおいてドローンに手を伸ばした。打撃音が響いて、自由落下に合わせた映像が映し出される。地面から数センチ程度の低い映像が映し出され、すぐにそこで映像と音が途切れた。

「江辺野さん、勝手は困りますよ」

米利刑事が、空湖さんに嫌味つたらしく言った。

「越権行為だったかな。コレは失礼した」

空湖さんは特に悪びれる様子もなく、舌を出して謝った。僕は彼に渡されたメモリースティックに目をやった。彼は米利刑事に中和剤の生成状況を伝えてから、僕の側へ来た。

「そこに、遊川詩恵留のデータが入っている。辛うじて残っていた、十七、八ぐらいまでの記憶データだけだね」

さつきまで見ていた資料によれば、彼女がネフイリム計画へ配属になり、藤倉と親密な関係になったのは、彼女が二十代後半になってから。藤倉と共にザ・シティを脱走して亡くなるまでの十年分ぐらいが、ごっそり抜け落ちている。

「不完全ではあるけど、今の彼女に入っているデータよりは遥かにマシなはずだ」
今の彼女、先ほどスクリーンに映ったシエルは、身体こそ成熟しているように見えたが、生体脳へのデータ移行は完全に終えられなかった可能性がある。あの時、インストールの途中で中断してしまったから？

「真境名の方は、無事に移行できてますよね」

彼があの時持ち去った、予備とやらも活用して生まれ変わりを果たしたのでらう。促成培養も可能な設備、人格や記憶の移行も可能な施設を備えておきながら、このデータが交渉材料になるのは、不思議な気がする。

「遊川のデータがちゃんと持ち出せなかった、複製にも失敗してたからだよ」

空湖さんに言われて思い出した。管理部でも、彼女のデータはアクセスの痕跡こそあれど、データそのものは見つけられなかった。脱走後、肉体も人格データも、正規のものは消されたのだろうか。

それでも、ザ・シティのデータに散らばった痕跡や、ヒストリーを追いかけて、交渉材料にできる程度のデータは引っ張り出した。他の資料もしっかり集めながら、ここまでやり遂げてくれるとは。空湖さんは、とんでもなく優秀な人物のようだ。

「あつという間に、成人した子どものいるパパとママだつてよ」

駿が、僕と桂花さんとを茶化しながら、ケラケラ笑った。彼は僕が持っていた資料を手にとると、中の写真をじっくり見る。

「いじつたつて言つてたもんなあ。そっくりじゃん」

彼の言う通り、資料の中の藤倉、遊川の二人が完全に再現されていた。ただし、

種族の垣根を超えた、第三の人類として。

「やっぱり、好きだったのかな」

桂花さんも、駿の持つ資料を横から見た。そちらの写真では、藤倉は炭素製の人間として、遊川はケイ素製の人間、機械の人として映っている。

「だから、必死にヤッてたんじゃないの？」

「あー、でも姉弟の近親相姦だよね。デキちゃっても困らない？」

桂花さんは、眉を顰め、嫌なものを見る目で、今は何も映っていないスクリーンのの方を見た。確かに遺伝子的には姉と弟になる。駿は「知らねーよ、そんなもん」と切り返す。

「盛り上がつてるところ悪いんだが、ちよつといいかな」

空湖さんとのやり取りの後、向こうで何やら打ち合わせをしていた米利刑事が、こちらにやってきた。直前の話題が話題だけに、ちよつと気まずい雰囲気、ゆつくり声のほうに向き直る。

「さっきのやり取りの通り、ココからは君たち三人で向かってもらう」

米利刑事は、さっきまで広げていた資料を片付け、必要なものを見やすいところへ広げ直した。

「俺たちは手伝いたくても、中和剤の散布と警察の機能復旧で精一杯だ。例のテーマパークに乗り込むのと、再交渉云々は手が回らない」

米利刑事は言及しなかったが、人質代わりの学友、家族もあの場にいた。介入がバレれば、どうなるかは分からない。

「ただ、情報提供や装備の供給はさせてもらう。君らの安全確保も、できるだけ我々の方でバックアップしよう」

「安全確保？ テーマパークまで行って、やり取りしてくるだけだろう？」

駿の横槍に、側で話を聞いていた織林刑事が、「それがちよつとね」と口を挟んだ。

「あの元テーマパーク、実はヤバいんですよね」

織林刑事はそう言いながら、助け舟を求めて空湖さんの方へ視線をやった。彼はそれを受け止め、話を繋ぐ。

「先の大戦時に使われた兵器とか、ネフイリム計画とかで廃棄された色んなものを投棄、保管してたんだよね」

空湖さんの話によると、随分前に廃業になったテーマパークなのに、跡地の再開発が進まなかったのは、そういう事情があったかららしい。上空からも見えな

いように、上手く理由をつけて、色んな暗部を覆い隠していたとか。

「その一部を、ヤツは活用し始めたらしい。周辺住民からのタレ込みがあった」
米利刑事は画面を切り替え、SNSへ上げられた映像をモニターに映した。そこには無人の機動兵器が右往左往している様子や、ツギハギだらけでバランスの悪そうな人間サイズの生き物がウロウロしている様子が映っている。

「周辺区域の避難誘導も開始しているが、君らは今からそこに向かわなきゃいけない」

今、短い映像が繰り返し再生されているのは、テーマパークの外の様子。中の様子も、地獄絵図の可能性がある。

初出 令和四年一月八日 noteにて公開

第三一話

現地へ無事に辿り着けても、中には家族を含めた人質がいる。ドラッグの影響も関係なく、僕らに反発する人たちもきつといる。それでも行かないと、和解のチャンスもなく死を待つだけ。

「取引に応じるんじゃないのかよ」

駿は映像を繰り返し見ながら、悪態をついた。

「アイツらは別に、力尽くで奪い取ってもいいからな。相手が死体でも気にしないさ」

米利刑事は指を二本立てて銃の形を作り、駿の眉間に当てた。軽く撃つふりをする。一瞬ニヤリと笑い、すぐに真剣な顔に戻った。

「周辺の様子も、中の様子も様子も引き続き探りはするが、迅速な共有は期待するな」

彼はそう言いながら、トランシーバーを僕に差し出した。

「現地の状況に応じて何を選択するか、こちらから指示も出すが、最終的には君らで考えて、君らで決める」

目の前に差し出されたトランシーバーを受け取ると、彼は「インカムが良ければ、後で選べ」と付け加えた。

「最大の懸念は、彼らが元研究員ってところかな」

空湖さんが、僕に渡した資料を何ページかめくり、僕を含めた他のメンツに見えるよう、ファイルの向きを変えた。ネフィリム計画に関する主要メンバーの項目と、藤倉、遊川脱走に関する情報が、一部黒塗りで提示されている。

「この街のことも、ザ・シテイのこともよく分かっている」

黒塗りの部分は不明だが、ザ・シテイからの脱走に関して、相当の準備もしていたらしい。今の遊川氏にどこまで当時の記憶があるか、能力があるかは不明だが、外からビューパを起動する装置や、セントラルドグマを外す方法については彼女の方がメインで開発を進めていたらしい。

「ここに記載されていない情報、黒塗りで開示できない情報も、まだまだ出てくるかもしれない。私が知らない機密も、沢山知ってるんじゃないかな」

僕からすれば、空湖さんでも十分に思えるけど、藤倉、いや真境名の知識や技術はその上の上、と。人質を取られた上で、ただの高校生が相対する相手としては、かなり厄介な部類に入る。

「まあ、そんな悲観的な顔をするな。できるだけバックアップはするからよ」
米利刑事は、僕の肩を軽く叩いて笑顔を見せた。彼は僕のリアクションを見ることなく、近くにいた織林刑事に「しばらく、頼んだぞ」と指揮の割り振りを依頼する。織林刑事が事情を飲み込みきれず戸惑っているのも構わず、僕と駿、桂花さんに「付いてこい」と声を掛けて歩き始めた。一拍遅れて、その背中を追いかける。

大きな会議室を抜け、ホテルのバックヤードを突っ切って、荷捌き場の奥へやって来た。食材が運ばれていくのを横目に見ながら、資材置き場の一角へ造られた区画に辿り着いた。警察によって運び込まれたらしい備品や装備がズラリと並べられている。奥の方には、空湖さんが持ち込んだのか、ザ・シティからの供給らしい腕や脚も、専用のケースに入って積み上げられていた。

とりあえず僕は、防弾ベストやプロテクター、インカム付きのヘッドセットに手を伸ばした。簡易な特殊部隊の装備ぐらいが、無理なく使えそうな気がする。桂花さんも、ほぼ同じ装備を選んでいった。米利刑事に使い方を教えてもらい、インカムで相互に通信する練習もできた。

「サブマシンガンとか、銃も持つていくか？」

米利刑事に武器を勧められながら、「いやあ、流石にそれは」などとやり取りしている間、駿は腕組みをしたまま片隅に積み上げられたケースの前に立っていた。よくよく見ると、二つのケースを見比べながら、一人でうんうん唸っている。

「どうした？」

見かねた米利刑事が、後ろから声をかけた。駿は、「あのさあ」と言いながら、二つのケースを指差した。

「こっちの奴と、こっちの変なマークがついた奴。何がどう違うの？」

駿が比較していたケースのうち、左にあるケースには、要注意っぽいビックリマークが描かれていた。米利刑事はそれを見て、「ああ、それか」と言った。

「こっちが軍用で、こっちが警察向け。基本性能はほぼ同じだが、こっちはリミッター解除の機能がある」

「リミッターを解除すると？」

「自壊覚悟で火事場の馬鹿力を発揮できるが、頭にも若干の影響が出る」

駿は「なるほどね」と、マークが付いている方のケース、軍事用のものをジッと見ながら言った。

「ちなみにコレ、おやつさんに言ったら首から下、全部変えられたりする？」

駿の言葉に、米利刑事は「おやつさん？」と首を傾げた。僕が「江辺野さんです」と横から補足すると、彼はすぐに頷いた。

「聞いてみるか？」

駿は、米利刑事の問いかけに即座に頷いた。米利刑事はケータイを取り出し、少し離れたところで電話を架けた。駿は、例の注意マークがついた軍事用のケースを色々と物色し始めている。

「どうするつもりなんだ？」

「できる限りのことはしたくつてさ」

駿の側でしゃべっていると、米利刑事が後ろから、話がついたと駿に言った。

「もうすぐ来るつてさ」

「ありがとうございます」

駿は米利刑事に頭を下げた。米利刑事は、僕と桂花さんの背中を押して、武器の選定を進める。銃にするか、白兵戦向けの得物にするか、多様な武器を目の前にして悩んでいると、空湖さんが走ってやって来た。駿を連れて、どこかへ去っていく。

「彼のことは、江辺野さんに任せよう。君は君で、ちゃんと武器を選びなさい」

遠ざかって行く駿の後ろ姿が気になったが、米利刑事に身体で視線を遮られた。

空湖さんに連れて行かれた駿は、やっと会議室に戻ってきた。見た感じでは、前より引き締まってスマートになった気がする。僕らと同様に最低限のプロテクターも身に付け、武器つぽいものは装備していない。左腰に、伸び縮みする警棒らしきものが見えるぐらいだ。

僕も、駿が身につけているものと同じ警棒と、「これだけは持っていけ」と言われた拳銃を装備した。威力のありそうなりボルバーではなく、セーフティを外して引き金さえ引けば、弾数もあまり気にせず使えるタイプ。桂花さんはこれに加えて、連結式の長物、最終的には両手で扱う長さの棒を選択した。

彼女曰く、「棒高跳びでも使うから」らしいが、戦いの場で使えるかどうかはよく分からない。出来れば、僕が持たされた合成樹脂製の盾の後ろで、守られて欲しい。

「戻って来るまで、元の身体はよろしく頼むよ」

駿が空湖さんをお願いすると、彼は「任せとけ」と力強く返した。部活で鍛えてきた身体も、古谷から受け継いだ大事な右腕も、大切に保管して来たようだ。

「少しは戦えそうになつて来たじゃない」

「まだまだ大将が頼りないけどな」

米利刑事の感想に、織林刑事は「もー、そんなこと言わないの」と抗議した。どこまで行つてもひよろ長で、何をやつても頼りなく見えるのは、本人がよく分かっている。

ここまで持つて来た荷物をバックパックに詰め替え、出発の準備を整えた。もう一度、テーブルに広げられた地図の前で、現在地とルートを確認する。

「現在、時刻は午前十一時三十二分。最短ルートで一時間十六分だ」

堂島川沿いに中央市場の方へ抜け、安治川に沿ってひたすら西へ向かうルート。そもそも、テーマパーク周辺の道に選択肢が少ないのだが、延々とまっすぐ進む分、逃げ道も少ない。

暴徒化を鎮静する中和剤の散布が始まっているとは言え、産業用ロボット等のシステム復旧まではまだ手が回っていないことも踏まえると、例の中央市場へ接近するのは避けたいところ。一度迂回して新福島から野田の方へ抜け、淀川を越えない程度に安治川との間でジグザグに進むのがベターだろうか。

どれだけウロウロしても、二時間とか、三時間もあれば到着するはず。よほど激しい戦闘でも起こらない限り、時間にはまだまだ余裕がある。

「ま、ここで議論を重ねても、現場を見ないと判断できないでしょう」

「あとは、甲斐くんたちに委ねましょう」

米利刑事や織林刑事、その他の大人たちは何だかいい感じに会議をまとめたつもりだろうが、結局、何も決まっていない。僕らに丸投げで、なんとかしろということらしい。

バックパックに地図が入っているのを確かめて、カバンの口を閉じた。持つて行くものを念入りにチェックしていると、後ろから米利刑事が声を掛けてきた。

第三二話

「もう行くのか？」

「そりゃあ、タイムリミットがありますから」

僕がバックパックを背負おうとすると、腹の虫が鳴った。

「まだまだ、余裕は半日以上ある。腹ごしらえぐらいしてから行けよ」

米利刑事は笑って言いながら、いつからポケットに入っていたか分からない、グラノラバーを差し出した。目の前のそれに困惑していると、「それは中に入れて」と付け加えた。

「ちよつと早いけど、昼飯にしよう。江辺野さんも一緒に、どうですか？」

米利刑事の顔を見ながら、織林刑事は「また例の予算、勝手に使おうとしてません？」と突っ込んだ。

「どうせ、ほとんど使っていないだし」

「使わないなら使わないでいいですよ、別に」

「景気付けにちよつと良いもん飲み食いするぐらい、いいじゃないか」

米利刑事の言い分に、織林刑事はなおも正しく振る舞い、食い下がろうとする。そんな彼女に、米利刑事は「じゃあ、お前は来なきやいい」と言い放った。

「それは、あんまりじゃないですか」

「じゃあ、素直になれよ」

彼は僕に「なあ？」と同意を求めるが、こちらはこちらで時間が気になって仕方がない。そんな僕に、空湖さんは優しい声で「ま、どこかで食べなきや元気出ないし」と言った。

「昼飯食う余裕ぐらい、まだあるだろ」

駿は荷物の側で、プロテクターを外しながら、言った。桂花さんは空湖さんに、「食べ過ぎないでよ」と言いながら、食事に行く準備をしている。これは行くしかないらしい。僕がもたついて余計なものを外している間に、米利刑事は「どうするかなく」と会議室の出口へ向かう。

拠点にしているこのホテルは、それなりにいい飲食店も何店舗が入っている。

「やっぱりカツとか、米だよなあ」

慌てて身支度を整え、どこへ行くか喧々諤々のやり取りを繰り返している刑事らの元へ向かった。

ホテル内のランチビュッフェを一杯堪能して、食後のコーヒー、お茶をゆつくり楽しんでいる。本格的なフレンチや中華、焼肉や鉄板料理、カニや懐石といった選択肢もあったが、織林刑事が機転を聞かせ、今朝と同じようなスタイルになっってしまった。

変に肩肘張って緊張することもなく、気楽に朝より豊富なメニューを楽しめた。「時間を気にしてた割には、随分ゆつくりしてたじゃないか」

米利刑事は楊枝を動かしながら言った。

「そりゃあ、せつかくの食事ですもん。しつかり楽しまなきゃね」

織林刑事は、僕にウインクした。格好をつけてホットコーヒーを口元に運ぶが、まだ少し熱かったのか、一口啜るなり、少々顔を歪めた。

「冗談はさておき、段取りを確認しておくぞ」

米利刑事は爪楊枝を外し、コーヒーを飲んだ。弛緩した雰囲気を引き締めるように、声の調子を抑えて口を開く。

「当座の目標は、真境名とグレゴール十八世の間で再協議の場を設けること。協議の前提となるセントラルドグマの条件を飲ませて、交渉のテーブルに着かせることだ。ここまでは、いいな？」

米利刑事の確認に僕が頷くと、彼は僕の顔をしっかりと見て話を続ける。

「大将の任務は、江辺野さんから預かった例のメモリースティックを材料にして、協議の前提条件を飲ませること。もしくは実力で排除して、君が有資格者として、グレゴール十八世との再協議の場に着くことのどちらかだ」

彼は「実力で排除」と言葉を濁したが、僕らにそれを実行できるとはとても思えない。つまり、前者を着実に成し遂げねばならない、ということでもある。

「もう一つのオプションを実行するにしても、君らの子供にあたる二人が邪魔になる。出来るかな？」

米利刑事の視線は、僕の目を逃さぬようジッと見つめる。彼はクシャツと顔を歪ませ、「ま、出来なきゃ皆死ぬだけさ」と、笑いながら言った。

「セカイ系は君の趣味じゃないんだろうけど、君がやりたいようにやれよ。失敗したって、文句を言う奴もいなくなる」

「そこは、責任は俺が取る、とかじゃないんですね」

米利刑事の横から、織林刑事が茶々を入れる。

「責任なんかいくら取っても、降格、減給処分だからなあ」

「うわあ、だっさー」

織林刑事の口ぶりに、米利刑事も楽しそうにやり返した。目の前に差し迫った課題と緊張感に対して、いい歳した大人がワイワイやっている。なんともミスマツチで、肩の力が程よく抜けた気がする。

「さ、もう行くぞ」

米利刑事は、テーブル二つ分の伝票を持ち、キャッシュヤーに向かった。領収書を切ってもらおう彼を店内に残し、残りの我々はさつさと外に出る。

「他に、何か要るものある？」

織林刑事は店内の米利刑事を待たず、さつさと会議室へ向けて歩き始めた。彼女の先導に従って、その後をついて行く。

「荷物になるけど、非常食とか飲み物とか」

僕は特に思い付かず、エスカレーターで背後のステップに乗った二人を見た。駿は、「必要になれば、自分達で調達するよ」と代わりに答える。確かに、別に特別な場所へ行く訳じゃない。現地状況によるものの、人が居なくてもセルフレジと例のICカードで決済も問題ないだろう。

話を切り出した織林刑事は、ちよつと寂しそうな表情で頷いた。

「じゃあ、会議室の水だけ何本か入れて行きますよ」

僕は会議室の片隅に、ペットボトルが並べられていたのを思い出し、「アレって、もらっていいんですよね？」と、織林刑事に確かめた。彼女は表情を明るくして、「ええ、何本でも持つて行つて」と言った。

昼食の間に雨は上がり、だんだん雲も切れてきた。気温がグッと上がることを思えば、水分は多少持つて行つても無駄にはなるまい。

会議室に戻るなり、プロテクター類を身につける前に、追加の荷物をバックパックに詰め直す。水分はとりあえず一人一本、入れておこう。忘れ物がないか再度確かめ、準備が先に整った二人に手伝ってもらつて、武器も含めた装備を整えた。

時刻は、午後一時過ぎ。最短でミッションを終えれば、夕方までには教会へ戻つてこられる。無事に終わらせることができれば、今夜は自宅で入浴というものも出来るかも。試験前の自宅学習も、必死にキャッチアップしなくては。

勉強やテストのことを思うときが少々重くなるが、気持ちを切り替えて、出発

しなくては。

「ま、気楽にな。ヤツには、公然猥褻の罪状も追加だと行っておいでくれ」

米利刑事は、最後の最後まで軽口を叩き、本心かジョークか分からない。荷物を背負って会議室を出るタイミングで、大勢の大人が僕らに敬礼してくれた。その姿と心地よい空調に後ろ髪を引かれながら、蒸し暑いホテルの外に出た。

テレビ局の横を北上し、一際大きな交差点に出た。

二時間弱の中和剤散布が効果を発揮しているらしく、この辺りは比較的落ち着いているようだ。時折歩道を行き交う自転車に気をつけながら、コスプレめいた格好で街中を歩いている。

地図によれば、ここから更に北上すると、昨日も訪れたハンバーガーチェーンまであるらしい。

「どうする？」

左手に「東西線」と案内が出ている場所で、駿が僕に訊いた。

「もう一本外から行くか、このまま近付くか」

大きな通りに沿って西へ進めば、視界は良好、十分に開けていて戦える気もする。僕の判断を待つ間に、桂花さんは双眼鏡を取り出して、向こうの駅をチェックする。彼女は双眼鏡を覗いたまま、「とりあえずこのまま、左手に折れた方がいいかな？」と言った。

「駅前に、面倒臭そうな幟が立ってる」

彼女はそう言いながら、双眼鏡を自分のバックパックにしまった。ドラッグによる異様な興奮状態、扇動しやすい状態でなくなったとはいえ、例の対立が完全になくなった訳ではない。

今の格好でそこへ突っ込んで面倒事が起きるとは思えないが、無用な消耗は避けるべきか。とりあえず、西へ向かおう。一旦地図をバックパックに仕舞い、二人を先導するべく前に出た。

第三三話

新福島駅の上を通りながら、野田の方へ向かって歩く。この辺りも平日中のいつもの賑わい、交通量はよく分からないが、幅の広い歩道を行き交う人はあまり見かけない。もう少し行けば、あみだ池筋と交差する。そこでさらに左に曲がれば、さつきまでいた国際会議場へ抜けられる。

雨上がりで気温が上がり、蒸し風呂めいた気候の中、それほど風通しの良くない衣類を身につけ、重たいバックパックを背負い、黙々と歩いていると、それなりに気力も体力も消耗してくる。まだまだ歩き始めたばかりだが、ここから例のテーマパークまで、多少の回り道もしながら辿り着くことを思うと、気が滅入りそうになる。

授業も部活もなく、体力が有り余っているらしい駿は、機嫌良さそうに周囲を観察しながら歩いている。

「修学旅行も、こんな感じか？」

彼は、静かに歩く僕らを見ながら、正面に背中を向けてゆつくり歩く。真面目に黙々と歩くのは性に合わないのだろう。ただ、グループ行動の他のメンツが揃っていても、そんなにワイワイやるようなイメージもない。

「テッチャンが居ても、こんなもんじゃない？」

彼や稲荷さん、嶋田さんが加わっても、男子は男子、女子は女子で付かず離れずになりそうだ。そのうち駿が悪ふざけをして、稲荷さんが嗜める。嶋田さんはシニカルにそれを観察して、テッチャンもテッチャンで、我関せずとマイペースに、彼の不思議な手綱捌きで次の目的地へ難なく辿り着く。まとまりがあるようでない、変なグループになった気がする。

「嶋田も、あの二人も、あそこにいるんだよな」

駿はボソッと呟いた。

「お前は、どんな顔して会う？」

彼の素朴な疑問に、僕は答えが出なかった。例のドラッグ、薬物がどこまで影響を与えていたのか、今もよく分からない。昨日目撃したアレが彼らの本心だとするなら、それまでのような付き合いが、今後もできるとは思えない。

「次は、どっちに行くの？」

僕がぼんやりしていると、桂花さんが声をかけてきた。顔を上げると、目の前に鉄道の高架が見えてきた。このまま通りに沿っていけば私鉄の野田駅、高架に沿って左へ折れれば環状線の野田駅に辿り着く。

福島駅での状況を鑑みるなら、駅前というのは不用意に近付かない方がいい気もする。一旦高架に沿って曲がり、税務署の横を通るルートを選ぶのか。高速度路をくぐつてから、その先にある地下鉄の駅をちよつとだけ迂回する道にしよう。近くにある区役所の辺りまで北上して、北港通というので西へ向かつてもいい。

高架とぶつかる手前の交差点で、左に曲がった。ちよつと信号が多くてややこしい上に日陰もないけど、渡れるうちに道路を横断して向こう側へ移る。これで、高架に沿って歩く格好になる。

ここからは、細かく地図を見ながら細かい道をジリジリと北上する。さつきまでの大きな通りではあまり人を見かけなかったのに、徐々に細い道へなるにつれ、歩行者も自転車も増えていくような気がする。住宅街や街中にふさわしくない格好で歩いているのを、ジロジロと見られる機会も増えてきた。

「そう言えば、お前は何で昨日、あそこにいたんだ？」

相当数の授業がリモートになったとは言え、こんな時間に高校生が表をうろついているのが気に食わない、と言った様子のおじさん、おばさんの顔を何度か見送ったところで、駿が桂花さんに言った。

「あそこの先生が、お父さんの知り合いで」

彼女が言った先生とは、先日お邪魔した資料室の持ち主だろうか。確か、薬学関係の教員だったっけ。

「昔から憧れの人というか、師匠みたいな人でさ。家で勉強するぐらいなら、押しかけちゃえと思って」

押しかけちゃえで、大学へ自由に出入りできるのも羨ましい。お父さん、身内が職員だから、余計にやりやすいのか。「憧れの人」という表現は若干気になるが、どういう経緯でそんな環境、境遇を手に入れたのかも、そのうちゆっくり聞いてみたい。

「師匠ってことは、進路ももうそっちに？」

「志望校は変えるかもしれないけど、分野的にはそっちかな」

駿は気の抜けた声で「へー」と言った。

「ちゃんと考えてるんだな」

「越智くんだって、野球じゃないの？」

「プロは無理だな。大学に入れたら、先を考えるよ」

駿はそう言いながら一瞬足を止め、何も持たずにエアードゥックリバットを振った。実物を握らずに振ったのがしっくり来なかったのか、二、三日部活で練習できておらず、感覚を失いつつあるからなのか、その場で首を傾げた。

「甲斐くんは？」

桂花さんの質問がこちらに向いた。興味津々な顔には申し訳ないけど、コレといつた目標は特にない。

「やっぱり、作家さん？」

彼女は空中で、ペンを握って何かを書くような仕草をする。

「いつつ、なんか書いてるじゃない」

「ああ、アレ」

教室でも手持ち無沙汰な時にメモ帳へペンを走らせている、ただの現実逃避。そんなところまで見られていたとは、嬉しいような恥ずかしいような、複雑な心境だ。あんなものを多少推敲して磨きをかけたところで、箸にも棒にもかからない。

「作家なんか、僕には無理だよ。才能も何もないのは自分でも分かってる」

物書きに必要そうな面白さもないし、詩歌のセンスもない。今だって、気の利いた言葉のやり取りすら出来ない。

「どこにでもある、ただのつまらない高校生さ」

「俺らはそのツマライ奴に付き合って、汗かいてるんだけど」

駿は僕の顔をチラリと見るなり、彼に渡したペットボトルの水をガブガブ飲んだ。

「また、そんなに虐めないの」

桂花さんも、高速道路の高架をくぐる辺りで水を取り出し、一口飲む。信号を渡り切った先にある横丁というのを通り抜ければ、福島区民センターや区役所といった建物にぶつかる。ちょっと右手に行けば駅前だが、人の行き来が賑やかなだけで、変な人ばかりや怪しい人影も特にない。

それなりに遠回りをしたが、時刻はまだ午後二時から二時半といたところ。無理のない速度で歩いてこのペースなら、そんなに悪くない。どれだけ遅くなくても、午後四時までには着きそうさ。

地下鉄の真上に差し掛かる辺りで、駿が急に周囲を気にし始めた。どうやら、

水を飲みすぎたせいでトイレにでも行きたいらしい。延々と歩き続けて一時間超。休憩を入れてもいいかもしれない。

北港通に出て道路を渡れば、向こう側にコンビニがある。そこがダメでも、少し歩けば区役所だ。流石に区役所なら借りられるだろう。変な格好でも大丈夫であること、警察から話を通っていることを願い、ひたすら歩くだけ。

「どうだ、間に合いそうか？」

ちよつとずつ口数が減ってきた駿に声を掛けると、彼は余裕を失いながらも、頷いた。コンビニで断られた時は顔が青くなっていたが、区役所なら多分、何とかなる。彼のためにトイレのことを気にしていると、自分も段々行きたくなくなった。

微妙に気を紛らわせながら、やや早歩きで区役所へ向かっていると、通りの向こう、公園の方から妙な声が聞こえてきた。ややこしい連中は、駅前だけでなく、こういうところにもいるらしい。

極力気にしないよう、向こうからも気付かれないように、区役所へ入った。受付で事情を説明し、警察からの要請も間に合っていたらしく、トイレは滞りなく借りられた。桂花さんも行けるうちに行っておくと、僕らと同じタイミングでトイレに入った。

先に出た僕らは、待合の椅子を借りて軽い休憩を取る。空調が効いているのも非常にありがたい。桂花さんにも椅子をすすめ、十分ほど休んでいくことにした。ジツとそこで冷気に当たったり、足を休めたりしていると、外から聞きたくもないシユプレヒコールが響いてくる。どうやら段々、こちらへ近づいてきているようだ。さっきの公園にいた連中が、デモ行進でもしているのだろうか。

区役所の前で立ち止まったらしく、「機械の横暴を許すな」や「機械は道具に戻れ」だの、そちら側の主張を浴びせられている。

初出 令和四年一月一〇日 noteにて公開

第三四話

今日までだった漫画をTSUTAYAで返却。借りて帰りがかった目当ての漫画は貸し出し中で、空振りの心をなんとかしようと斜め向かいのミスドに足を踏み入れた。窓に貼られた少々ぼつちやりなピカチュウ、フシギダネのシールが私も欲しいんだけど、どこで手に入るかは分からない。とりあえず、毎年のカレンダーで我慢する。

「あれ、小野寺さん」

夕方の遅い時間、ショーケースに欠品もチラホラ見えるレジに並んでいると、隣の席から聞き覚えのある声がかげられた。ちよつぴりよそ行きっぽい浪川瑞希さんと、随分ホクホクした表情の哲朗さんが座っていた。仮面ライダーに似て、見慣れないヒーローグッズっぽいものも、その隣に鎮座している。

「どうも」と軽く挨拶し、前が開いた列を詰めた。浪川さんが物珍しそうに、私の頭から爪先まで眺めている。こちらは知り合いに会うとはあまり想定していない、着古したユニクロ一式。ヒールのない靴、手抜き化粧も相まって、ちんちくりん加減、幼さが加速している。

彼女の視線を気にしていると、レジの向こうから「お次の方どうぞ」と声がかかった。ポンディングとオールドファッション、期間限定の新作も少しお得になる組み合わせで詰めてもらう。

会計を済ませ、「じゃあ、また」とお二人に挨拶して店を出た。外から二人を見ると、彼はとても楽しそうに話し込んでいる。非常に、眩しい。逃げるようにTSUTAYAの隣で停めた自転車をピックアップして、そのまま阪急の駅の方へ向かう。

陽が落ちるとまだまだ肌寒い。自転車には跨らず、荷物をカゴに入れて押し歩く。商店街を抜け、茨木市駅の一階を通ってバスロータリーに出る。駅前の横断歩道を渡った少し広いところで、自転車を跨った。前後の安全を確認して、ゆっくりと市役所の方へ向けて走り出す。

私と同じように自転車のカゴにスーパリーの袋を入れた女性たちが、前から後ろから通り抜け、歩道の上をまばらに埋めている歩行者の間を上手に縫っていく。猛

烈な勢い鈴を鳴らして駆け抜けていくオバさんたちもチラホラ見える。

夜の飲食店は今日はほぼお休み。昨日までは飲み歩いてた人たちも、今日は大人しく家で飲むのだろう。さっきのイオンで、大きなボトルを買って帰ったオジさんもいたなく。あのウイスキーはどう飲んだろう、と目の前に気をつけながらも想像が捗る。

綺麗になった茨木神社、立派な茨木童子の前を通り、交差点を二階渡った。市役所の前を南へ進み、業務スパーの混雑ぶりを眺めて右に曲がる。カレーの匂いに心惹かれながら、茨木駅の方へ自転車を進める。

駅前の駐輪場で一回停めなれないと思っていたら、見覚えのある女性が駅へ向かって歩いてる。後ろに気をつけながら自転車を脇に寄せ、サドルから降りた。自転車を押して、女性の隣までかけていく。自転車の音で気がついた女性、郁美さんがこちらに振り向いた。

「あら、ルミちゃん」

「もう帰るんですか？」

郁美さんは自転車のカゴを見て、「あら、差し入れ？」と言った。私が頷くと彼女は「ごめんなさいね。明日も早くつて」と答えた。

「また今度、ゆつくりお茶しましょ」

郁美さんは「お母さんによろしくね」と言い残し、改札へ向かうエスカレーターに乗り込んだ。彼女の背中をゆつくり見送りながら、カゴの中のドーナッツをどうするか、思考を巡らせた。

初出 令和四年一月一日 noteにて公開

第三五話

彼は積み上げられた荷物に身を隠しながら、通路の奥を覗いた。僕も、彼と入れ替わりに状況を確認する。場内の見回っばいロボットが、周りに気を配りながらゆつくり歩いている。発見されているとは思えないが、ジリジリと近付いて来ているような気がする。

見回りロボットは時々立ち止まってその場にジッと佇み、しばらくすると再び動き始める。駿はその動きを見て何かに気がついたのか、周囲を見回した。天井に備え付けられた監視カメラを見上げ、「そうか、アレか」と小声で言った。

「どうする？」

僕が小声で彼に訊ねると、彼は僕の拳銃を握りしめ、ゆつくり自分の手の中に納めた。

「俺が撃つたら、場外を目指して走れ。全力でだ」

状況や段取りを今ひとつ把握していない僕を尻目に、彼は頭上の監視カメラに狙いを定め、引き金を引いた。一発目は外側の防護ガラスを破壊できたが、レンズを破壊するには二発目が必要だった。二度の銃声が大きなフロアに響き渡る。

「ほら、走って」

桂花さんに背中を押され、僕はようやく足を動かした。彼女に腕を引かれながら、市場の外へ出て、そのまま敷地に隣接する道路まで出た。目の前には川が流れている。中央市場の外に出て走る速度を落としていると、後からやって来た駿に追い抜かれ、すれ違い様に背中を叩かれた。

「気を抜くな。まだ追いつかれるぞ」

彼は前を走っていた桂花さんも追い越して、また野生の勘で目に付く角という角を適当に曲がっていく。西棟の前を抜け、少しずつ西九条の方へ近付いていく。両側に木々が植えられている、細く曲がりくねった道に出た。通りの脇にある長椅子タイプのベンチや、植物の屋根ができている日陰棚、脇に停められた自転車 avoidance ながら、しばらく道なりに走っていると、段々キツくなってきた。流石に桂花さんもしんどいらしく、走る速度が落ちていく。早歩き程度に速度を落とし、地図をサッと見ると、すぐそこにコンビニがあるらしい。

先頭を走っていた駿も、いつの間にかそれを見つけたらしく、曲がり角のところで足踏みしながら、僕らの方を見て、そちらを指差していた。何とか追いついて、彼が持ったままの拳銃を返してもらった。

「無理に、事を荒立てる必要ないんじゃないか」

僕らはコンビニの駐車場の端っことで、注意書きが添えられているフェンス等に身を持たせながら、呼吸を整えた。カバンから水を取り出し、一気に飲む。さつきは給水する余裕も取れなかった分、水を得た身体からどんどん汗が吹き出してくる。

「やり過ぎてたら、後から怒られたらいいさ」

駿は、僕の小言も特に気にならないらしく、あつけらかんとした様子で笑みを浮かべていた。彼は呼吸一つ見出すことなく、僕らに合わせて少量の水分補給を行った。

「しかし、中々厄介だね。人や生活の中に溶け込む畏に、監視カメラとの連携や通信の逆探知とは」

駿の言葉に、ちよつと驚いた。どちらかという脳筋タイプ、野生児タイプだと思っていたのに、そこまで気がついていたとは。

「でも、あそこで一台壊したって」

「——ああ、アレは注意を引く為にならね」

駿は桂花さんの言葉を途中で遮り、自分がやったことを堂々と解説する。一瞬の時間稼ぎと、自分からおとりを担うためにやった行為なんだとか。そういえばあの時駿は、わざと目立つように通路へ躍り出て、僕らとは少し違う方向へ走っていた。

それでもすぐに追いつき、足の遅い僕を追い越していく彼のパフォーマンスは、やはり頼りになる。僕みたいな運動音痴より、彼や桂花さんの方がこの手のミッションには向いている。

「うわ、マズいな。もう三時半じゃん」

駿はケータイの時計を見て言った。僕はそれを聞き、再び地図を取り出して先ほど休憩を取った区役所と、現在の位置を確かめた。地図上ではほぼ目と鼻の先。一時間ほど無駄に浪費して、余計な遠回りをしただけになっている。あそこで事を荒立てずにそのまま進んでいけば、今頃隣の区には入っていた。

ここでもう少しのんびりしていたいし、可能ならコンビニの中で涼んで行きたいが、区役所からそれほど離れていないということは、米利刑事達にお願いはし

たものの、長居は禁物ということでもある。とりあえず、目の前に見える鉄道の高架をくぐってしまおう。

「大きな道路と駅前を避けて、ココを行こう」

桂花さんと地図を見ながら、次の方針を決める。地図を指でなぞり、北港通の一本南にかかっている橋を指差した。桂花さんは「朝日橋ね。了解」と言った。

例のテーマパークへ辿り着くには、この先に出てくる六軒家川を渡る必要がある。大きく北に迂回するルートなら川を避けられるが、無駄な迂回は十分やった。朝日橋より南にも何本か橋はあるが、もう一本南の橋は流石にちよつと細く、十分な逃げ場がなさそうだ。

先の騒動があつた場所から程々に距離を取り、適度に雲隠れしながら先を進むなら、今のところはこの道のりが無難に思う。駿にも同意を取り、大まかな進路を決定した。あとは実際に歩きながら、朝日橋へ辿り着く事を考えたい。

「よし、行こう」

地図をしまい、コンビニの前から交差点を二回渡る。高架をくぐってすぐの角を左に曲がった。高架と住宅の間の細い道を道なりに西へ進む。この路線の高架沿いは、どこもこんな感じなのだろうか。ささやかなデジャブを感じながら、狭い路上に駐車された配送業者のトラックを避ける。

それなりに背が高いマンションや、年季の入ったアパート、デザイン性の高い戸建に混じり、時々何の業種がよく分からない会社や工場、法律事務所みたいな看板も目につく。

道が湾曲した辺りから見えなくなった高架が、久々に目の前に見えてきた。このまま道なりに行かず、右手の道に入る。さつきより時代を感じる背の低い民家が両脇に並び、先程の道より両サイドの建物から来る圧迫感が少々強い。途中の丁字路へ向けて、段々道幅も狭くなってくる。

「ここで一回曲がる？」

一方通行を逆走する形になっていたところで、桂花さんが僕に提案してきた。僕はその意見に賛同し、丁字路で南に折れた。次に出て来た十字路をさらに右へ曲がれば、一方通行を逆走せずに済む。進行方向に、立派な病院が見えた。

もうすぐ病院というところで道が途切れ、再び丁字路に出た。交通量を考えると、とりあえずそのまま渡るといふのは厳しそうだ。

「右から行くか、左から行くか。信号はどっちも似たようなもんだけど」

今度は駿が左右を見ながら言った。確かにどちらの信号、横断歩道もそれほど

離れてはいない。右の方が若干近そうだ。一方通行の逆走が嫌で離れたのに、さっきの道に復帰する格好になった。渡った先には幸い、歩きやすそうな歩道があった。

途中で休憩をとったコンビニの駐車場からここまでは、非常に順調だ。無駄に右に左に曲がったり、小さく迂回する要素はあっても、大きなトラブルもなく目標地点の川、橋がもう間もなく見えてくる。

先ほど見えた大きな病院と、道路を挟んで隣接する介護施設の間を進むと、また高架が見えてきた。進路を確認したときに見た地図によると、今度のアレは私鉄の線路らしい。アレをくぐれば、すぐに朝日橋だ。

線路を右手に見ながら、交差点を渡る。目の前の川にかかった橋に、ようやく辿り着いた。ここを渡れば、目的地までの要所がかなり減る。このまま道なりに進んで、北港通へ戻ってもいい。

千鳥橋の駅、交差点が見えてきた。これで、北港通に交差した。この道に沿って西へ進めば、此花区役所、警察署に辿り着く。

「なんか、順調すぎて逆に怖いな」

駿がボソツと呟いた。桂花さんも、「私も」と頷いた。

「この先に行くと、確か、高速道路にぶつかるとよな」

駿に尋ねられ、僕はカバンから地図を取り出して確かめた。北港通とほぼ直交する高速道路が確かに書かれている。この向こう、さらに海側を走る高速道路もあり、北港通と二本の路線、南に走る鉄道の間、それも向こう側の端の方に目的地のテーマパークがある。

「コレを超えると、大分近いな」

駿は地図を見ながらそう言うが、近いと言ってもまだ最短で徒歩三十分以上ある。

「ココから本格的なゾンビゲームになるかもな」

駿はニタニタと豪快に笑った。

会議室で見せられた例の映像がどこから撮られたものかはまだ分からないが、近付けば近づくほど、例の兵器や実験動物と本格的に遭遇する確率は上がる。今まではかなり周到に練られた罠だったけど、なりふり構わず量で攻められる可能性もある。

「避難もある程度進んでるんだろ？」

「だったら、面倒なことはあんまり考えなくてもいいね」

駿と桂花さんは顔を見合わせ、嬉しそうに笑った。一般市民に紛れた相手を見極める必要もなければ、被害や良心の呵責を気にする必要もなくなる。思いつきで戦える、遠慮なく身体を動かせるのが非常に楽しいようだ。

彼らのように楽しむ心の余裕は全くないが、気を引き締めねばという心境にはなる。気持ちを落ち着かせるべく長く息を吐き、一足先に歩き始めた二人の背中を追いかけた。

初出 令和四年一月二日 noteにて公開

第三六話

高速道路の高架がはつきり見えて来た。双眼鏡でそちらの様子を伺うと、格闘技のリングのようなロープが張り巡らされ、さらにその奥で、肌の色が悪そうな「いわゆるゾンビ」みたいな人物や、得体の知れない実験動物が群れを成して待機している。

上空には、一定のルートを飛行するドローンと、センサーでこちらを認識していそうな突撃用っぽいドローンがいくつも見える。物理的な壁が空中にまで伸びているようには思えないが、ロープを中継しているポールを超えて近付いてくることはないらしい。

「警察署って、あの奥だよな」

駿も次の交差点の向こうを見ていた。

「あそこで状況整理してから近付きたかったけど、仕方ないか」

彼は両肩と首をゆっくり回し、その場で屈伸やらアキレス腱伸ばしやらを、入念にやっている。桂花さんはここまで三つに分割して運んできた例の棒を、一つに繋ぎ合わせた。連結部分が外れないか、僕らから少し離れたところで、その棒をゆっくり回す。長めの物干し竿といった様子で、重さや取り回しにも不安はないといった表情を浮かべている。

区切りのロープは道路に沿って、南北に伸びている。恐らく北は淀川まで、南は安治川の辺りまで続いているのだろう。迂回して他の道から進入したところで、向こうのスタンバイ具合は変わりそうにない。

「で、どう攻める？」

準備運動を終えた駿は、警棒をしっかりと握ってこちらを見た。その目つきが、すぐに鋭くなる。

「じっくり考えている暇はなさそうだな」

彼の言葉に後ろを振り返ると、衣服が乱れたままゆっくり近付いてくる人影が幾つか見えた。北や南に視線を向けると、同じように生ける屍めいた人型の何かが僕らの方へ近付いてくる。どうやら、一般人に紛れていた厄介な連中がこちらに集結しつつあるようだ。

「此花区役所から先は、市民の避難は終わってるんですね？」

僕はインカムのマイクを引き寄せて言った。即座に「ああ、大丈夫だ。やりた
い邦題、暴れてくれ」と米利刑事の返事が返ってきた。僕が駿、桂花さんに視線
をやると、二人とも何も言わず、頷いた。

僕は拳銃を引き抜き、セーフティを外した。今目視できる範囲でも、相当な数
の怪物が見える。これを全て倒せるような弾薬、体力は多分ない。駿の警棒も、
桂花さんの長物も、きつとどこかでダメになる。相手の布陣も今後の補給も読め
ない状況で、無策に飛び込むというのは避けたい。

「上のは、頼んだ」

駿は警棒を振りかざし、一直線に敵陣へ突っ込んで行った。早速、上空のド
ローンが彼に銃口を向けながら高度を落としてくる。

「ほら、援護しなきゃ」

桂花さんはボサつとしている僕の背中を軽く叩き、駿に続いてロープの向こう
へ走っていく。どうしてこう、じっくり考えさせてくれないのだろう。湧き上が
ってきたイライラも込めて、駿を狙うドローンへ向けて引き金を引く。背後のゾ
ンビに囲まれないよう、僕も走りながらロープの方へ向かう。動きながらだと手
元がブレて仕方ない。

ロープの目の前にいる四足歩行の実験動物、二足歩行のミノタウロスみたいな
大きな人型の怪物も、無駄弾を承知で何発か打ち込んだ。駿、桂花さんが中へ入
る前に、厄介そうな障害は除去できたらいい。先に展開している彼らは、体の一
部が欠損している人型や、逆に首が増えている犬っぽい実験体を、手当たり次第
に打ち倒している。僕は彼らが手を出しにくそうな空中のドローンやカメラを優
先的に排除して、彼らとの距離を縮める。巡回型や、体当たり以外の攻撃手段が
なさそうなものは一通り撃ち落とせたので、拳銃は一旦しまつて、僕も白兵戦に
切り替えた。

すぐそばの通路から飛び出して来たゾンビを反射的に打ち倒したが、この距離
感で怖がることなく、嬉々として戦っている彼らは凄い。直接殴打した感覚も、
なんとも言い難い手応えだった。

僕がやっと一体倒す間に、桂花さんは大体三体前後、駿に至っては相手の大小
を問わずに次から次へと倒していく。いつの間にか、彼は警棒を放り捨て、自ら
の拳や脚を駆使して格闘戦に移行している。桂花さんの長物も、僕の警棒も、も
う数回の打撃でダメになりそうだ。

駿の背後を狙うゾンビへ、咄嗟に銃撃を浴びせる。こちらに体当たりを仕掛けて来たドローンへ銃口を向け、引き金を引くものの弾は出ない。咄嗟に警棒を打ち下ろし、目の前に迫ったそれを破壊した。

「駿っ」

僕は彼に向かって叫んだ。彼が振り向いたところで、警察署の建物を顎で示した。彼は目の前の敵を撃ち倒してから頷いた。最後の一発で得物がダメになった桂花さんの腕を引き、駿より先に警察署の前に来た。残念ながら入り口も窓も施錠されていて、まともに入る方法はない。僕は近くに落ちていた破壊済みのドローンを拾い上げ、自動ドア横の大きな窓に叩きつけた。ドローンは一回でひしゃげるが、窓には小さなヒビも入らない。

「何やってんだ」

こちらに駆けつけた駿が、自動ドアの隙間に指を入れて強引に開ける。奥に見えた分厚そうな防犯シャッターも、彼は力任せに打ち破った。

「ほら、早く」

駿に促され、ようやく警察署の中へ入る。窓という窓にブラインドが降ろされ、内部は薄暗かった。近くで見ると小さな傷をいくつか負っている駿は、肩で息をしながら「それで？」と僕を見て言った。

「屋上からの状況把握と、弾薬、武器の調達かな」

「じゃあ、屋上は私が」

「よし、行こう」

スツと名乗り出た桂花さんに、駿は彼女の装備していた盾を借り、二人で屋上へ向かった。署内の物色、資材調達は僕が一人でやるらしい。手分けすべきなのは良く分かるし、中の安全性も考慮すると二人で動いた方がいいのも分かるが、それならこちらも二人以上で動きたい。守るなら彼女にすべきという判断も正しいと思うし、腹を括って物色に専念しよう。

まずは拳銃保管庫と警棒の予備を見つけない。その他に活用できそうなものがないか、じっくり考えながら捜索にあたる。そう、例えば消火器。鈍器にもなるし、煙幕的な使い方もできる。消火器が鈍器になるなら、地図上で見えた中学校や小学校にありそうな金属バットも武器にできる。駿の今の腕力なら、普通のボールだつて投擲武器になり得るかもしれない。

インカムで米利刑事と連携を取りながら、拳銃保管庫を見つける。念のため、彼に確認をとってから銃と弾薬を回収する。近くの倉庫に、備品として保管され

ている警棒も発見した。これもザッと何本か、バックパックにザッと詰め込む。死角が多く、必死に気を立てて周囲を探りながら歩を進め、一旦ロビーに向かった。今のところ、妙な相手には遭遇せずに済んでいる。このまま何も起こさずに外へ出たい。

駿と桂花さんの二人を待っていると、背後のエレベーターが降りて来た。不思議なことに、二台がほぼ同時に降りてきている。奥の方が若干早い。二人で行ったのに、バラバラに戻って来ているのだろうか。

インカムに通信が入る。「スマン、ミスった」と駿の一方的な声が耳に飛び込む。意味も分からず、到着音が聞こえたエレベーターの方を見た。そこには、無理やり機械を取り付けられたゾンビが迫っていた。僕は慌てて近くの消化器を持ち上げ、そのまま振りかぶって叩きつける。上手く顔にぶち当たり、鈍い音が聞こえた。ゾンビが足元に倒れると、その向こうから駿と桂花さんが現れた。今の情けない悲鳴も聞こえていたらしく、駿の意地悪そうな笑みが非常に辛い。

「何だよ、今の」

僕は慌てて取り繕いながら、彼らに文句をつけた。駿は、「悪い悪い」と頭を触る。

「エレベーターで降りるつもりが、先にそいつが乗っちゃって」

彼は足元のそれを指しながら言う。

「慌てて追いかけたんだけどね」

桂花さんが、駿をフォロースする。慌てようと何しようと、エレベーターで追いかけたところで、同じエレベーターなら追いつくはずもない。駿は話題を切り替えるべく、「それで」と切り出した。

「上から見える範囲で確かめたけど、統制の取れた陣形みたいなのは分からなかった」

「個々でバラバラに点在しているみたい。それに、テーマパーク前には巨大ロボットみたいな自律兵器も二つぐらいあるみたいで、アレは勢いだけじゃ無理かも」

前に映像で見た奴か。中央市場にも巨大なロボットがあつたが、アレより巨大で武装もしていた。銃と弾薬を補充したところで、突破できるようなモノには思えない。

第三七話

「一体ぐらいなら、リミッター解除って奴で何とかなりそうな気がするけど、それでも近付くまでが問題だよなあ……」

駿がボソツと呟いた。

もちろん、その二体を相手にするのも問題ではあるが、ここからここまでどうやって辿り着くのかも、まだ解決していない。ただ、ここで悩んだところで答えも出ないし、夕暮れという一つのタイムリミットも差し迫りつつある。日が暮れてからの突入はさらに難しそうだ。

「なりふり構わず、あるものを使うとか」

桂花さんは、足元で転がっている消火器を見た。この先の道中でも、使えそうな武器はまだありそうだ。ただ、地図にも点在するガソリンスタンドは避けた方が良さそうだ。特に手前のガソリンスタンドは、近くに化学工場もある。できるだけ刺激をしないように通り過ぎた方が良さそうだ。

駿は不意に、地図の一点を指差した。

「ここ、向こうは貨物の駅なんだ」

以前はテーマパークの名前がついていたらしい最寄駅と、南に流れる安治川の間に貨物の駅になっている。桂花さんは駿のその言葉に、「それで？」と続きを促した。

「ここにも一台ぐらい、重機がありそうじゃない？」

駿はケータイで地図を立ち上げ、該当箇所をタップした。いつ撮影されたものかは分からないが、現地の写真が何枚か紐付けされている。中央市場で見たような搬入搬出用の特殊重機、作業用ロボットっぽいものが写っていた。

正面からぶつかり合って勝てるとは思えないが、何も無いよりはマシか。

「ここまで行って、こう行く？」

桂花さんは、駿の示した地点から、線路を横切り、駅前から旧門前通りを抜けてテーマパークへ至るルートをなぞった。

「相手が相手だもんな。それ以外は認めない、とか言われそうだな」

駿が横から彼女に同意した。だったら素直に電車を動かしてくれれば良いのに、

変なところで面倒臭い、相変わらず独りよがりな三流脚本家だ。見えてる誘いには極力乗つからないと、かえって面倒臭い。

「じゃあ、決まりだ」

僕は地図をしまい、代わりに調達してきた銃身の短いリボルバーと、銃弾を二人に渡す。駿は「俺はこつちでいい」と銃を受け取らず、警棒を数本自分のバックパックに詰め直した。

「背後と援護は頼んだぜ？」

駿は僕がそれに答える前に、自分がぶち破った入り口から外へ出て行った。桂花さんは「やれやれ」と声に出している、盾を構え直して警棒を握りしめる。僕は、彼女と共に周囲を警戒しながら外に出た。

北港通を真っ直ぐ西へ進み、道中のコンビニの前に立っている旗や中の消火器、カラーボールと言ったものも駆使しながら敵を撃ち倒し、バス停の先にある交差点で線路や川のある方へ曲がった。北港通より細い道ではあるが、片方に神社があるからか、高い建物はほとんどない。逃げ場のないところで頭上から襲われることを危惧していたが、これならさつさと細い道を走り回るといふ選択肢を選んでも良かったかもしれない。

最も、他の道は曲がり角や逃げ道も少なく、囲まればあつという間に終わってしまふ恐れもあつた。倒壊している木や電柱、千切れて地を這う電線にも気をつけながら、時にはそれらも利用して、迫り来る実験動物やゾンビ、小型の自律ロボット等をやっつけた。

動きが読みにくい四足歩行の犬や猫のようなキメラも、盾や銃を駆使して何とか倒し、パワーのありそうな大型の怪物に関しては、駿の素早い近接戦闘が非常に有効だった。

最前線で戦う駿はそれなりに傷も負っているが、アドレナリンが出まくっているのか、戦闘用のパーツで身体を構成しているからか、運動量はあまり落ちていない。流星に呼吸は上がっているようだが、メンタルに響いている気配もなかった。

目の前に線路が見えて来たので、右へ曲がる。線路に沿って西へ進み、一つ手前の駅前まで来た。大阪市内の駅にしては、周りにあまり物がない駅だ。立派な郵便局が隣接しているぐらいで、あとは駅の向こうに貨物のコンテナが並ぶぐらい。

普通に歩けばせいぜい二〇分ちよつとのところを、戦いながら、極力安全を確保しながら進む分余計な時間を取られ、倍ぐらいの時間がかかっていた。

「先に、そのコンビニでちよつと休憩しよう」

戦いつばなしの駿が、打ち倒した敵の体液を拭いながら、声を弾ませて言った。桂花さんも両肩で息を切らし、「賛成」と言う。余計に時間を使い過ぎているとは思うが、この辺りで水分補給ぐらいしておかないと、倒れてしまうかもしれない。ゆつくり休憩する場所も、ここが最後の可能性もある。周囲に厄介な敵がいなことを確認して、無人のコンビニに入った。空調は落とされているが、人の出入りが少なかったからか、まだ冷気が残っている。暑い中走り回って来た身には、それだけでもありがたい。

駿は売り場のドリンクを選び、僕に手渡した。そのまま彼はトイレに向かった。僕と桂花さんもドリンクを選び、無人のセルフレジで決済した。イトインコーナーで駿を待ちながら、冷たいドリンクで喉を潤す。

トイレから戻って来た駿は、水道で汚れも落としていた。彼と入れ替わる形で、桂花さんがトイレに向かった。

「何とか五時には着けそうだな」

駿はよく冷えた炭酸水を開け、黄色いエナジードリンクを流し込んだ。僕は目の前に見える貨物駅を眺めながら、開けたばかりのお茶に口をつけた。

当初の予定ではひたすら歩き通しても一時間程度、せいぜい二時間もあれば余裕だったのに、あつという間に夕方だ。できれば、明るいうちに奴の顔を拝みたい。

駿とぼーつとしていた間に、桂花さんが戻ってきた。今度は入れ替わりに僕がトイレに入った。用を足し、イトインに戻って少々ボーツとしてから、「さ、行くか」と駿の声をきっかけに立ち上がった。店の外に出て、どこから貨物置き場へ入るか、左右を見て考える。

「もう一駅歩いて、普通に入るか」

駿は線路の向こうを指した。地図を取り出して確かめると、駅の向こう側に車両の侵入経路が書かれている。すぐその駅に入って、ホームから下に降りて線路を踏み越えるのも余計な体力を使うし、フェンスを乗り越えて無理に頑張る必要もない。

ここから見る限り、線路沿いにはややこしい相手は見えない。真っ直ぐ行っても、そんなに激しい戦闘もなさそうだ。駿の提案に乗り、見通しのいい道をその

まま西へ向かう。目の前に見えて来た交差点で、高架の方に曲がった。目の前には道路に沿ってズラーツとフェンスが張られている。

「これぐらいなら、超えられそうな気もするけどな」

駿は、ガードレールの向こうにあるフェンスを見て言った。フェンスの手前は歩道と言うより、ガードレールを設置するための幅の細い縁石。背の低い植え込みがあつて、貨物用の線路とコンテナ、それを積み下ろしする大きなフォークリフトもいくつも見えた。次の荷を待つトレーラーも、何台か並んでいる。

事務所っぽい小さな建屋の隣に、随分と背の高いガレージみたいなものも見えた。我々が狙う物は、そこに格納されているのだろう。乗り捨てられているフォークリフトもかなり使えそうだが、さつき写真で見たロボット然とした重機を動かせるのなら、そっちの方が良い。

あれかな、これかなと色々考えながら歩いているうちに、右手に駅と隣接する背の高いホテルが見えて来た。左側には関係者以外立ち入り禁止の進入路が見える。あそこから中へ入れば、無駄な体力を使わずに済む。

念の為に車の行き来を確かめてから、車道を渡る。かなり適当に停められているように見える車やトラックの間を抜けて、目的の建屋に来た。横にある小さなドアを、駿の力で強引に開ける。ガレージの中は外から見たときより高さはないが、目の前に巨大な人型の重機が横たわっていた。これから立ち向かう兵器よりは小柄に見えるが、何もないまま突っ込むよりは遥かにマシだ。

初出 令和四年一月一四日 noteにて公開

第三八話

「ほら」

駿が、紙のバインダーにまとめられた資料を僕に投げて寄越した。僕が目の中の重機に気を取られている間に、彼は脇にある小部屋を物色していたらしい。バインダーの表紙には、「操作マニュアル」と書かれたラベルが貼ってあった。

相当使い古されているのか、しばらく更新されていないのか、表紙がよれよれでところどころ破れたりもしている。表紙を捲ったところに、剥がれないように四隅をテープで固定された付箋に、「屋外で起動すること」と書かれていた。建屋のサイズ感からしても、ここでは直立させられそうにない。

操縦には専用の免許、講習も必要らしく、中々複雑な作りらしい。ただ、我々向けに直結ケーブルも用意されていて、首の後ろにそれを挿し込めば、自分の体を動かすように操縦することも可能らしい。内部のOSと直結した時の感覚や操縦方法がどんなものかは、やってみないと分からない。兎にも角にも、まずは、外へ持ち出さなくては。

重機の周りをじっくり観察すると、メンテナンスベッドを兼ねた土台の上に寝かされているらしい。その下に、専用のレールっぽいものが敷いてある。レールの先に視線をやると、コレを出し入れするのにちょうど良さそうな開口部が見えた。閉めてあるシャッターを開ければ、先頭の牽引車で外へ持ち出せそうだ。

駿と桂花さんとの連携により、そのシャッターが開けられた。駿は牽引車の運転席に乗り込み、手当たり次第にレバーを操作する。牽引車が起動状態になり、駿の操作に合わせてゆっくり外へ向かって動き始めた。潤滑油が足りないのか、相応の重量があるのか、ガレージ中に金属の軋む音が響き渡る。耳を押さえながら、牽引車と重機が外に出るのを追いかけた。

外に出して陽の光に当てると、塗装のハゲ具合と外装の細かい傷に、年季が入った貴重なものだということがよく分かる。その重機が寝かされている基部は相当薄い作りになっているが、運転席っぽい部分へ乗り込むには専用の機材か、ちよほど良い脚立が必要な気がする。一旦牽引車の方から、後ろに移るのがベストだろうか。

駿は何かのレバーを引いて、牽引車の運転席から飛び降りた。

「こいつの操縦は、お前の担当な」

駿は背後の銃器を、親指を立てて差しながら、僕に向かって言った。急な展開に、一瞬「えっ？」と聞き返した。それを聞いた彼は、「江辺野にはキツいだろう？」と言った。

「俺はリミッター解除で突撃することもできるけど……」

駿はその先を言わなかったが、言いたいことはよく分かる。誰が繋いだかも分からないケーブルを挿しさえすれば、多少は動かせる。それが出来ない桂花さんに、ゼロから操縦して役に立てというのは難しい。

彼には他の選択肢もある。今の人員を最大限に生かすためには、消去法で僕がベストというのは間違いない。

「とにかく一回、静かに起動させてみよう。試運転だ」

駿に促され、とりあえず牽引車を經由して運転席に収まった。電源を入れて起動させ、専用のケーブルを探した。端子の先がかなり汚れている。アンダーシャツの袖で何度か拭き、首の受け口を手で触って確かめながらケーブルを差した。首の根元に異物が深く入ってくる感覚に、急に悪寒が走る。操作パネルの表示が一旦落ち、すぐに僕を認識して再度立ち上がった。重機側のOSと連結する感覚も非常に気持ち悪い。得体の知れない何かと手を取り合っているような、何とも表現しにくい感覚だ。

そのまま、操作パネルに従って「直立」のボタンを押した。シートベルトを確認してください、と一瞬確認が表示されたが、即座にOSを押してしまった。システム側の自動制御で運転席から下が、メンテナンスベッドから降りて立ち上がる。運転席はその場に止まり、極力向きを維持して重機が一番上、頭の部分に収まり直した。運転席の中でもみくちやになっっている間に各部がロックされ、直立への移行が完了する。

直立すると、高さ的には一〇メートルは行かないぐらい。ここから見下ろすと、ちよつと高いなと思う。ただ、その中でいつもとサイズの変わらない自分も共存している感覚というのも、新鮮で気持ち悪い。

操作パネルに目を落とすと、燃料不足、充電不足の表示も出ている。軽油とバッテリーの併用らしいが、どちらも前に使った人がしつかり補給しなかったらしい。ゆっくり動かしても、最大三〇分程度でシステムが落ちるようだ。

とりあえず、足元の二人には離れてもらって、ゆっくり手や足を動かしてみる。

良くも悪くも、いわゆる重機。そんなに機敏には動かない。大きさの問題もあるし、歩行速度もそこまで早くない。車輪で高さ制限がなければ一般道の走行もできるようだが、時速四〇キロ程度が出せれば御の字といった様子だ。アニメのように、機敏に動けて、何もかも器用にこなせるロボットとは言い難い。

一旦アイドリングにして、二人の意見に耳を傾ける。

ここからも直立して目視出来たのは、一回りから二回り程度大きい機動兵器が二体。向こうは更に、飛び道具の専用銃器も装備している。無防備に突っ込むよりマシンといった程度にしか、状況は改善していない。

「江辺野と俺でメインゲートに向かうから、お前はそのまま車道を走って合流だな」

「陽動はこつちでやって、仕上げをお願いしようかな」

地上の二人は気楽な調子で言う。ここから突っ込んでいくにしたって、テーマパークの中へアレを倒す訳には行かない。メインゲート前の広場、製鉄所の方へ押し倒す必要がある。

「江辺野が攪乱、俺が陽動。お前がフィニッシュ。良いな」

駿が良い作戦だろと言わんばかりに、ドヤ顔で言う。何かが決まったようで、本当は何も決まっていない。僕は江辺野さんに「無理はしないように」とインカムで声を掛けた。

「じゃ、行くぞ」

駿の掛け声で、彼ら二人は駅の方からテーマパークの方へ向かった。僕は僕で、極力駅舎や高い建物に身を隠しながらそちらへ近付く。ただ、駅前、テーマパーク前は見通しがよく、身を隠す場所はない。早速、二台のうち手前の一台に見つかった。すぐにもう一台と共に連携をとって、こちらに銃撃を仕掛けてくる。

僕は慌てて背後のホテルや駅周辺の建物を盾に、銃弾を躲す。今の攻撃でそこからへ行った二人に何も無いことを祈りつつ、武器代わりにそこら辺の信号機を引っ掴む。綺麗に弾き抜ければまだ武器にもなったのに、中途半端に折れて使い物にならない。追いかけてきた二台を見て、更に慌てて元の道に戻る。

「ごめん、ミスった」

インカムから桂花さんの声が聞こえてくる。こちらでも慌てふためきながら、

「何を？」と聞き返す。

「二台じゃなかった。もう一台いた」

桂花さんの回答に、思わず舌打ちする。ここに来てそれは、重大な見落としじ

やないか。僕は彼女に悪態をついたことを心の中で謝りつつ、「それで？」と続きを促した。

「こっちは、越智くんが一人でやつけた」

つまり、向こうはとりあえず無事で、こっちに來ている二台を何とかすれば、目下の課題はクリアできると言うことか。僕は取り急ぎで「了解」と返し、後ろから來ている二台を確認した。

僕は心の中でもう一度ごめんなさいと唱えながら、道路標識のついた白いポールと、隣にあつた街灯を引き抜いた。今度は根本から上手く外れて、振り回すのに十分な長さになった。貨物置き場へ踏み込んで手前の一台を上手くやり過ごし、後ろにいた奴に両手に握ったポールと街灯を叩きつけた。バランスを崩した相手はその場で前のめりに倒れる。

彼ら専用サイズの銃からマニピュレーターが離れた。僕はそれを必死に奪い取り、倒れた一台を踏みつけ、方向転換してきたもう一台に向けて引き金を引いた。激しい反動がこちらの腕にも響いてくる。

相当数の弾丸を撃ち出したところで向こうは沈黙し、その場に沈み込んだ。足元でもがくもう一台は出力を上げ、力づくで僕の足を押し返した。僕は持っていた銃を振り回し、貨物置き場の架線にそいつを押しやった。架線から伝わる電流に、もう一台も静かに沈黙する。

そこで重機の燃料が切れた。バッテリーも残量がゼロになり、一気にシステムがダウンする。ダメになる直前で直立モードが解除され、視界が途端に低くなる。首のケーブルを無理やり外し、運転席から下に飛び降りた。足を少し傷める程度で、着地が叶った。痛みを堪えながら、先に行った二人を追ってメインゲート前へ向かった。

初出 令和四年一月一四日 noteにて公開

第三九話

テーマパークの入り口、メインゲート前まで来ると、激しい戦闘の跡があった。駅の周りに聳え立つホテルや店舗に、巨大な銃弾で抉られた穴がいくつか空いていた。足元には巨大な葉莖も落ちていた。

窓ガラスや外壁の一部が崩落し、瓦礫と化している場所もあった。道幅の狭い旧門前通りで頭上もこんな調子では、ただ走り抜けるだけでも相当怖かったはず。二階の入り口へ直結している通路から、鉄工所の手前に広がる広場が見えた。信号のついた街灯や、丁寧に植えられた背の高い植物、白いポールを組み合わせてできた謎のオブジェが、巨大な機動兵器に押し倒されていた。北へ抜ける道路の真ん中、細い分離帯に植えられた椰子の木も無惨に踏み荒らされ、手前の何本かは薙ぎ倒されている。

動かなくなつた機動兵器の足元に、右腕を破損し、切断面から青白い体液を垂れ流している駿と、それを介抱する桂花さんがいた。僕は、騒ぎを聞きつけて近づいてくる四足歩行の実験動物を、リボルバーで撃ち抜いた。椰子の木に隠れていたもう一体も、しつかり引き付けて撃ち倒した。

「無事か？」

僕は駿に声を掛けた。彼は、異様な紋様を浮かび上がらせた顔でこちらを見る。右目もいつもの色から変色し、瞳が三つに増えて淡いピンクに発光したまま、周囲を激しく見回していた。どうやら上手く制御ができないらしい。

駿は荒い呼吸を整え、桂花さんに支えられながらゆっくり立ち上がった。無くなつた右腕から溢れる体液を左手で押しとどめながら、「ご覧の有り様だ」と笑いながら言った。声も、若干のノイズが混ざっている。

駿を支える桂花さんも、彼の体液を浴びた部分が徐々に錆び始めたらしく、顔や服が赤茶色に変わっている。僕の視線に、彼女は「私は何ともない」と言った。小さな切り傷や擦れた跡はあるが、大事はないらしい。

「さ、行くぞ」

駿は桂花さんの支えを押しやり、少々ふらつきながら一人で歩き始めた。僕がそれを支えようとするが、駿に断られた。

「ここからまだ、奥に行かなきゃいけないんだ。一人で歩くさ」

彼はバックパックからタオルを取り出すと、口に咥えた。体液が溢れる右腕の付け根、肩を左手で掴み、歯を食いしばってそのまま引きちぎった。脇の接合面を閉じ、体液の流出を止める。

「ほら、何ぼーつとしてんだ。行くぞ」

彼はタオルをその場に投げ捨て、ついて来ない僕らに言った。先に信号奥の階段を上る駿を追いかけ、三人揃ってテーマパークのメインゲート前に辿り着いた。外側はグルッと立ち入り禁止の看板と、オレンジのフェンス、防音防塵用の布で中が見えないように覆われている。

入り口を塞いでいたフェンスと布を押し退け、奥に入る。目の前に、テーマパークのシンボルっぽい地球を模した球体が置かれていた。チケット売り場、入場ゲートはまだ向こうの方らしい。開業していた時の様子は分からないが、ザ・シティに良いように利用されていた割りに、当時の面影は残されているような気がする。

午後五時を過ぎ、各部のライトアップも始まったようだ。客はほとんどいないだろうに。チケット売り場の前まで行くと、ゲートの左右に人型のロボットが立っていた。チケットのもぎり役か、中からの逃走を監視する役割でも担っているのだろう。彼らは特に何かを求めることもなく、僕らの通行を許可してくれた。

園内に入ると、マスコットキャラみたいなのは見えないが、近くの売店や通路に、制服を着た人の姿が見えた。どうやら同学年のクラスメートではなく、先輩や後輩のキャストらしい。

彼らは異様な見た目の駿のことも特に気にすることなく、各々に与えられた役割を演じている。すぐ側で清掃員をやっていたのは、どこかで見覚えがある下級生。声を掛けてやめさせた方がいいんだろうか。真面目に手を動かす様子を見ていた僕に、駿が「やめとけ」と声を掛けてきた。

「まずは、ヤツの顔を拝んでからだ」

彼は左手で、僕が彼女に伸ばした手も掴んでいた。僕が彼に頷くと、彼は僕の手を離した。ヤツは三流の脚本家、演出家とはいえ、意に反するのはまだ早い。心の中でごめんねと呟き、気持ちを切り替えるべく強引に視線を逸らした。

真境名がいたとしたらどこか。昼前の映像では、屋外の劇場みたいなところになっていた気がする。少なくとも、正面に見えるような建物の多い場所ではなかった。建物の間を抜けて、もつと西の方、テーマパークの奥の方へ進んだ方が良さそう

だ。

園内マップがあれば特定もしやすいのだけど、それっぽい案内板は特に見当たらない。とりあえず、頭上に絶叫マシンのレールっぽいものが見えるところに出た。この辺りもまだ、建物が多し。どうやら、もつともつと奥へいかねばならないようだ。頭上のレールに想像を巡らせながら、園内をどんどん西へ進む。

ポップコーン売り場や案内スタッフめいたキャストも見えてくる。思い切つて、案内のパンフレットがないか訊いてみると、先輩らしき女性は、少々引き攣つた笑顔で疲れも滲ませながら、スツとパンフレットを渡してくれた。僕はお礼を言い、彼女から離れて園内図を見た。

横から駿や桂花さんもそれを覗き込む。どうやら、今いるエリアは大きな池に挟まれた場所らしい。恐竜やサメ映画をテーマにしたエリアがあり、さらにその奥に往年のゲームをテーマにしたエリアと、演劇を楽しむための場所もあるようだ。水族館のイルカショーと似たような形のココが、目的地だろう。

パンフレットをバックパックに仕舞いながら、そちらに向かつて歩き始める。西部劇っぽい場所を抜け、大きな池を迂回する。目的地のエリア名を掲げたゲートをくぐると、すぐに扇型造られた劇場が見えてきた。本来なら水の中に浮かぶ中央のステージと、そこへ向かつてすり鉢場に緩く迫り上がっていく形の座席があるはずだが、水は抜かれ、真境名と遊川のための大きなベッドに作り替えられていた。

僕らのクラスメートはそれを見守る形で、周囲に配置され、水の中のステージと向かい合う境目らしい場所に、僕らの家族は集められていた。彼らは一つのテーブルに集められ、目の前に見える二人の愛を延々と見せつけられていた。

僕らが近付くと、僕の父と母、桂花さんのお母さんが立ち上がり、僕らを心配そうに出迎えた。駿の家族はいなかった。

「随分遅かったじゃないか。待ちくたびれたよ」

真境名はベッドの中で身体の向きを変え、僕らと相对した。ベッドの上で胡座をかき、少々怠そうな表情を浮かべている。さつきまで彼と抱き合っていた遊川は、こちらを一目見るなり、怖がって真境名に身を寄せる。彼は遊川の柔らかそうな頭を撫でながら、額にキスをした。

彼は一瞬こちらを見ると、近くにいたクラスメートに指示を出した。彼らは慌ただしく動き、新たな椅子を三つ持ってきた。家族は少し脇に動き、真境名と向き合う場所を広く開ける。

「暑かっただろう？ どうだ、まずは一服」

真境名が合図すると、クラスメートの間を割って、稲荷さんとテッチャンとが、ドリンクを持ってやって来た。彼らはテーブルの空いたスペースにドリンクを三つ置く。僕らに再接近した時、二人の手は微かに震えていた。

用事を終えた彼らは、スッとちよつと離れたところにいるクラスメートたちの元へ行く。その先頭で、嶋田さんはいつも通りに、ややツンとした表情で腕を組み、あさつての方を向いて立っていた。

「良いから、座れよ」

真境名は胡座をかいたまま、真つ直ぐこちらを睨みつけた。その視線が、僕らの後ろへ向けられると、一番後ろが騒がしくなる。そこだけ空間ができ、足元を見ると、血溜まりが広がっていた。真境名は再び僕らに視線を向けた。僕らは彼の庄に従って、素直に椅子に腰を下ろした。

初出 令和四年一月一五日 noteにて公開

第四〇話

「それで、君らの要望は？」

真境名は早速、話題を切り出した。僕はバックバックから例のメモリースティックを取り出して、テーブルの上に置いた。

「こんな局面で、フェイクを掴ませるような君らじゃあるまい。望みを単刀直入に言え」

真境名は随分面倒臭そうに、話を先へ進めようとしている。手っ取り早く終わらせて、彼らの時間を過ごしたいらしい。彼のペースに飲み込まれるまいと、手元のドリンクに手を伸ばした。コップの中の液体を、上から覗いて確かめる。

「毒見がいるなら、妹にでも飲ませたらどうだ。出来損ないの妹に」

彼は僕の隣に座っている真珠を顎で差した。

「大事な妹を出来損ないとは、随分な言い方だな」

僕は腹を括って、ドリンクに口をつけた。グツと一口飲む。甘味が控えめな、よく冷えた普通の炭酸水に思える。真境名は口の端を上げ、「言うようになったな」と笑った。

「だが、君の足枷だ。あの婆さんと共にな。その証拠に、君はいま自由だ」

真境名の言い分が全て正しいと認めたくはないが、ばあちゃんが死んだ日から僕の自由な時間は一気に増えた。アイツに振り回された側面もあるとは言え、少なくともこの一日半ぐらいは、何にも縛られていない。

「うっかり殺すキッカケも渡してやったのに、使わないんだもんなあ……」

彼はそう言いながら、顔の横で中身がなくなった緑のボトルを振った。独特の形をプラスチックで再現した、あのボトル。急に嫌な予感がして、口に含んだばかりの液体を吐き出した。もう飲んでしまった分もできれば吐き出したかったが、喉に指を突っ込んで無理だろう。

口元を汚した僕に、稲荷さんが横から未開封のお手拭きを差し出してくれた。その手はやはり震えている。僕は彼女に「ありがとう」と言いながら、お手拭きを押し返した。アンダーシャツの袖で口元を軽く抑える。

真境名はこちらを見ながら、声を出して笑う。

「そんなに慌てなくても大丈夫さ。外から二撃目を加えないと、作動しない」

横目で駿、桂花さんの方を見た。二人とも、顔から血の気がひいているように思える。僕らの反応を見ても、家族は俯いて微動だにしない。視線を真境名に戻す。

「察しが良くて助かるよ。来場者特典のウエルカムドリンクだからね」

アイツの性格の悪さをすっかり忘れていた。

「君が望めば、いつでも消してやるよ。新しい体を望むなら、それもくれてやる」
真境名はこめかみを指で叩いて言った。物理的に命を絶つと言う意味合いではなく、僕ら家族の記憶から、真珠の存在を消すと言う意味だろう。彼ぐらいの立場なら、何不自由ない身体に移し替えるのも、朝飯前なのか。

「それで、望みはなんだ？ 時間がないのはお互い様だろう。早くしてくれないか」

「僕らの望みは二つだ。家族や友達の安全と、再協議への協力要請、この二つだ」
「取引材料は一つで、願いは二つか。随分欲張りだな」

真境名はそう言いながら、腕を組み、手を口元に当てた。長々と考え込むように思えたが、彼はすぐに口を開いた。

「身体をくれた礼に、家族と友達の安全は約束してやってもいい。望むなら、セントラルドグマも解除してやろう」

セントラルドグマを外せば、タイムリミットがジリジリと迫っているリセットを、真境名や遊川と共に切り抜けられる。まるで、大洪水を生き抜くノアの方舟のように。真境名に選ばれたものだけが、次の世界へ望みを繋げる。

だが、彼は神様とは程遠い。少しでも意に反する奴は、易々と切り捨てる。無邪気とも言える残酷さに、歯止めをかける様子もない。

「そうなるよ、望みは再協議への協力要請の一点か。こちらが得るものと、一対一ではあるな……」

真境名はゆつくりと口を閉じた。何かを考えているのか、口を結んだままゆるゆると鼻で息を吐いた。

「じゃあ――」

「――断る」

僕の言葉を遮るように、彼は間髪入れずに言った。

「お前らと共に死ぬつもりもないが、お前らが死に絶えるのも、どうでも良い」
彼は隣の遊川を抱き寄せ、見せつけるようにもう一度額にキスをする。

「俺には詩恵留がいれば、それでいい。二人だけで、未来を築いていくさ」

彼の回答に、僕はテーブルに置いたメモリスティックへ手を伸ばした。僕より一瞬早く駿の左腕が伸びるが、その腕をテツちゃんが抑えた。彼は震える手でメモリスティックを拾い上げ、駿から遠ざける。駿はテツちゃんを睨みつけ、「そいつを渡せ」と言った。

「止せ」

僕は横から駿に言う。彼は僕の制止を気にすることなく、テツちゃんを睨み続けている。テツちゃんは駿から視線を逸らし、そっぽを向いた。駿はなおも、彼に「渡せ」と繰り返した。

「その脳筋、状況は理解してるよな？」

真境名が駿に言った。駿はそちらを見て、「分かってるよ」と答えた。

「やつと俺を見たな」

駿の言葉に、真境名は表情を変えることなく「それがどうした」と返した。

「古谷のことも覚えてるよな。なぜアイツを殺した？」

「ああ、それか」

真境名は鼻で笑い、肩をすくめる。

「細かい理由なんか、覚えてないね。俺は元から嫌いなんだよ。お前らみたいな脳筋が。それが一人死んだところで、何だつて言うんだ」

「貴様っ！」

駿は真境名に向かって怒号を発する。真境名の隣で遊川は怯えるが、彼自身は微動だにしない。真境名は何かを思いついたのか、一瞬眉を上げた。

「そうだ。お前がそれを持つてこい。これは取引じゃない、命令だ」

真境名はテツちゃんが持つているメモリスティックを指し、駿に言った。彼は「分かるな？」と言いつつ足した。駿はまだ怒りが治っていない様子だったが、テツちゃんからメモリスティックを受け取り、境目の柵に手をかけて中へ入った。

感情を抑えるようにゆっくり歩いて、真境名と遊川がいるステージへ近付いた。ベッドの手前で足を止め、真境名に向かってメモリスティックを差し出した。真境名は自然と手を伸ばし、それを掴んだ。

「どうした？ 手を離せ」

「いい気になるなよ、出来損ないの神様が」

駿はグツと手に力を込め、メモリスティックを握り潰した。真境名は目の前の出来事にも狼狽えることなく、駿の身体を小突いた。彼の全身から体液が吹き出

し、駿の肉体はその場に崩れ落ちた。

「交渉決裂つてことでもいいんだな？」

真境名の鋭い視線がこちらに向けられた。冷たい声で、静かな怒りが込められている。僕は桂花さんに目で合図して、腰に備えていた拳銃を握りしめた。桂花さんは「みんな逃げて」とその場で固まっている家族、クラスメートに呼びかけた。僕は真境名との距離を詰め、彼に狙いを定めて引き金を引く。慌てたのが良くなかったのか、慣れのせいで感覚が狂ったのか、急所を外れた。大きな血管には当たったらしく、被弾の衝撃で後ろに倒れた。

真境名の横で怯えている遊川が目についた。生まれたままの姿に薄い布で体を隠し、体つきや顔こそ立派な大人なのに、表情がどこか幼い。僕は機械的な動きで彼女の眉間に銃口を当て、頭を空っぽにして引き金を引いた。

「貴様あ！」

僕の背後にいた真境名が体制を整え、死角から迫ってきた。僕は咄嗟に距離を取るが、襟を掴まれた。真境名の左手には、正体不明の棒状のものが握り締められていた。僕はそれが身体に押し当てられる前に、真境名の眉間に狙いを定めて引き金を二度引いた。身体の奥から何かが蠢くような感覚と、熱の塊が湧き上がってくるのを感じる。全身に熱さが広がっていくのを感じながら、意識も一緒に遠のいていった。

初出 令和四年一月一五日 noteにて公開

第四一話

遊川の眉間を撃ち抜いた時の引き攣った顔が、フラッシュバックした。自宅で亡くなっていたばあちゃんの死体を見た時の様子や、亡くなる直前に見た入駒の顔、真珠の笑顔も思い出した。引き金を引いた時の音や匂い、手に残る体液や鮮やかな血の色も、次から次にオーバーラップする。

血塗られた自分の手を見つめ、キッチンで真珠を刺し殺したことを母さんに罵られながら、不意に目を覚ました。鮮明に聞こえていた母さんの声は、幻だったらしい。見知らぬ天井を見上げ、慣れない寝床で目を覚ますのもう何度目だろうか。いい加減に新鮮味を欠いている。

真境名へ銃口を向け、引き金を引いた瞬間に死んだと思った。身体の中で蠢く糸に、内側から食い破られるような感覚もあつたのに。

余りにも鮮明な夢が衝撃的だったらしく、無意識に鼓動や呼吸が速くなっていた。浅い呼吸を少しずつ落ち着かせ、徐々に深呼吸へ切り替えていく。鼻から空気をたつぷり吸うと、消毒液の匂いがした。ちよつぴり甘い匂いも微かに混ざっている。

ベッドの中で、身体を動かしてみた。首は問題なく動く。腕を使って上体を起こすこともできるが、足下に何かが乗っかっている。そちらを気にしながら、体をゆっくり起こした。桂花さんが、僕の足を枕に寝息を立てていた。僕が動いたせいで、一瞬身じろぎした。本格的に起きるかと思つたが、そのまま顔の向きを変えて動かない。呼吸に合わせて、背中がゆっくり上下する。

左腕にはチューブが固定されていて、点滴らしいものとセンサーらしきものがついていた。どうやら、医務室のベッドのようだ。部屋に照明は点いておらず、薄暗い。何時頃なのか、時計を探してみる。

「やあ。気分はどうだい？」

一人でしばらく時計を探していると、入り口のドアをゆっくり開け、空湖さんが入ってきた。彼は点滴やセンサーをチェックして、手元のボードに何かを記入する。

僕は口を開け、彼に話しかけようとするが、喉が掠れて声が出ない。空湖さん

は、枕元の水差しを持ち上げた。

「無理にしゃべらなくていい。まずはゆっくり水を飲んで」

空湖さんの手を借りて、僕は水を口に含んだ。カラカラの喉に水が染みていく。空湖さんは数回に分けて、僕に水を飲ませてくれた。彼の介抱を受けていると、足元で寝ていた桂花さんが、目を開けた。眠そうな目を擦りながら、まだ半分寝ている顔でこちらを見ている。

「再生は問題ないようで、何よりだ。君の遺伝子は特別だからね」

空湖さんは水差しを元の場所へ戻しながら、何気ない口調で言った。蘇生でも修理でもなく、再生とは耳慣れない表現だ。そう言えば、駿もやられたはず。彼の蘇生はどのようなだろう？ 僕と同様に回収されて手当を受けたのなら、近くに寝かされているかもしれない。

辺りをしつかり見回す。それなりに広い部屋なのに、ベッドは僕が使っているこの一台だけらしい。

空湖さんから連絡が行ったのか、米利刑事が織林刑事を伴って、ヨレヨレの格好で静かに部屋へ入ってきた。彼は僕に「よう」と挨拶すると、近くのスツールを引き寄せ、ベッドの近くでどっかり座った。

「真境名、遊川の排除、ご苦労さん。ご家族もクラスメートも、我々で保護したから安心してくれ」

彼は声の調子を落とし、いつもより声量を抑えて言った。織林刑事の補足によると、僕と桂花さんの家族は、近くの別室で休んでいるらしい。

「あとは、回復を待つて再協議に望めれば、問題解決だ。調子はどうかな？」

米利刑事は、僕と空湖さんの顔を順番に見る。彼の言い方からすると、タイムリミットにはまだ余裕があるらしい。グレゴール氏も、こちらに来ているらしく、僕の準備さえ整えば、いつでもリセットを止められる状況のようだ。だが、僕が知りたいのは、そういう情報じゃない。

僕の様子をじつと見ていた織林刑事は、米利刑事の袖を掴み、「先輩、ちょっと」と彼の腕を揺さぶった。彼は「なんだよ」と織林刑事の方を向き、彼女の顔を見て「分かったよ」と呟いて、僕に向き直った。

「君の聴きたいことは？」

「駿は？」

僕は言葉を絞り出す、喉の開きが悪いらしく、一音一音掠れさせながら呟くのが精一杯だった。それでも米利刑事は聞き取ってくれたらしく、顔を歪め、下

を向いて首を横に振った。

「越智くんは、ダメだった」

米利刑事に代わって、空湖さんが僕の問いに答えた。

「バックアップを多重化しておいたんだが、リミッター解除で全部ダメになってしまった」

空湖さんの説明によると、ピューパが起動するとザ・シティで半自動的にバックアップしてある記憶も遠隔で破壊されてしまい、記憶の復旧、ダウンロードや蘇生が不可能になるらしい。僕らが真境名の元へ向かう前に、特別な体制でバックアップを取っておいたのに、リミッター解除によるフィードバックで、多重化したバックアップもデータが破損してしまったようだ。

僕も真境名にピューパを使われたが、多重化したバックアップを使って、保存済みの遺伝情報と組み合わせ、特別な蘇生、促成培養による再生が出来たという。僕みたいな奴が生き残ってどうする？ 特別な才能も夢もない、どこにでもいるつまらない奴なのに。

「どうして、僕なんですか」

たまたま最初の被害者と面識があって、真境名の訪れた学校に縁があっただけで、クラスメートや家族、幼馴染を奪われる理由が分からない。そこまで生かされる意義も、自分にあるとは思えない。生き残るなら、僕じゃなくて駿の方だった。運動ができて、性格も明るく、機転も利いて、今回の件も最後まで積極的だったアイツの方が相応しい。

気が付くと、両目から涙が溢れていた。僕は、米利刑事の両腕をすがるように掴み、「なんで、なんで僕なんですか」と繰り返して、嗚咽を漏らした。

「君が必要なんだ。分かってくれ」

米利刑事の悲痛な声が、頭の上から聞こえて来る。分かりたいが、分かりたくない。大人のワガママに振り回されるのも、世界の理不尽に付き合わされるのも、もう沢山だ。タイムリミットのことなど、もうどうでもいい。こんな世界も、こんな身体も、勝手に滅んでしまえ。

僕は、僕のすぐ側にいてくれたクラスメートの女子の前で、周りの目も彼女の誠意も一切気にすることなく、子どものように泣きじゃくった。

出せるだけの涙を出してしまうと、泣き疲れてしまった。ベッドの上でボーツと真つ暗な窓の外を眺め、部屋を出入りする大人や家族のことを気にすることな

く、ただ時間が過ぎていくのをゆっくり味わっていた。

外が段々白み始める。まだ五時前だというのに、流石は六月下旬。日の出が早い。

グレゴール十八世が身をかがめ、部屋の入り口からゆっくり入ってきた。

「落ち着かれましたかな？」

音の高さが安定せず、微妙に揺れる合成音声だが、今は逆に心地いい。僕は返事も忘れ、声の主を見た。彼は周りの大人が用意する椅子に座ることなく、ベッドの横までやってくる。僕は母さんに耳打ちされながらも、身体に力が入らないまま彼の一挙手一投足を見つめている。

「再協議を望まれますかな？」

グレゴール氏の言葉が、頭に入ってこない。音は捉えているが、意味を理解する気力がない。彼は全く反応を返さない僕に、特に何も言うことなく、ややゆっくり目に同じ言葉を繰り返した。

「もうちよつと、待つてもらえませんか？」

横でそれを聞いていた桂花さんが、グレゴール氏に言った。彼は、「ええ。構いませんよ」と答えた。

「ただ、タイムリミットは朝八時まで。あまりゆっくりされますと、取り返しもつきませんので、ご注意を」

グレゴール氏は、「では、また後ほど」と僕らに頭を下げ、部屋に入ってきた時と同じ足取りで、ゆっくりと出口に向かう。ドアのところで身をかがめた彼の背中に、僕は「あの」と掠れた声で呼びかけた。彼はその場で立ち止まり、ゆっくり振り返った。

「再協議をすると、どうなるんですか？」

「詳しく知りたいのですか？」

彼の言葉に僕が頷くと、彼は「それでは」と再びベッドの横に戻ってきた。僕の父さんや母さん、桂花さんのお姉さんがいるのも構わず、彼は再協議について、淡々と説明し始めた。

第四二話

「改定後の条文にもよりませんが、速やかな秩序復旧が行われます」

「速やかな秩序復旧と言うと？」

グレゴール氏の説明に、桂花さんが突っ込みを入れる。

「一般的にはクリーニングでしょうか」

「クリーニングって？」

近くで話を立ち聞きしていた空湖さんが、グレゴール氏に変わって説明を引き継ぐ。

「物理的にも情報的にも、綺麗にするんだ。何もなかったことにして、必要ならウソの記憶にすり替える」

空湖さんは、極めて淡々と言った。

チャルカ教とザ・シテイがやってきたことを考えれば、やりたいことはよく分かる。真実は二の次、虚偽でもいいから秩序を保つ。街と平和を維持して人々を飼い慣らすためなら、記憶の改竄など微々たる問題だ。

「そのクリーニングって、拒否権はないの？」

桂花さんの質問に、グレゴール氏は「残念ながら」と首を横に振った。

「全体のためです。例外は認められません」

「つまり、今回の事件も全部消されちゃう訳だ」

桂花さんの言葉に、グレゴール氏は頷いた。

「被害者のことも、忘れ去られてしまう……」

グレゴール氏は、僕の呟きにも振り向いてくれた。彼は僕にもゆつくり頷いた。「気に病むことはありません。痛み理由も、忘れてしまいますから」

彼はあくまでも淡々と、機械的に言った。入駒の死も、ばあちゃん存在も、駿との思い出も。たとえ家族であつても、関わったものは全て消される。辛いことも、楽しいことも、最初から全部無かつたことになる。

「僕らでも、ダメですか？」

再協議に臨む代表者ならと、一縷の望みをかけて聴いてみたが、グレゴール氏は頑なに「認められません」と答えた。

真境名が起こした一連の事件を、無かったこととして忘れるのは構わないが、入駒のことやばあちゃんのこと、駿のことを、無かったことにするのは嫌だ。全部忘れる日がいつか来るとしても、それは何十年も後にしたい。

「新しい枠組みを望まれるなら、無期限凍結を申請ください。再協議にこだわる必要もないでしょう」

グレゴール氏はそう言つて、スツと出口へ向かった。空湖さんと桂花さんは、部屋を出ていく彼に頭を下げて見送る。引き止める様子はない。グレゴール氏と入れ違いに、米利刑事が部屋に入ってきた。

「おい、再協議は？」

彼はグレゴール氏を目で追いかけながら、僕らに尋ねた。近くにいた空湖さんが、「再び、交渉決裂です」と告げた。

「無期限凍結の手続きが選ばれました」

米利刑事は空湖さんの言葉に頷きながら、僕の近くまでやつて来た。

「再協議をするにしても、無期限凍結の申請には賛成だ。そっちの方がタイムリミットが早いしな」

米利刑事は自分を納得させるように、僕に向かって言った。彼の言い分も分かる。凍結申請が可能なのは、六時半前後。リセットそのもののタイムリミットより一時間は早い。先に申請だけ出しておいて、再協議を考える時間に充ててもいい。

「じゃあ、ハチ公タワーまで行かないとな」

米利刑事は、今部屋に入つて来たばかりだと言うのに、「よっしゃ。任せとけ」と部屋を出て行った。ハチ公タワーを管理する会社に連絡するためらしい。

「無期限凍結つて、何するの？」

桂花さんが空湖さんに尋ねた。彼は唸り声を上げ、「僕にもよく分からないんだけど」と前置きをする。

「平たく言えば、結論の先送り？ 旅立つて行った先人たちに、判断を委ねるらしい」

空湖さんの解説によると、二千年代に地球を離れたご先祖さんは、月面に中継機地を残して遠くへ旅立つたらしく、ハチ公タワーから月へ向けて申請を送ることにより、協定に関する取り決めに全部一回放り出す意味合いがあるらしい。

「受理はいつになるのか、そもそも受け取る相手がいるのかどうかも、僕には分からないし、地球を放り出していなくなったご先祖様なんて信じてないけどね」

空湖さんは両肩をすくめた。

それで、無期限凍結の「申請」と言つてたのか。申請方法が微妙にアバウトなものも、受理より届出が優先されるからなのか。妙なところで、随分大雑把な取り決めをしている。

結局、チャルカ教もザ・シティも神の意向や威光には、従うしかないようだ。この星の本来の持ち主、先住民族の意思が最優先らしい。

「申請さえすれば、リセットの執行も棚上げになつて、新しいやり方、枠組みをゼロから決めることになる」

「だから、クリーニングにも異議申し立てができるのね」

桂花さんの言葉に、空湖さんは「その通り」と言つた。

「再協議で条文を丁寧に策定すれば同じことは出来るんだけど、チャルカとかザ・シティの思惑、枠組みを取つ払つて何かしたいなら、新しいやり方を選ぶべきかもね」

空湖さんはそう言つて、僕らに微笑んだ。

米利刑事は運転席でハンドルを握りながら、片手で甘つたるような菓子パンに齧り付いた。助手席の織林刑事はナビと目の前の路面状況を見ながら、隣の米利刑事に進路を伝えている。運転席の彼はバックミラーで、後部座席の僕の顔を見た。

「やる気になつてくれて、何よりだ」

そういう彼に、隣の織林刑事は即座に「前見てください、前。前」と告げる。

米利刑事は心底だるそうに、「へいへい。分かつてる、分かつてる」とパンを加えたままハンドルを両手で握り、前を塞いでいた障害物を避けた。真境名がばら撒いたトラブルの種はそれなりに片付けたようだが、戦いの痕跡が色んな所に残っている。電車やバスといった交通機関が回復しないのも、その一つ。

幸い、自動運転周りの不具合は解消されたく、自動運転機能を搭載した車両でも、手動による運転で走行する分には問題ないらしい。拠点にしていた中之島のホテルからハチ公タワーまで、徒歩なら最短でも一時間ちよつと。テーマパークがあつたところより、さらに西へ行く必要がある。歩いててもギリギリ間に合うが、車で近くまで行けるのならそれに越したことはない。

米利刑事が妙に張り切つて、その後の段取りを進めてくれた。路面状況を確認しながらでも、歩くより遥かに早く到着できるとあつて、準備が整うまでの時間、

僕らに朝食を薦めてくれた。

僕はあまり食欲は湧いてなかったが、桂花さんや家族のこともあり、その申し出を素直に受けることにした。先に彼らを朝食会場へ向かわせ、僕は寝汗を流すためにシャワーを浴び、それから朝食を摂りに向かった。

病人然とした見窄らしい格好から、少しは外を出歩くのにふさわしい格好になったはず。先日と同じ荷物をカバンに詰め、桂花さんと共に米利刑事が運転するパトカーの後部座席に収まっていた。

米利刑事のパトカーは、あつという間に港区へ入った。この調子なら、六時過ぎにはハチ公タワーに着く。先端とやらへ到達するための所要時間は特に聞いていなかったが、三〇分もあれば十分だろう。

打ち倒された実験動物の死骸や、破損したロボットの残骸、暴動によって発生した瓦礫等を避けながら進んでも、それほど大した迂回にはなっていない。他に街中を走る車両が少ないこともあって、パトカーはぐんぐん西へ向かって進んでいく。

隣で静かに窓の外を見る桂花さんの横顔も、僕にはとても眩しく見えた。それを見逃さない米利刑事は、再びルームミラーを見ながら、「青春だねえ」と呟いた。僕がそちらに視線をやる頃には、彼は織林刑事と戯れ合いながら、前を向いてハンドルを握っていた。

地下鉄の高架に沿ってしばらく進むと、駅の前から海底トンネルに切り替わる。これで一つ目の人工島へ辿り着く。そのまま駅の下を道なりに潜り、夢洲へのトンネルに差し掛かった。トンネルを抜ければ、目的地付近。

米利刑事が車内に持ち込んだ菓子パンを食べ終える頃、海の方に天高く聳えるハチ公タワーが見えてきた。

初出 令和四年一月一六日 noteにて公開

第四三話

米利刑事の運転するパトカーは、先に到着していた大都エンジニアリングの社用車に並行する形で停められた。どちらもハチ公タワーの横に、バックで駐車されている。

パトカーを降りると、米利刑事は大都のバンへ近付いた。何やら挨拶を述べながら、車内の人とやり取りしている。僕はそれをパトカーの横で眺めながら、力強く朝日を跳ね返しているハチ公タワーを見上げた。

全く見えそうにない先端を見ていると、自然と口が開いていく。

「貴女は中で待つてもいいんじゃない？」

ポカンと開けた口が徐々に乾いていくのを感じていると、横で織林刑事が桂花さんに声をかけていた。二人のやり取りに視線を移すと、桂花さんは恥ずかしそうに慌てて口を閉じていた。恥ずかしさを紛らわすためか、慌てた様子で髪を整えている。

「ここまで来たんだから、最後まで見届けます」

桂花さんの言葉に、織林刑事は「そう？」と返した。どこかで待つつもりなら、ココまで来る必要すらない。空湖さんやご家族と共に、中之島のホテルで最後の時間を過ごしても結果は変わらないだろうに、わざわざココまで来るからには、彼女なりの理由や意思があるのだろう。ただ、その理由が何なのかは、僕には予想が付かない。

「じゃあ、終わったらお返ししますんで」

米利刑事が鍵束を受け取ると、大都の社員は「お願いしますよ」と言い残し、バンを発進させた。そのまま、会社へ戻るようだ。米利刑事は走り去るバンに頭を下げ、車を最後まで見送ってから、僕らの方へやって来た。

「さあ、中へ入るぞ」

彼は鍵束を鳴らしながら、ハチ公タワーの扉へ近付いた。彼が鍵を開けるのに合わせ、僕らもそちらへ接近する。小さな金属音を響かせながら、中へ入るための扉が開く。米利刑事は鍵束を無くさないよう、ズボンのポケットにしまった。

開いたドアから一足先に中を覗き込んだ織林刑事は、「おお」と声を漏らした。

意外と中は広いが、これといったものは特にない。高さや重量を支えるだけの広さが取られ、その分だけ、空洞が広がっている。

ただ、内部は空調が効いているのか、外部より若干空気が冷たい。人感センサーでもついているのか、僕らが中に入ると照明も点灯した。頭上から直接的な光が降り注ぐ作りではなく、光源がどこにあるのか直接見えないようにして、要所所で足元を照らす間接照明になっている。

地下へ続く階段や、さらにその先へ抜ける扉も見えた。地下へ続く階段の延長のように、外周をぐるぐる回る螺旋階段が、上の方まで続いている。

「もしかして、上までズーッと階段なの？」

織林刑事は階段の行く先を辿りながら言った。

「いや、二、三階分ほど上がれば、途中まで上がるエレベーターがあるらしい」

米利刑事は、大都の社員から説明を受けたようだ。織林刑事はそれを聞いて、「途中でつて」と呟いた。

「俺も詳しくは知らんが、エレベーターの先は一旦外に出て、梯子でさらに登るらしい」

彼はそう言いながら、「とにかく、行くぞ」と織林刑事の背中を叩き、螺旋階段を登り始めた。織林刑事は「セクハラですよ」と文句を言いながら、彼の後ろに続いた。桂花さんがその後につき、僕の方を見て「ほら、行くよ」と言った。僕は彼女に促されるまま、先が見えない階段を登り始めた。

四角い辺に沿って備え付けられた階段を、グルッと三周ほど周る。踊り場というか、展望スペースみたいな足場に出た。全周がガラス張りになっていて広く外が見渡せる、ということではなく、城の外壁に設けられた小窓のように、海側に設置された望遠鏡に合わせた小さな窓があるだけだった。

足場の真ん中に、「関係者以外立ち入り禁止」と書かれた扉と、そこから真っ直ぐ頭上に伸びる柱があった。この扉の奥に、上へ進むエレベーターがあるらしい。米利刑事は鍵束を取り出し、鍵穴に当てはまりそうなものを選んで差し込んだ。一回で正解を引いたらしく、すぐにロックが解除され、扉が押し開けられた。扉の向こうは、エレベーターを中心に据えた細やかな空間が設けられていた。

上に向かう呼び出しボタンしかついておらず、ボタンを押すと即座に扉が開いた。中に入っても、操作パネルにボタンは「屋上」と「ロビー」、「開」と「閉」の四つしかない。

米利刑事は全員乗り込んだのを確かめると、「屋上」のボタンと「閉」のボタンを押した。ゴンドラのドアが閉まると、すぐに箱が動き始めた。残念ながら外が見える作りにはなっていないし、どのぐらいの速度で上昇しているのかも分からない。微かに、上に引つ張り上げられている感覚をしばらく味わっていると、今度は緩やかな減速を感じる。

最上階に着いたのか、ゴンドラが軽い衝撃で揺れ、すぐ静かになった。到着を通知する音が響くと、ゆっくりドアが開く。ドアの向こうは、本当にエレベーターが動いたのか一瞬分からなくなるぐらい、すぐに分かる変化はなかった。辛うじて、周りの空間が若干狭くなっているのが分かるぐらい。

乗る前の空間より、若干照明が少ない。目を慣らしながら周囲を見回すと、左手の方に短い階段があった。僕を含めて全員が「まだ登るのか」と言いたそうに顔を歪めるが、他に出入り口っぽいところは見当たらない。最初に腹を括った米利刑事が、踏むと甲高い音がするステップを登り始めた。

階段の先に、両手で掴んで上に押し上げるタイプの扉があった。

「この先が屋外みたいだな。準備はいいな？」

米利刑事はそう言いながら、こちらの返事を待たず、ステップの一番上で踏ん張って重そうな扉、ハッチを上に乗し上げた。隙間から差し込む光に目を細めながら、足元の安全を確かめつつ外に出る。

地上三〇〇メートルと行ったところか。海面は、ズツと下の方に見える。

この辺りまで来るともつと狭いのかと思いきや、しっかりと歩き回れるスペースがある。転落防止の柵、手すりも整備されていた。

出入り口のところから右手の方に、さらに上へ登るための梯子が設置されていた。ここから一回りも二回りも細長くはなるが、まだまだ上がある。梯子のそばまで行くと、「ヘルメット着用」だの、「命綱確認」と言った注意書きも掲示してあった。そういえば、メンテナンズ要員の彼らは、それらしいロープや装備を持っていた。

今から取りに戻る時間は多分ない。上空の白い月を眺めながら、しっかりと梯子を握りしめ、一步一步上がっていく。どこまで続くか上を見たいが、真上に桂花さんの足、その先には織林刑事のスカートの中が見えてしまうので、グツと堪えた。目の前の変わり映えしない光景と、一段一段しっかりと踏み締める足に意識を集中させた。

時折強い風が吹くのにも耐えながら、一〇メートルほど登った。先にながって

いた織林刑事、桂花さんの手も借りて、梯子を登り切ると、そこにも広大なスペースが広がっていた。すぐそこに、ヘリポートを示すマークも描かれている。「ヘリでも来れたんじゃないですか」

ヘリポートのマークを見た織林刑事は、周囲の様子を探っている米利刑事の背中に向かって叫んだ。彼女は、強い風に乱れる髪を必死に抑えていた。

「そんなもん、要請してる時間なかっただろ？」

米利刑事は織林刑事に言い返し、「お前も真面目に調べろ」と叫んだ。彼は、目の前に屹立している黒い柱と向き合っていた。横にヘリが停泊してもぶつからないような位置から、登ってきたのと同じくらいの長さで、まだまだ上に向かって伸びている。ただ、ここから上に行く手段はないらしい。

「大都の連中は、すぐに分かるって言ってたんだけどな」

米利刑事は、それなりに太きのある柱を念入りに触りながら、目的のものを探す。錆や風化のせいなのか、あるいは塗料やそもそもその設計の問題なのか、メンテナンスに用いるパネルやボタンは簡単に見つからない。

目をよくよく凝らすと、鍵穴っぽいものが見えた。そこを中心に、小さなボックスが嵌め込まれている。

「おお、コレか」

僕が見つけたボックスに、米利刑事も気がついたらしい。彼は鍵束を取り出して、小さな鍵をその鍵穴に差し込んだ。鍵束ごと捻って引くと、そのまま開いた。その中に、上向き三角が書かれたボタンと、下向き三角が書かれたボタンが収まっていた。

初出 令和四年一月一七日 noteにて公開

第四四話

目の前の二つのボタンが何を意味するのかはよく分からなかったが、とりあえず目についた上向き三角のボタンを押してみる。何回か押してみるものの、何かが起こるとか、手応えがある感じがしない。

「なんか、電動シャッターの開閉ボタンっぽいね」

僕が適当にボタンを押しているのを横で見ていた織林刑事は、ボソツと呟いた。米利刑事は思い当たる節があるのか、「おお、なるほどな」と頷く。僕は要領を得ないまま、今度は下向き三角のボタンを一度押した。特に何か起こる雰囲気はない。押し込んだ手応えもあつさりしている。

「もうちよつと、長押ししてみたら？」

「長押し？」

織林刑事のアドバイスに、半信半疑ながら下向き三角をグーツと長押ししてみる。長押しの方が安定した手応えっぽい気はするが、やつぱり、何かが起きてくる感じはしない。首を傾げながらも、もうしばらくボタンを押し続けてみる。

米利刑事は、目の前にある黒い柱の周りをゆっくり一回りして、変化がないか確かめている。丁度、対面に位置する辺へ移動した時、彼は「あ」と声を出した。ここからでは何がどうなっているか全く分からないが、そこに何かがあるらしい。彼は、しばらくそこから動かない。僕も特に体制を変えず、風が吹き荒ぶ中、ふらつかないように気をつけながら、必死にボタンを押し続ける。米利刑事の隣に移った織林刑事が、彼の誘導に従って上空を見上げた。僕もそれに倣って、上を見上げる。

随分上の方から、動いてるかどうかも分からない速度で、ゆっくりと何かが付いて来ている。形はまだはつきりとは分からないが、どうやら筒状をしていて、それほど大きくない何からしい。そんなに入り組んだ作りはしていないらしく、非常に簡素なものに思える。

上から近付いて来ているそれは、目の前の柱、正確には米利刑事がいる側の場所から伸びるレールか何かにくつついて、ゆっくりと近づいて来ているらしい。

「もしかして、アレ？」

桂花さんが近付いてくる筒を指して言った。僕は「多分」と答えた。

大都の社員がメンテナンスしているというのも、きつとアレの事なんだろう。上向き三角のボタンを押してもうんともすんとも言わなかったのは、上に行く余地がなかったからかもしれない。まだしばらく押し続けないと降りてこないアレを、操作した後は同じ時間だけ上向き三角のボタンを押さねばならない。そのしんどさを思うだけで、今から若干憂鬱になる。

流石に押しっぱなしに疲れて来たので、桂花さんに代わってもらおう。ボタンを彼女に任せ、僕は米利刑事のいる方に回った。彼の目の前に、上まで延々と伸びている正体不明の溝が作ってあった。この溝と、噛み合わさっている謎の機構によって、円筒が降りて来ている。

段々サイズや色が分かってきた。屋外用に置くゴミ箱、ペダルを踏んで蓋を押し開けるペール缶みたいな筒らしい。ただ、成人女性と同程度の背丈はありそう。若干大きな筒は色がすっかり褪せていて、素材となっている鋼材の上に、煤けた感じの黒が重ねられていた。

街中で見かける古いタイプのロボットにもよく似ていた。頭つぼいところはやや丸みを帯びていて、可愛らしい形状になっている。頭頂部からは、外部から簡易な作業で取り付けられたような太陽光パネルと、大きめの投光器つぼいランプが付いていた。一応調色できるタイプのLEDらしく、空の上で時々色が変わっていたのはそのせいだったらしい。

今は日中だからか、ランプは灯っていない。

桂花さんから、今度は米利刑事にバトンタッチされ、やつと筒が目の前まで降りてきた。ボディには、“drive one's glowy”と刻まれていた。“d.o.g.”とも読めるように、一部の書体が変わえられていた。

「輝きを放つって、コレのことか？」

米利刑事は、頭頂部のランプを指した。他の部位は随分ツルツとしていて、デザイン性の高い成型になっているが、そこと太陽光パネルの周りは浮いて見える。設計思想が多分違うのだろう。無理やり後から付けられたのがよく分かる。

「多分、こいつの名称なんじゃないですか？ 犬って読めるように無理やり付けたとか」

英文が無理やりすぎるところから行くと、「dog」が先に合って、後からそれっぽい文章を考えたんだろう。何から何までチグハグな感じのするコイツが、ハチ公タワーたる由来？

考えてもきつと、答えは出ない。時間もそこまで残されていない。ハチ公（仮称）の周りを探る。横の方に、外部操作っぽいパネルとキーボードが付いていた。入力を表示するモニターもついているのはありがたい。

外部操作用のパネルを叩き、電源を入れた。独自OS、オグドアドが立ち上がり、インタープリタの相手役らしいハチが、次の入力を促すメッセージを表示した。「アレ、ICカードは？」

米利刑事が、パネルの近くを眺めながら呟いた。織林刑事は、ハチ公の反対側をじっくり眺め、「ココにありますよ」とカードリーダーっぽい窪みを指差した。「めんどくさいな」

「普段使わない機能なら、そんなもんですよ」

僕は米利刑事の意見に賛同しながら、ハチにメッセージを入力する。インタープリタというか、チャットボットみたいなものらしく、数回メッセージをやり取りすると、凍結申請の段取りに進んでくれた。

月が南中にあるという条件はもうしばらく問題ないらしく、対面のカードリーダーに僕がICカードを持って触れながら申請すれば、次のステップに進むらしい。隣にいた桂花さんと手順を確認し、僕はカードリーダーの前に移動した。ICカードを取り出し、カードリーダーにかざして、彼女の合図を待つ。

「行くよ。三、二……」

桂花さんの声に合わせて、カードを当てた。カードを当てている間、カードリーダーの小さなランプが緑に光っている。しばらく待つと、ハチ公の両目が微かに光った。

「うん。OK」

桂花さんがこちらに顔を向け、指で丸を作った。僕はICカードを離し、カバンにしまった。モニターが見えるところへ移動すると、「送信中」と進捗状況が表示されていた。無事に、月面基地へ飛んでいるような絵が出ている。

モニターの隅に目をやると、時刻は午前六時三八分。十分ほど待つと、「送信完了」に表示が切り替わった。

「コレで、いいのか？」

米利刑事は横からモニターを覗きながら言った。僕は、「さあ？」と答える。

「私、聞いてみる」

桂花さんはケータイを取り出したが、圏外らしい。織林刑事は「コレを使って」とかなりゴツイ端末を差し出した。衛星電話の一種らしい。

「架ける分には、普通の使い方で大丈夫だから」

織林刑事からそれを受け取ると、桂花さんは自分のケータイで番号を表示しながら、ゴツイ方の端末に番号を入力した。番号を入力し終えると、すぐに耳に当たった。

「あ、もしもし、お父さん？ グレゴールさんに連絡取れる？」

レスポンスが良くないのか、彼女は話しかけてから少し遅れて、相槌を打つ。そのまま向こうの空湖さんとやり取りして、電話の向こうにグレゴールさんを呼び出した。桂花さんはそのまま、僕に端末を差し出した。

僕はそれを受け取り、モニターの前で表示を見ながら彼に状況を伝えた。

「コレで、いいんですよね？」

僕が言葉を発してから、数秒待つて返事が返ってきた。電話越しにも、くぐもつた合成音声がかえってくる。

「受付完了にならないければ、凍結申請は完了しません」

「このまま待つていれば、ステータスは変わりますか？」

グレゴール氏の返事が、すぐに返つてこない。数秒の待ち時間もどかしい。

「いいえ。変わりません」

彼の回答は、期待通りのモノではなかった。しかし、やれと言われたことは全てやり、「送信完了」にもなった。ハチ公を上まで戻さなくても送信できたということは、コレがココにあることは問題ないはず。

「考えられるとしたら、優先される条件が満たされていないからでしょう」

優先される条件？ 凍結申請の前に満たす条件つて何だっけ。

モニターの片隅、時計を横目で見ながら頭を必死に働かせた。さっきまでまだ時間があると思つていたのに、いつの間にか午前七時を回ろうとしている。

時間がないと焦つていると、遠くの方で何か物音がした。風に紛れてよく聞き取れないが、音の主はだんだん近づいているように思う。音のする方へ視線を向けると、灰色の肌と黒のコートを羽織つた男が、ハシゴを登つていた。

彼はこちらを見て、「よう、救世主」と手を挙げて言った。

第四五話

その後ろに見える空は、やや暗い雲が広がり始めた。さっきまでうつすら白い雲が広がる程度だったのに、彼が新たな雲を率いてきたかのようだ。気持ちのいい晴天は、徐々に下り坂へ向かうらしい。

本格的に降り出すにはまだ時間がありそうだが、万が一の場合、人数分の雨具は多分ない。鞆の中にある、骨組みの折れた折り畳み傘ぐらいだ。

僕の目の前で、米利刑事はハシゴを登ってきた男と僕らの間を塞ぐように動きながら、ホルスターの銃を抜いた。織林刑事も、僕と桂花さんを後ろに押しやりながら、その横につく。僕はそれをしっかりと見ながら、カバンの上から手を当てて傘の存在を確かめる。桂花さんの手によって曲がってしまった時のまま、ひしやげた形で中に収まっていた。

米利刑事は銃口を男に向けながら、「奴は誰だ？」と僕に尋ねた。相手の顔を見てパツと思ひ当たる節はないが、言動や状況から鑑みるにアイツだろう。

「多分、真境名です」

「真境名だと？ 奴は君が排除したはずでは……」

米利刑事の疑問に、僕も首を傾げた。僕が意識を失う直前、彼と彼の大事な人を確かに撃った。その時の指先の感覚、目の前の光景は未だにハッキリ覚えている。真境名はともかく、遊川への銃撃は幻覚であつてくれた方がありがたい。

真境名と思しき人物は、コートを靡かせながら、ゆっくりこちらに近付いてくる。

「そこまでだ。そこで止まれ」

米利刑事は彼の足元を撃ち、足止めさせる。織林刑事も右手で拳銃を抜き、米利刑事の横で控えている。同時に、左手を僕らの方へ向け、必死に動かしていた。小声で、「通信機、通信機」と繰り返した。僕は素直に従い、そのまま渡した。

織林刑事は受け取るなり、まだ続いていたグレゴール氏との通信を切り、新しい場所へ電話をかけようとする。彼女がそれを耳にあてがおうとした瞬間、持っていた左手ごと撃ち抜かれた。

真境名はこちらに銃口を向け、笑顔を浮かべた。撃たれた織林刑事は、穴が空

いた左手を抑えて悶えながらも、真境名を睨みつけている。

「お互い、野暮は止しましょうよ。人生最後の貴重な一時間、少しでも有意義に過ごしたいじゃないですか」

真境名は、米利刑事に語りかけるように言った。そこには、幾らかの侮蔑も混ざっているように思えた。それを感じ取ったのか、米利刑事はやや苛立った様子で真境名を睨みつけている。彼は負傷した織林刑事を後ろに下がらせ、少し前に出て銃を構え直した。

「お前を撃てば、我々の勝ちだ」

「無駄ですよ。予備の私は、いくらでもいる」

真境名の言葉に、米利刑事は表情を曇らせた。

「何なら、ここで死んでみせようか？」

真境名は、僕らに向けていた銃を自分のこめかみに持つていく。米利刑事が「止せ」と止めなければ、流れるような動きで躊躇うことなく、引き金を引いていただろう。

「つたく、本当にツマライ奴らだな」

真境名は鼻で笑い、口角を上げて冷たい笑いを浮かべながら、銃を下ろした。銃口は腕に従って自然と床に向けられ、特に僕らを捉えている様子はない。ただ、織林刑事の手を撃ち抜いた速さを鑑みれば、微塵も油断できない。

「それで、用事は何だ？ 一時間、そこでポーツとする趣味はないだろう？」

米利刑事は「余計なことをするな」と言わんばかりに僕の方を向き、真境名に近付き過ぎないように、左腕を僕の前に出した。

真境名はタワーの端に近寄り、縁の向こうに広がる街や海に視線をやった。上空の雲はいつの間にか分厚くなり、かなり黒ずんで来ている。

「親父が見ていた景色を眺めて死ぬつても、悪くないと思つてね」

彼は転落防止の段差を超えて落下しないように気をつけながら、遠くを見ている。

今にも降り出しそうな天気を反映し、海の色もあまり綺麗とは思えない。好条件とは思えない眼下の景色を眺めていた彼は、僕の方へ顔を向けた。

「あとは君らの悔しがる顔を見たかった。それだけさ」

真境名は穏やかな笑みを浮かべて言った。

「私と詩恵留を殺してまでやり遂げようとした君の、失敗する様を見届けに来たんだ。罪深い救世主が、ただの罪人に墮ちる瞬間を」

真境名は僕をジッと見つめながら、元の場所へ移動した。米利刑事は最低限の威嚇を込めて銃口を向けるが、引き金を引く気配はない。その眉間や額には、脂汗が滲んでいる。

「その瞬間を、ただジッと待つのも退屈だろう。私と君が、ウラジミールとエストラゴンなら話は別だがね」

真境名に銃を向けていた米利刑事は、顔だけこちらに向けて「おい、どういう意味だ？」と尋ねた。左手の痛みを耐えている織林刑事は、「私がポツツオで、先輩がラッキーつてことですよ」と答えた。米利刑事は「俺がラッキー？」と首を傾げ、まだ意味が掴めていないらしい。

上空から、ゴロゴロと雷鳴が聞こえてきた。稲光はまだ見えないが、そのうち本格的な雷雨になるらしい。真境名は時折ピカピカ光る雲を見上げる。

「神のご来光、審判を待つにはふさわしい場所か。それを木に見立てて、不条理劇でも繰り広げるか？」

彼は、ハチ公が取り付けられている黒い柱を指しながら言った。自ら機械仕掛けの神を名乗る時点で、不条理劇の脚本兼演出であるのは揺るぎない。

「まあ、ただの冗談だ。さあ、そのポツツオ。お前のラッキーを私に差し出せ」真境名はスツと腕を伸ばし、僕と僕の隣を指差した。米利刑事は彼の言葉に混乱しながら、僕らの方を見る。僕はチラリと、隣にいた桂花さんを見た。

「そうだ、ポツツオ。物分かりがいいじゃないか」

真境名は、やや大きな声で言った。僕と視線がかち合った桂花さんは、「えっ、私？」と自分を指差した。彼女は僕に、「私が、何？」と自然な問いを発した。

僕は、上手い答えを見つけれない。

「私の大事なものを奪った罪だ。贄を捧げて償うがいい」

答えを迷う僕に、真境名は「さあ、早く」と付け加える。

「私が行けば、良いつてことね」

桂花さんは、真境名と僕のやり取りで色々と察したらしい。真境名は、「その通りだ、早く来い」と彼女を手招きする。僕は真境名の元へ行こうとする彼女の手を掴み、引き止めた。米利刑事も、織林刑事も、彼女に「行くな」と告げる。

桂花さんは、僕の手をさらに上から包み、「大丈夫だから」と震える声で言った。重ねられた柔らかかな手も、小刻みに震えている。

「一つだけ、条件がある」

桂花さんは顔を上げ、真境名に言った。

「私はどうなつても良い。その代わり、みんなを助けて」

「聞いたか、救世主？ 健気な願いじゃないか」

真境名は一瞬下を向いて、目頭を抑えた。顔を歪ませ、本当に涙を流しているらしい。彼は鼻を吸りながら、顔を上げた。涙を流しながら、微笑んでいる。

「その願い、確かに聞き届けた。さあ、早くこっちに来い」

真境名は桂花さんに腕を伸ばす。米利刑事と織林刑事は、二人揃って真境名に銃を向けるが、間に桂花さんがいて引き金を引けない。僕は彼女の腕を掴んだまま、どれだけ強く振り回されても、その手を離さない。

伸ばした腕に、雨粒が当たる。一瞬の冷たさを肌感じた。とうとう雨が降ってきたと、一瞬顔を上に向ける。引つ張られた瞬間、視線を元に戻す。眉根を寄せ、心底怒った表情に、水滴が頬を伝って流れる桂花さんの顔が見えた。

「——離せて、言ってるの」

桂花さんの自由な方の腕が、僕の目の前に伸びて来た。強烈な張り手が、僕の頬に叩きつけられる。僕はその一瞬、あまりの痛さに手を離す。その瞬間に、桂花さんは手が届かないところまで走っていた。

真境名は自分の下に駆け寄る桂花さんを、胸の中に迎え入れる。銃を構えた現職の刑事が二人もいるのに、二人とも桂花さんがいるおかげで、下手に手が出せない。

——イヤだ。何かを手放すのも、何かの犠牲になるのも、もう沢山だ。

僕は、離れていく桂花さんに、必死に腕を伸ばした。彼女に触れそうなところで、真境名の銃口が僕の額に突きつけられる。

「俺の女だ。汚い手で触るんじゃない」

米利刑事が咄嗟に僕の首根っこを掴んで、後ろに下がる。織林刑事は前に出て、真境名に銃を向ける。真境名は桂花さんを盾にして、彼女のこめかみに銃を向けた。

「下がれ、下がれ。もつとだ、もつと」

真境名は荒々しく拳銃を持った手を動かし、僕らを柱の方へ下がる。自分もジワジワ後退り、ちよつとやそつとでは手が出せない距離を取った。

第四六話

「ちょっと、話が違うじゃない」

桂花さんは真境名の腕の中でもがきながら、彼を必死に非難するが、真境名は全く動じない。彼は彼女が暴れるのを力で押さえ込み、「うるさい女だな。これだから、ガキは嫌いなんだ」と吐き捨てる。

「死にたくないなら、大人しくしろ」

真境名に銃を突きつけられ、彼女は激しい抵抗を諦めた。

米利刑事はその様子を見ながら、悔しそうに地団駄を踏んだ。

「ああなるって、分かってただろうに。どうするんだよ、おい」

米利刑事はそう言いながら、僕の方を見た。僕の顔を見られても、なんともしやうがない。真境名が約束を反故にして人質になるだけなのは、彼女にも予想がついただろうに。自分の手が真つ赤になるのも構わず、僕の頬を張り飛ばしてまで向こうへ行った彼女の考えが、僕には全く分からない。

上の方で、一瞬光が走った。心を不安にさせるあの音が、頭の上で鳴り響く。屋外で雨粒を浴びながらの雷は、流星にちよつと怖い。一瞬ビビったのは僕だけではなく、織林刑事や、真境名の下にいる桂花さんも、身体をかがめた。光から頭を背ける。

真境名は桂花さんの頭を撫でながら、彼女を落ち着かせるためか、何やら言葉をかけている。もつとも、彼女の顔や嫌そうな反応を見るに、その声は逆効果なようだ。

僕は、徐々に雨脚が強くなり始めた空模様にも気を取られた。

「どこ見てんだ。集中しろ」

米利刑事の声に、反射的に「すみません」と答え、大人たちの話に混ざる。

「時間もあんまりないぞ」

米利刑事は腕時計を僕らに見せた。まだ一時間もあると思っていたのに、あつという間に、残り時間は三〇分を切ろうとしていた。何かに気を取られて、ボサつとしている暇はない。

織林刑事は、向こうの方でふたりの世界に入ろうとしている真境名と桂花さん

に視線をやった。

「なんとかして奴を排除したところで、無駄なんですよんね」

織林刑事の言葉に、米利刑事が渋面を作って頷いた。今から応援を要請して、アイツが生み出した「予備」とやらを全て排除するのは難しい。そもそも、どこにどんな形で潜伏しているのかも、明らかにになっていない。

凍結申請が、「送信完了」から先に進まないのは、僕より上位の有資格者、真境名が居るから。予備とやらも、恐らく同等の存在なのだろう。彼は、桂花さんのことを助けると言っていたが、あの様子では何かの手を打つつもりもないらしい。

米利刑事は意を決した表情で、真境名の方へ近付いた。

「お父さんも、この関係者だったらいいな。こんなことをして、ご両親に申し訳ないとは思わないのか」

真境名は顔を上げ、米利刑事の方を見た。

「今更泣き落としですか。流石に古すぎですよ」

真境名は両肩をすくめた。これ以上はコミュニケーションをする価値もないと判断したのか、それつきりですっぽを向いた。雨に煙る街や海を見下ろしている。米利刑事は「くそ。ダメだったか」と、本気で残念そうに肩を落とした。織林刑事はそれを見て、「当たり前ですよ。何、考えてんですか」と厳しい口調で言う。二人とも、雨に打たれて久しく、どちらも頭の上から足の先まですつかりずぶ濡れになっている。

真境名の横で、彼の行動に付き合わされている桂花さんも、それは変わらない。雨雲で陽が翳ったせいで、元々の肌寒さがより一層強まっている。強い風が吹けば、体温はどんどん失われていく。

僕が見ているのを察したのか、真境名は桂花さんの手を引いて歩き始めた。ハシゴの方へ向かっているらしい。桂花さんはささやかな抵抗を続けるが、彼に腕を引かれているせいで、引きずられる格好になる。

僕はカバンの中を探り、折り畳み傘を掴んだ。右手にそれを持ち、両手を頭の上に上げる。何も持っていないことをアピールしながら、二人の方へ近付いた。

僕の接近に気が付いていた真境名は足を止め、こちらに振り向いた。

「今更、何の用だ？」

「傘ぐらい、持っていけばどうかと思って」

僕は真境名に向けられた銃を警戒し、少し離れたところで立ち止まった。

「そんなガラクタ、今更要らん」

彼は僕の持っている傘が、中程から折れ曲がっているのを、しつかり確かめた。その目で、桂花さんの顔を見る。

「お前の形見として、受け取ってやろう」

真境名は銃を持ったまま、床を差した。僕は彼に視線を定めたままゆっくりしやがみ、傘を足下に置いた。彼は「そうだ。それでいい」と言い、僕に下がれと手で合図した。僕は、傘を置いた場所から二、三步下がった。

真境名は、桂花さんの背中に銃口を当て、彼女を傘の方へ押した。

「取りに行け。ほら」

彼女の背中に狙いを定めたまま、彼女を先に歩かせる。彼女が傘へ近づくと共に、真境名も徐々に近付いてくる。自信に満ちた、実に悠々とした足取りだった。

桂花さんの顔を見やると、力強い目でじつと僕を見つめていた。僕と視線がかちあうと、彼女は身を低くしてコチラに走り寄った。不意を突かれた真境名は

「くそつ、コイツ」と叫び引き金を引くが、近くへ落ちた雷に視界を奪われ、桂花さんの足首を撃つのが精一杯だった。僕の後ろで構えていたらしい、米利刑事、織林刑事の銃が桂花さんの逃亡を援護する。そのうちの一発が真境名の右肩を撃ち抜いた。

僕は足首を撃たれ、目の前に倒れている桂花さんに駆け寄った。彼女は、撃たれた箇所を手で押さえながら、もう片方の手で僕がそこへ置いた傘を引き寄せた。「あとは、頼んだ」

彼女は僕の胸に折れた傘を押し付ける。僕は意味が分からないなりに、それを受け取った。後ろから、米利刑事、織林刑事が駆け寄ってきて、僕らを守ろうと前に出る。肩を撃ち抜かれた真境名は体制を整え、銃を左手に持ち替えていた。

激昂した様子で、呼吸も荒い真境名は銃を構え直し、銃口をコチラに向けた。

「この野郎っ！」

米利刑事は一気に距離を詰め、真境名の腰にタックルを決めた。狙いを外した銃弾は、織林刑事の前髪を打ち抜き、空中へ抜けていった。織林刑事は、雨で足を滑らせ、仰向けに倒された真境名の動きを止めるべく、米利刑事のサポートに回った。

「ほら、早く」

桂花さんは、ボサッと突っ立っている僕の背中を押した。僕は傘の折れた骨組みをじつと見つめ、二人に抑え込まれている真境名に視線をやった。僕は傘を床

に叩きつけ、余計な部分を取っ払う。

「脚を抑えて」

僕は、暴れる真境名を押さえつける二人に、追加の注文を叫んだ。米利刑事は「何、脚だ？」と文句を言いながら、織林刑事との連携の末、なんとか右足を押え込んだ。僕は雄叫びを上げ、途中折れて鋭利な切断面が出ている取手の先を、固定された真境名の足を目掛けて突き刺した。足裏、土踏まずのところに、グリップの部分を残して深々と入っていった。

真境名の悲鳴がそこら中に響き渡った。まだ息はあるようだったが、暴れる体力は無くなつたらしい。大人しくなつた真境名を米利刑事が一人で抑え込んだ。

「時間がないよ。ほら、早く」

真境名に留めを刺して放心していると、立ち上がった桂花さんが僕に声をかけてきた。彼女は何の躊躇いもなく、僕が突き立てた傘を引き抜く。真つ赤に染まつた鉄の棒には、真境名の血や肉片が付着していた。

彼女はそれを、僕の右掌に擦り付け、柱の方へ向けて僕の背中を押し出した。

「いいから、走れっ」

僕にそう命じた彼女も、鉄の棒を投げ捨て黒い柱に向かって走り出した。足首を負傷しているとはいえ、彼女の方がやっぱり足が速い。彼女はハチ公の操作パネル側に回り、僕をカードリーダーの方へ行けと顎で示した。

僕はまだ事態が飲み込めない状況の中、このカードを取り出して、真境名の血がこびりついたままの右手で、カードリーダーにそれを押し当てた。一瞬、ハチ公の目が小さく光った。

初出 令和四年一月二日 noteにて公開

第四七話

「間に合った」

向かいにいた桂花さんは、気合いが抜けたようにその場で真っ直ぐ下に尻餅をついた。僕は状況が飲み込めず、操作パネル側に回ってモニターを覗き込んだ。凍結申請の進行状況が「送信完了」から「受付」に変化していた。

「アレ、なんで？」

さつきと同じ処理が、急に次のステップへ進んだ理由が分からない。桂花さんは、困惑している僕の右手を指した。

「協力が得られないなら、細胞をサンプリングして、追加の申請をすればもしかしたらと思つて」

彼女が指す僕の右手には、真境名の血液や微細な肉片がまだ残っている。僕はさつき、この上から手のひらで押し付けるように「カードをカードリーダーに押し当てた。申請に必要な媒体に、真境名の細胞、遺伝情報も触れている。

凍結申請が通らないのは、最上位資格者が存在しているから。では、その最上位資格者が凍結申請を行えば、送信完了から先のステップに進むのではないか。彼女はどこかの段階でそれを考え、真境名に捕まるふりをしてその一瞬、油断が生まれる瞬間を、虎視眈々と狙っていたらしい。

「先に一言でも言ってくれば良かったのに」

僕がそういうと、彼女は「敵を欺くには、まず味方からつていうじゃない」と満面の笑みを浮かべた。僕もその笑顔に釣られて笑ってしまい、「何だよ、それ」と呟いた。

「おい、何がどうなった？」

すっかり大人しくなった真境名に手錠をかけた米利刑事が、彼をしょつぴきなから近付いてきた。織林刑事は、真境名の使っていた銃を慎重に回収し、その後から付いてくる。米利刑事は腕時計を確かめた。

僕は慌てて、モニターの下にある時計へ目をやった。いつの間にかリセットの予定時刻を過ぎている。桂花さんと二人で雑談をしている間に、タイムリミットの瞬間を見落としてしまったようだ。

モニターの片隅で自動的にプレイヤーが立ち上がり、八時ちょうどを過ぎたと伝える紫音さんの天気予報が始まった。いま降っている雨はそのうち上がり、今日の日中は好天が広がるらしい。気温もぐんぐん上昇するとか。

今日も、暑い一日が始まる。暗雲がまだ頭上に広がる中、眼下の海や街を眺めながら、ハチ公を元の位置へ戻すために、上向き三角のボタンを長押しし始めた。

その後、僕と桂花さんとは雨に濡れたままの身体で長時間振り回されたため、翌日から季節外れの風邪を引いてしまった。彼女はその日のうちにケロツと治ったらしいが、僕は二、三日ほど授業を休むことになってしまった。

街を騒がせた事件は一応の解決を見せ、警察は全力で真境名の「予備」とやらの確保に当たっているらしい。彼の潜伏先も、ザ・シテイや空湖さんの協力を得ながら、しらみ潰しに探し、新たに見つかった危ないものも、改めて警察とザ・シテイが連携を取って管理していくことになったようだ。

学校も街も、事件が起こる前の姿を取り戻しつつある。チャルカ教とザ・シテイ、町の医療機関、行政の連携により、事件による不都合な記憶の洗浄、偽の記憶を刷り込む作業も順調に進んでいる。リモートが終わった教室へ復帰した時には、機械と人の対立なんて微塵もなかったような、平和な空間になっていた。

テツちゃんや稲荷さんを訝しむこともなく、僕と桂花さんが、アレが異常だったんだと思えば、何事もなかったこと出来る。入駒や駿が最初からいなかったことになるのは寂しいが、それさえ飲み込めば平穏な毎日が手に入る。僕らが忘れさえないければそれで良いと、思い込むことにした。

マトモにリモート授業をこなす時間が確保できず、体調不良で事前のテスト勉強も間に合わなかった僕は、ボロボロの期末テストを迎えていた。史上最悪の手応えに、両親に何と言いつくするか頭を悩ませていると、帰宅途中で待ち構えていた米利刑事に遭遇した。

彼はいつものように右手を挙げ、「よう」と挨拶した。僕は「どうも」と挨拶を返す。

「急に、何のようですか？」

「試験終わりに、ドライブはいかががかと思つてね」

彼はパトカーの後部座席を開け、乗つていけと目で合図する。

「そんな嫌そうな顔するなよ。大した用事じゃないさ」

パトカーに乗るのを躊躇っていた僕に、彼は「良いから。ほら」と僕の背中に

手を当て、強引に車内へ押し込んだ。

後部座席で、相変わらず強引だなど思いながら座り直していると、運転席の織林刑事と目が合った。彼女は「どうも」と会釈する。真境名に撃たれた左腕は急拵えなのか、彼女の身体には見合わない、一回り大きなサイズになっていた。

当然のように助手席に乗り込んだ米利刑事の合図で、パトカーは学校の前から夢洲署へ向かって走り出した。車窓から見える町の様子に、事件の痕跡は微塵も感じられない。唯一の影響は、西暦の先頭が三になっているぐらいだろうか。

「元気にしてたか？」

事件の後も、警察やザ・シテイ、チャルカの人たちとはそれなりに連絡を取っていたはずだが、米利刑事は初耳かのように、ミラーで僕の顔を見ながら言った。

「身体はすっかり元気ですけど」

「試験はズタボロだったって顔か」

米利刑事は、僕の顔を見てズバツと核心を着く。隣でハンドルを握っていた織林刑事は、「無神経が過ぎますよ」と彼に抗議した。米利刑事は、「なんだよ、お堅い奴だな」と突っ込んだ。

「お前だって、試験の一つや二つ、ズタボロの時ぐらいあつただろ？」

「そんなもん、無いですよ。先輩と違って、私は優秀なんです」

米利刑事は、「えく、お前が？」とケラケラ笑いながら言った。少なくとも、

米利刑事には分からなかったウラジミールと、エストラゴンのことは知っていた。後部座席で、前に座る二人の痴話喧嘩を聞いているうちに、パトカーは夢洲署に到着した。真境名の身柄は、ザ・シテイに回収されていて、ここにはないらしい。先に降りた米利刑事の案内で、最初に通された小部屋に入った。真ん中にある小さな机の上に、入駒に渡したものと同じ傘が、ビニール袋に入れて置いてあった。

米利刑事は僕を奥の椅子へ座らせ、正面の席に腰を下ろした。後から入ってきた織林刑事は、彼の隣に座る。

「もう、原本を保管する理由もないしな。ほら」

新品のように綺麗なそれを、米利刑事は差し出した。僕は両手でそれを受け取る。警察が複製した物とは違う、真正銘の僕の傘だ。まさか、戻ってくるとは思わなかった。僕が傘を受け取ったのを確かめると、米利刑事は颯爽と立ち上がった。

「え、コレだけですか？」

僕がそう言うと、米利刑事はこちらを振り返りもせず、「ああ、そうだ」と答え、織林刑事に「あとは頼む」と言つて、部屋を出て行つた。傘を受け取るだけなら、わざわざ連れて来なくても良いのに。

「面倒臭いんだよね、あの人」

織林刑事は、米利刑事の出で行つた方を見て呟いた。彼女は「さ、行こうか」と立ち上がった。彼女に案内され、再びパトカーに乗り込んだ。彼女の運転で、家の近くまで送つてもらおう。

「じゃ、また連絡するね」

僕がパトカーを降りると、彼女は運転席に収まつたまま窓を開け、僕に手を振つた。僕が彼女に手を振りかえすと、織林刑事はパトカーを静かに発進させた。

今季初の台風上陸の予報が伝えられ始めた週末、桂花さんから呼び出しが入つた。父さんや母さんは、「クラスメートとデート？」と囁し立てたが、呼び出された江辺野家へ行くと、玄関横のガレージで空湖さんが待っていた。桂花さんは、先に車に乗り込んでいるらしく、助手席の窓から顔を出し、僕に挨拶した。

「じゃあ、行こうか」

空湖さんは行き先を告げず、僕に後部座席へ乗り込むよう促した。僕は促されるまま、桂花さんの後ろの席に乗り込み、空湖さんは運転席に乗り込んだ。シートベルトを締め、何も言わずに車を発進させた。

初出 令和四年一月二二日 noteにて公開

第四八話

「君はコレから、どうするんだ？」

空湖さんは、しつかり前を見ながら言った。そう言われても、今日の予定や目的は特に聞いていない。答えに迷っている僕をミラーで見た空湖さんは、「そうじゃなくって」と付け加える。

「身の振り方というか、出処進退というか、君の将来の話だよ。ウチの桂花もだけど、君も一生、ザ・シティの監視下に置かれるんだろう？ 桂花は研究職志望だから、ゆくゆくはザ・シティに関わるとして、君の今後はどうなのかと思っ
ね」

空湖さんの言いたいことがやっと分かった。フライの落下地点予測もまともに処理できないド文系、この間の期末テストもやっぱ悲惨だったのも判明した今の僕に、その話も答えにくい。追試でなんとかかなりそうな雰囲気もあるけど、現役での大学受験は厳しい気がする。

「君のところにも、そういう接触はあるんだろ？」

空湖さんは、僕の目を見て言った。僕は最近の出来事を思い出しながら、口を開く。

「ザ・シティからは来ないですけど、チャルカの方から、次のグレゴールにならないかって打診は何度か来ました」

「次代の監視者か。いいね、似合ってるじゃないか」

空湖さんは、声を出して笑った。彼の脳裏に、あの衣装を纏った僕の姿でも浮かんでいるのだろう。どちらかというと理系集団のザ・シティよりは向いていると思うが、例のベネチアンマスクと、「見張るもの」の名を継ぐのは遠慮したい。

「じつくり悩め、青少年。それが青春さ」

空湖さんが運転席でうるさいぐらいに笑うと、車は駐車場に入った。そこは、陸上競技場の駐車場だった。

空湖さんが車を駐車スペースに入れると、桂花さんがスッと車外に出た。彼女は花束を手に、後部座席のドアを開ける。

「ほら、行つといで」

空湖さんはシートベルトを外しながら言った。彼は、運転席のリクライニング

を倒してケータイを取り出した。一人で面食らっていると、ドアを開けてこちらを見ていた桂花さんにも、「ほら、行くよ」と促された。

彼女に強引に車外へ引きずり出され、二人で駐車場を抜け、陸上競技場の裏へ向かう。左足首を撃ち抜かれた桂花さんは、左脚だけケイ素製の脚に取り替えていた。急増つばい織林刑事の左腕とは異なり、左右のバランスは悪くなさそうだが、まだ完全には馴染んでいない。随分と、歩きにくそうにしていた。

彼女と二人で、お供物の痕跡がなくなつた場所に辿り着いた。入駒の存在はなかつたものとされているので、ここで彼女が亡くなつた事実も覆い隠されている。何もない、人通りの少ないただの道端に、桂花さんは花束を置いた。

彼女が両手を合わせるのを見て、僕も慌てて両手を合わせた。目を閉じて何を唱えるか迷っている間に、桂花さんは目を開けた。彼女は足元の花束を見つめている。

「入駒さんも、災難だね。昔告白した男と、あんまり喋つたことのないクラスメートの女が並んで、一緒に手を合わせてるなんて」

「あの子は気にしないよ、そんなこと」

桂花さんは僕の方を向いて、「分かつてないなあ。全く」と肩をすくめる。急に強い風が吹いて、花束から顔を覗かせている小さな花の花びらが、何枚か散つた。

桂花さんは風に吹かれて暴れる髪を手で押さえながら、「次行くよ。次」と言った。僕はもう一度その場で手を合わせ、駐車場へ向かつて歩き出した彼女を追いかけた。

空湖さんの運転する車は、ハチ公タワーの足元へ向かつた。隣接する公園指定の駐車場へ車を止め、今度は彼も一緒に車外へ出た。江辺野親子に先導され、ハチ公タワーの側まで来る。

僕はつい頭上を見上げ、この間はこの上の方まで行つたんだと、想いを巡らせた。ハチ公タワーの由来も、俺は知ってるんだぜと心の中で思っていたら、大きな金属音に思考を遮られた。音の方へ視線を向けると、空湖さんが中に入るドアを解錠していた。

「さ、行くよ」

彼は自然にドアを開け、ボサつとしていた僕を手招きする。桂花さんは、僕より先に中へ入つた。内部は、この前入つた時と何も変わらない。こんな感じだつ

たと、数日前を思い出しながら周りを眺めていたら、空湖さんは下へ向かう螺旋階段に足をかけていた。

「何してるの。行くよ」

入ったところから動かない僕を見て、桂花さんが声を掛けてきた。僕は慌てて彼女の背中を追いかける。空湖さんは、階段の先へ進むドアも持っていた鍵で開け、ズンズン下へ降りていく。

彼に導かれるまま階段を降りていくと、その先には広大な墓地が広がっていた。空湖さんは、案内図も見ずにどンドン先へ行く。比較的新しそうな墓標の前で、急に立ち止まった。名前は特に掘られていないが、以前、ザ・シテイからそんな通知を受けた気がする。

空湖さんは、桂花さんと手分けして、三つの花束をそれぞれの墓標に置いた。奥の方から順番に、入駒、ばあちゃん、駿の墓になっている。

「地上で抹消された人たちの墓は、ここに移される」

彼はそう言つて、墓標の前で手を合わせた。桂花さんも、それに合わせて手を合わせる。入駒の墓も、ばあちゃんの墓も、市営の墓地にあったのに、中身はここに移されている。駿はそもそも、最初からここに墓が造られていた。

「越智くんのことだが、お祖母さんのことは大丈夫かい？」

墓標の前で屈んで手を合わせていた空湖さんは、立ち上がって僕に尋ねた。僕は墓標の前でしゃがみ、入駒、ばあちゃんと順番に手を合わせる。

「海難事故の時に、僕を助けて亡くなったことになったので、何の問題もないですよ」

僕がまだ小さかった頃、この近くから乗船する遊覧船で海難事故に遭遇した。実際は、その時の事故で下半身不随になり、罪滅ぼしも兼ねた僕のヤングケアラー人生は、そこから始まったのだけだ。

今、家族に刷り込まれた偽の記憶では、ばあちゃんのおかげで助かったところだけが残り、後の時間は無かったことになっている。

「そうか。そんな出来事が」

空湖さんは、僕の話聞いて悲痛な面持ちになる。僕は、「もう、随分前のことなんで気にしないでください」と言つた。

駿の墓標の前で、しっかり手を合わせ、目を瞑って長々とアイツに語りかけた。連れてきてくれた二人に「お待たせしました」と伝え、広大な地下墓地を後にする。

ハチ公タワーを出てドアを施錠すると、鍵を持っていた空湖さんは、僕にそれを差し出した。

「持っておかなくて、大丈夫か？」

自由に墓参りをするには必要なものだ。僕は一瞬迷ったが、「要りません」とそれを押し返した。空湖さんは鍵をポケットにしまいながら、「強いな、君は」と呟いた。

その後、週末の現場巡りはサクッと終わり、他に何処かへ立ち寄るでもなく、お昼ご飯だけご馳走になって帰ってきた。江辺野家の玄関、敷居も跨ぐことなく、普通に我が家で晩御飯を食べた。

向こうのお父さんも同伴でお出かけした割に、特にその後の進展はなく、上陸してきた台風も家にこもって難なくやり過ごし、何事もなく追試も終わった。何度かの猛烈な雨の日も過ごし、大規模な土砂災害にも巻き込まれることなく、あつという間に一学期の日程が終わった。

体育館で集まって校長先生のツマラナイ話を聞き、教室で通知表を受け取って、テツちゃんと「ヤバイ」だの「思ったりヤバくない」だの話をしながら、いつものように渡り廊下を渡ったところで、「じゃあ」と分かれた。

妹の世話からも解放されたけど、結局、どこの部活にも入っていない。連日のようにチャルカ教からの遣いも来るが、適当にやり過ごして帰宅部を堪能していた。

家に帰れば、明日から夏休み。久しぶりにできた自由な時間をどう過ごすか考えながら、下足に履き替えた。外は明るいのに、天気雨が降っているらしい。せつかく自転車で来たのに、押して帰らねばならない。

気落ちしながら、カバンの中の折り畳み傘を取り出した。色の濃さに少しだけ気分を盛り上げながら、傘を差して外へ出る。左手のグラウンドで、雨にも関わらず、野球部が声を出して白球を追いかけていた。駿の姿も、古谷の姿も、そこにはない。

目を転じると、陸上部も小雨の中、練習に励んでいた。その中に、練習着に着替えた桂花さんも混じっている。彼女は今日も、走り高跳びの練習らしい。ポールと紅白のバー、その奥にある大きなマットに向かって走り出した。新しい脚はパワーが違うのか、以前より助走のスピードが上がっている。いいタイミングで、バーの手前で踏み切った。

雨粒が日の光で煌めく中、青い空を白いユニフォームが横切った。前は跳べなかつた高さを、易々と超えていく。

見事は背面跳びを決め、桂花さんはマットに沈み込んだ。彼女はマットから出るなり、満面の笑みを浮かべ、自分がやり遂げたことを全身で喜んでいた。他の部員も、彼女の周りを囲って、喜び合っている。

それをフェンス越しに眺めていた僕に気がついたらしく、彼女は「また覗き見？」と、僕に向かって言った。

「甲斐くんのむつつりスケベ」

桂花さんは周りの女子部員と、僕を見て笑った。僕は流石にムツとして、必死に否定する。それを見た桂花さんは、「ごめん、ごめん」と謝った。

「じゃ、またね」

彼女は笑って手を振った。その笑顔に、僕はこれからも翻弄されるらしい。雨が次第に弱まり始める中、僕はグラウンドを背にして駐輪場へ歩き始めた。

(完)

初出 令和四年一月二二日 noteにて公開

塔が見える街

令和八年六月二日 初版発行

著者 長谷川 雄治

発行年月日 八年六月二日

発行者 長谷川 雄治

連絡先 hasegawa@kamenwriter.com

X(Twitter) @kamenwriter01

URL <https://www.kamenwriter.com>

© 2026 長谷川 雄治

※引用・私的利用の範囲を超える無断転載・複製・インターネット上への掲載（SNS・ネットオークション・フリマアプリ含む）・AI学習への利用を禁じます。

※表示やファイルの不具合、記載内容に関するお問い合わせがある場合は、上記連絡先までメールで報告ください。